

二杖又ハ手傘
三頸卷上帶又ハ呼吸器
四草履草鞋ノ類

但村落出張巡回其他非常事變ノ場合ハ此限ニアラス

第三條 制服ヲ着用シタルトキハ必ス釦ヲ掛ケ帽ハ正冠スヘシ但シ帽緒ハ頤ニ掛ケ
ヘキモノトス

第四條 帶劍ノ革帶ハ上衣ノ下ニ締メ刀柄ヲ前面ニ出シ歩行スルトキハ左手ニテ其
柄ヲ握リ自然ノ斜形ヲ失ス可カラス

第五條 外套ヲ着用シタルトキハ其表面ニ帶劍スヘシ但雨雪ノ時ハ此限ニアラス

第六條 外套着用ノ時ハ晝間必ズ襟ヲ折ルヘシ但雨雪其他村落出張巡回ノ時ハ此限
ニアラス

第七條 雨覆ハ雨雪ノ時日覆ハ夏服用ノ期限内ニ於テ用フルモノトス

第八條 外套ハ縮革ヲ以テ兩端ヲ結束シ左肩ヨリ右腋ニ斜擔スヘシ但大點檢ノ時ト
雖モ着用ゼサルトキハ本文ニ從フヘシ

第九條 靴ハ黒色ニシテ常ニ光澤ヲ帶ハシメ晴雨濫用ス可カラス但足痛之爲メ靴ヲ
穿ツコト能ハザルトキハ署長ノ許可ヲ得テ草鞋ヲ代用スルコトヲ得

第十條 捕縄呼子笛ハ袴手帳ハ上衣胸部ノ隠内ヘ收メ表面ニ露出スカラス

第十一條 夜間巡回ニ在テハ玻璃燈ヲ用フ(月夜ハ用ユルニ及ハス)ヘシ但取締其他非常事變
ノ場合ハ成規ノ提灯ヲ用ユヘキモノトス

第十二條 成規ノ服裝ヲ爲シタルトキハ白色ノ襟ヲ着ケ又草鞋ヲ穿ツトキハ足袋並
ニ紺色ノ脚絆ヲ用フヘシ

第十三條 外套及ヒ成規ノ提灯ハ制服着用ノ外ハ用フヘカラス

第十四條 製服用ノ時手袋ヲ用フルハ妨ケナシト雖モ白手袋ノ外禮式ノトキハ之
ヲ脱スヘシ

第十五條 頭髮ハ前壹寸後口五分ヨリ延スヘカラス

第十六條 成規ノ服裝ヲ爲シタルトキハ袴ノ裾ヲ折り裏ヲ露ハシ又ハ肌着煙具ヲ出
シ外面ニ物品ヲ露ハス等不休裁ノ態アル可カラス

第十七條 制服制帽靴其他帶具品ハ常ニ汚染破壊セサル様注意スヘシ

第十八條 左ノ場合ニアリテハ本則ニ從ヒ成規ノ服裝ヲ爲スヘシ

一 一般禮服ヲ着用スヘキ場合

一 夜會其他廉アル宴會ニ臨ムトキ

一 上官ノ巡視アリタルトキ

一 自家親屬其他ノ賀儀葬祭

○本縣訓令第一一二號 二十二年五月四日(警察署)
巡査着服期限左ノ通之ヲ定ム(全分署)

但時宜ニ依リ期限ヲ伸縮スルコトアルヘシ

一 夏服 自五月十五日
至九月三十日

一 冬服 自十月一日
至五月十四日

○本警規第一二號 二十二年四月廿四日(警察署)
警察署内小使被服給與概則左ノ通り相定メ費途ノ義ハ定額中廳費備品費ヨリ支辨ス
ヘシ

但明治十九年三月規乙第十三號ハ施行ノ日ヨリ廢止ス

小使被服給與概則

第一項小使ニ別紙雛形ノ被服ヲ給ス
 第二項上衣袴ハ毎年夏冬各一組ヲ給シ夏服ハ五月十六日ヨリ九月三十日マテ冬服ハ十月一日ヨリ翌年五月十五日マテ着用セシム
 第三項雨具笠ハ無期限トシ破損古朽ヲ持テ新品ヲ給ス
 第四項解雇等ノ節期限内ノ被服ハ返納セシムルモノトス
 第五項故意ヲ以テ被服ヲ破損シタルモノハ其代價ヲ辨償セシム但過誤懈怠ニ依リ破損紛失スルモノト雖モ時宜ニ依リ本條ヲ適用ス
 第六項被服ハ時々洗濯セシメ常ニ清潔ナラシムルヲ要ス
 (別紙雛形ハ略ス)

○本警訓第四四號 二十二年六月十七日 (龍岡警部長ヨリ 各署分署ヘ)
 巡查服裝及帶具心得第一條ノ但書ハ被監視人ニ認印ヲ與フル等姿勢服裝ノ嚴正ヲ要スル場合ニアラサル義ト心得ラルヘシ

○内務訓令第六五二號 二十二年九月二十四日
 本年九月二十一日閣令第二十五號巡查制帽制服表欄内羅紗地任用ノ件追加相成候ニ付テハ明治十三年當省乙第九十三號警部巡查給與規則第九條被服器具保行期限ハ適宜相定ムヘキ旨掲ケ置候得共羅紗服保存期限ノ義ハ夏服着用月ヲ除キ十二ヶ月間實施スヘシ

右訓令ス

○敕令第百二十二號 二十二年十二月二日
 警察官及消防官帶劍ノ制左ノ通定ム
 但明治二十四年一月迄ハ從來用ユル所ノ刀劍ヲ佩用スルコトヲ得

劍制圖例

短 刀		名
消防司令副長	消防司令長	副 總 監
同	同	總 監
同	同	鐵 鍔
同	同	鐵 鍔
白 敷	藍 駁 絲金線三條背面ヲ 覆フタル金具ハ金 色地ハ石目櫻唐草 ヲ置ク	鐵 鍔 渡尼結兒トシテ兩 箇ノ約鑲ヲ付ス
高等官ハ黑革鞆口 日章唐草	同	同
同	同	同
同	同	同

帶劍短	帶刀	各	劍
消防司令補 消防司長 消防司副長 消防司令 消防司令	消防司令補 消防司長 消防司副長 消防司令 消防司令	消防司令補 消防司長 消防司副長 消防司令 消防司令	消防司令補 消防司長 消防司副長 消防司令 消防司令
同	同	同	同
同	同	同	同
同	同	同	同
同上 但長適宜釣釣革六寸五分	同上 但茄子袋ヲ付セス	同	同

緒	正	名	稱	品	質	前	金	具	製	式
消防司令補 消防司長 消防司副長 消防司令 消防司令	消防司令補 消防司長 消防司副長 消防司令 消防司令	消防司令補 消防司長 消防司副長 消防司令 消防司令	消防司令補 消防司長 消防司副長 消防司令 消防司令	同	同	同	同	同	同	同
銀線 長サ一寸三分 圓徑中央ニテ八分	金線 長サ二寸五分 圓徑中央ニテ九分	金線 長サ帶共二寸五分 圓徑中史ニテ一寸	金線 長サ帶共二寸五分 圓徑中史ニテ一寸	同	同	同	同	同	同	同
銀線同上 同上 緒緋銀線 同上	同	金線九打徑一分五厘 長サ三尺二寸ヲ折返シ兩端ヲ合シ總 ヲ附ス 緒緋 金線巾三分五厘圓徑四分五厘	金線九打徑一分五厘 長サ三尺二寸ヲ折返シ兩端ヲ合シ總 ヲ附ス 緒緋 金線巾三分五厘圓徑四分五厘	同	同	同	同	同	同	同

第一編第七章服裝

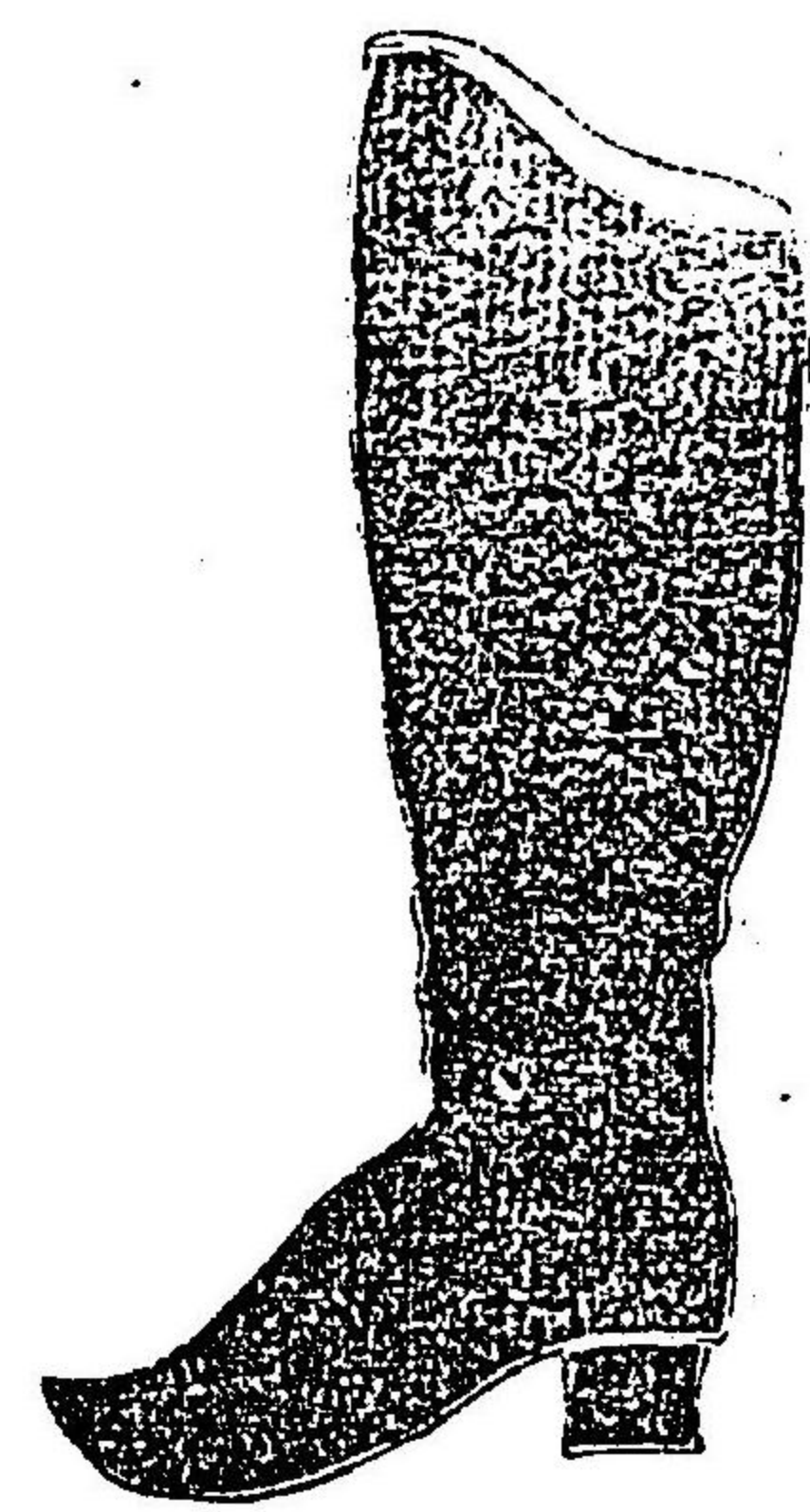
緒			常		
警 署 警 部 警 補 部	消 防 司 令 副 長	消 防 司 令 副 長	副 總 監	總 監	總 監
同	同	同	黑絹絲 長サ帶共一寸三分 圓徑中央ニテ八分	同	同
同	同	同	黑絹絲 訓式ニ各其正緒ノ例ニ同シ	同	同
同	同	同	同	同	同

(劍圖ハ略ス)

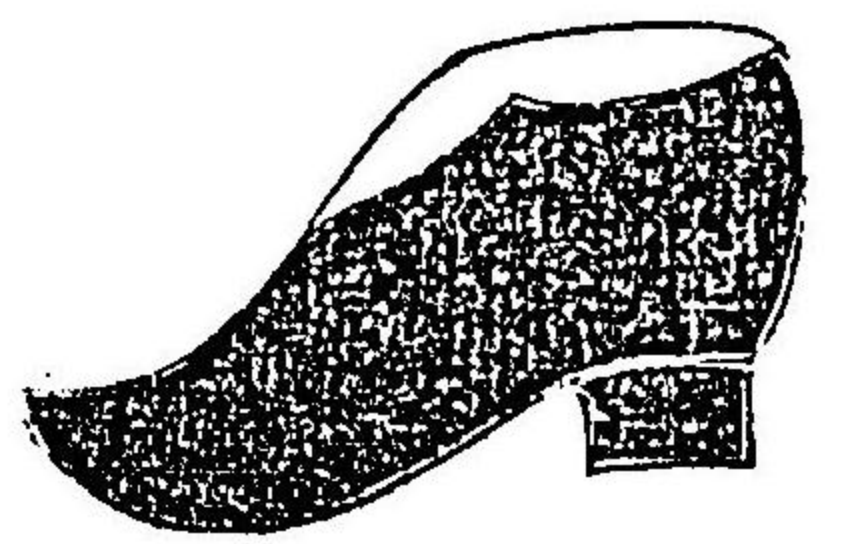
○本縣訓令第五百五十七號 二十三年五月十二日(警察署)
 警察分署
 巡查部長ノ提灯ハ巡查用ト同様ニシテ縣名並ニ警察署名等ヲ記セサル騎馬提灯ト相
 定ム

○本縣訓令第七十一號 二十三年五月三十一日(警察署)
 全分署
 巡查給與品ノ内長短靴ノ義ハ自今左ノ雛形ノ品使用スヘシ但現ニ使用スルモノニシ
 テ雛形ニ齟齬スルモノハ警察署長分署長ノ承諾ヲ得テ其品保存中之ヲ用フルコトヲ
 得

長靴



短靴



黒色革膝頭マテテ限リトス

黒色革紐締

○敕令第二十三號 二十三年七月十一日
 警察官及消防官制服制左ノ通改正ス
 但明治二十三年十二月マテハ従前ノ服ヲ着用スルコト得

名	稱	地質	側	章	製	式	形狀
總監	副總監 警部長 警部副長 消防司令長 消防司令副長 消防機關士	濃紺絨	白絨大線巾八分二條 小線巾一分一條	長靴踵ノ上際ニ止ル 大小線ノ間隙各一分 大小物入兩股各一個ヲ附ス	同	同	同
副總監	警部長 警部副長 消防司令長 消防司令副長 消防機關士	同	白絨大線同二條 小線ナシ	同	同	同	同
警部長	警部副長 消防司令長 消防司令副長 消防機關士	同	白絨巾六分一條	長及物入同	同	同	同
警部副長	消防司令長 消防司令副長 消防機關士	同	各其官等相當ノ側章ヲ附ス	長襟上ニ止ル 裾口ヲ裂クコト五寸之ニ釦各四個ヲ附 ス物入兩股各一個ヲ附ス	同	同	同
消防司令長	消防司令副長 消防機關士	同					
消防司令副長	消防機關士	同					
消防機關士		同					

名	稱	地質	側	袖	章	製	式	形狀
副總監	警部長 警部副長 消防司令長 消防司令副長 消防機關士	表 濃紺絨	金色圓形内ニ日章ヲ附ス 徑七分五厘 胸部十二個側部六個收 紐二個ヲ附ス	一分巾蛇腹組總監ハ金線 一條ヲ袖口ヨリ六寸ヲ上 リ周環ニ附ス 略日章中心ヨリ尖頭ニ至 ル三分五厘金色二個ヲ環 章ニ沿ヒ表半面ニ附ス 副總監以下高等官ハ同上 線一條ヲ附ス警部以下ハ 一分副白絨紐一條ヲ附ス 各略日章ヲ附セス	長襟踵ノ上際ヲ距ルコト 大約八寸 襟副二寸 袖長腕關節ヨリ延ルコト 五分 物入前面ニハ左右各一個 ニ限ル	長 手甲ノ隠ルヲ以テ度ト ス 襟副二寸	如圖	如圖
警部長	警部副長 消防司令長 消防司令副長 消防機關士	裏 適宜	黒角徑五分五厘 胸部三個ヲ附ス					
警部副長	消防司令長 消防司令副長 消防機關士	同	胸 裝式常衣ニ同シ 白色組系品質適宜	品 質 裝 式 白色組系 品質適宜	常衣ニ同シ	製 式 常衣ニ同シ 但全邊ノ毛線ヲ白六分 巾ノ杉打線ニ撫フ	同	同
消防司令長	消防司令副長 消防機關士	同	製袴式ニ同シ但側ハナシ					
消防司令副長	消防機關士	同						
消防機關士		薄白布						

第一編第七章服裝

- 一天覽ノ場所ニ臨ミ陪覽スルトキ
- 一行幸啓ノ場所ヘ參集シ若クハ奉送奉迎スルトキ
- 一正式敕使警備
- 一政始出處
- 一歲募參賀
- 一任官叙任敍勳ノ御禮及之ニ齊シキ場合ニ參内スルトキ
- 一巡閱ヲ行ヒ及巡閱ヲ受クルトキ
- 一夜會其他廉アル宴會ニ臨ムトキ
- 一通常禮服及「フロックコート」着用ノ場合
- 一自家親屬其他ノ賀儀葬祭
- 第八條 常裝ハ平常勤務ノ際着用スル所ノ服裝トス
- 第九條 已ムテ得サル場合ニ於テハ國儀式並公式行幸啓御先驅ニ參スルトキ任官叙位叙勳ノトキニ限り禮裝ヲ着用スルコトヲ得
- 第十條 行幸啓ノ道筋警衛及監臨等ノ場合ニ於テハ常裝ニ正帽ヲ用フヘキモノトス
- 第十一條 夏衣ハ炎暑ノ際 凡六月一日ヨリ九月末日迄ノ間以下同シ 常衣ニ限り着用スルコトヲ得但夏衣ヲ着用スルトキハ必ス夏袴ヲ着用スルモノトス
- 第十二條 夏袴ハ炎暑ノ際着用スルモノニシテ何レノ服裝ニ在テモ袴ニ代用スルコトヲ得
- 第十三條 甲種外套ハ何レノ服裝ヲ論セス雨雪ノ際又ハ防寒ノ爲メ室外ニ於テ着用スルモノトス尤モ防寒ノ爲メ特ニ室内ニ於テ着用スルコトヲ得但儀式祭典ノ場所及上官ノ居室内ニ在テハ此限ニ在ラス
- 第十四條 乙種外套ハ雨雪ノ際甲種外套ノ上ニ着用スルモノトス尤モ時宜ニ依リ乙

種外套ノミヲ着用スルモ妨ケナシ

- 第十五條 覆面ハ雨雪ノ際甲種又ハ乙種ノ外套ニ附屬シテ用フルモノトス
- 第十六條 日覆ハ炎暑ノ際常帽ニ限り之ヲ用フルコトヲ得但便宜垂布ヲ除クモ妨ケナシ
- 第十七條 照紐ハ何レノ服裝ヲ論セス職務執行ノ場合ニ於テハ必ス之ヲ用フヘシ其他ノ場名ニ於テハ各自ノ便宜ニ依ル
- 第十八條 刀ハ室ノ内外ヲ問ハス上部ノ鍔ナ刀帶ノ鈎金ニ掛ケ乘馬ニ在テハ之ヲ掛ケザルヲ法トス
- 第十九條 刀帶ハ其正衣ヲ着スルハ衣ノ上ニ常衣ノ下ニ縮ムルモノトス
- 第二十條 正緒ハ正裝禮裝ノトキ常緒ハ常裝ノトキ刀柄ニ裝着ス
- 第二十一條 短袴ハ何レノ服裝ニ在テモ長靴ヲ穿ツトキ着用スルモノトス炎暑ノ際ハ夏袴ヲ短袴ニ製シ着用スルモ妨ケナシ
- 第二十二條 手套ハ何レノ服裝ヲ論セス白色ノモノヲ用フヘシ
- 第二十三條 下袴ハ何レノ服裝ニ在テモ白布製ノ立袴ヲ用フヘシ
- 第二十四條 靴ハ長短ヲ問ハス黒色革製トシ袴下ニ穿ツヲ法トス但長靴ハ常裝ニ限り袴上ニ穿ツモ妨ケナシ
- 乘馬者ニ在テハ短靴長靴共ニ必ス拍車ヲ附著シ其短靴ヲ穿ツトキハ袴ニ留申「スー」ニ「ピチユー」ヲ附着スヘシ
- 第二十五條 勳章其他ノ記章ハ何レノ服裝ニ在テモ之ヲ佩用ス其佩用方ハ明治二十一年十一月敕令第七十六號及明治二十二年二月七日賞勳局告示第一號ニ據ルヘシ
- 第二十六條 奉送奉迎御先驅正式敕使警備其他儀式上隊伍ヲ爲ス場合ニ於テハ各員齊一ノ服裝ヲ爲スヘシ

勳章記佩用心得

第一款 一等勳章ヲ有スル者更ニ別種ノ一等勳章ヲ受ケタル時ハ旭日桐花章ト旭日
佩スルコトナシ 後ニ受ケタル一等勳章ノ正章並ニ其副章ト前ニ受ケタル一等勳章ノ副章
トナシ併佩スヘシ

第二款 二等以下ノ勳章ヲ有スル者更ニ同種上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ其下級ノ勳
章ヲ佩フルコト止ム別種ノ同級若クハ上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ之ヲ併佩スヘシ
第三款 二等勳章若クハ一等ノ副章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前
ニ受ケタルモノノ位置ニ付テ其上位ニ列佩スヘシ

第四款 三等勳章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノノ
位置ノ上ニ佩フヘシ
第五款 四等勳章以下兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ
ノ位置ノ右ニ佩ヒ其從軍記章若クハ褒章ヲ有スル者ハ之ヲ勳章ノ位置ノ左ニ列
佩スヘシ

第六款 勳章ハ男子ハ大禮服及ヒ通常禮服(燕尾服)着用ノ時佩フヘシ從軍記章及褒
章ヲ有スル者亦同シ
通常禮服着用ノ時ハ大綬章ヲ上衣下ニ佩ヒ其副章ヲ上衣ノ上ヘ其位置ニ佩フ又大
綬章ヲ胸衣ノ下襟衣ノ上ニ佩ヒ副章ヲ上衣ノ上ヘ其位置ニ佩フルコトアリ時宜ニ
依リ大綬章ヲ省キ其副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ旭日二等章ヲ有スル通常禮服
着用ノ節ハ其副章ヲ省クコトアルヘシ

第七款 勳章ハ婦人ハ大中小禮服用ノ時佩フヘシ
一等勳佩ヲ有スル者大禮服ニハ大綬章及ヒ副章ヲ佩フ中小禮服ニハ時宜ニ依リ大
綬章ヲ省キ副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ又通常禮服ニハ時宜ニ依リ副章ノミヲ佩フ

ルコトアルヘシ
二等以下ノ勳章ヲ有スル者ハ通常禮服用ノ時ニ於テモ時宜ニ依リ之ヲ佩フルコ
トアルヘシ

外國勳章記章

第八款 外國勳章記章用方ハ各彼ノ規則ニ依ル

第九款 我勳章ヲ有スル者我勳章ヲ佩ヒシテ彼ノ勳章ノミヲ佩フヘカラス

第十款 彼我ノ大綬章ヲ有スル者ハ彼ノ大綬章ヲ佩ヒス之ニ屬スル副章ノミヲ我
副章ノ位置ノ下若クハ次ニ列佩スヘシ

但外交ノ時宜ニ依リ彼ノ大綬章及其副章ヲ佩ルトキハ我大綬章ヲ省キ我副章
ハ併佩スヘシ

第十一款 彼我ノ綬ヲ用ヒサル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下若
クハ次ニ列佩スヘシ

第十二款 彼我ノ喉下ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下ニ
佩フヘシ

第十三款 彼我ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ併佩スルトキハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ左
ニ列佩スヘシ

第十四款 彼ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ我從軍記章及ヒ褒賞ト併佩スル時ハ我從軍記章
及ヒ褒賞ヲ彼ノ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第十五款 彼ノ記章ト我從軍記章及ヒ褒賞ト並佩スル時ハ之ヲ我從軍記章及ヒ褒賞
ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第八章 報告

○本縣訓令第八十六號 明治二十年十一月四日
官報々告心得左之通之ヲ定ム但此際更ニ官報々告委員ヲ定メ其人名届出ヘシ

宮崎縣官報々告心得

第一條 凡ソ官報ニ登載スヘキ事項ヲ内閣官報局ニ報告スルハ第一部文書課ノ主管ニシテ官報々告主任之ヲ調理ス

第二條 官報々告主任ハ報告事項ヲ調理スルノ外官報報告ニ關シ各所ヘ文書往復ノ事務ヲ管掌ス

第三條 官報原稿材料ノ取調ハ縣廳ニ於テハ第一部第二部警務本部及收稅部中ノ各課長各郡役所ニ於テハ官報々告委員ヲシテ之ヲ主宰セシム

第四條 各郡役所ニ置クヘキ官報々告委員ハ一名乃至二名トシ各郡長適宜之ヲ命シ其旨官報報告主任ニ通報スヘシ

第五條 官報々告主任ハ廳中各課及各郡役所ヨリ廻送スル官報原稿材料ヲ適宜取捨増損スルコトヲ得

第六條 官報ニ登載スヘキ事項ハ概テ明治十六年大政官文書局取調ニ係ル地方報告事項并細目ニ據ルト雖モ實際ニ就キ宜シク參酌シ苟モ報告ヲ要スルト思考スルモノハ細大遺漏ナカランコトヲ要ス

第七條 新聞紙又ハ雜誌ニ於テ本縣ノ公務上若クハ利害ニ關スル重大ノ事件ニ付誤謬ノ說ヲ掲載シタルヲ發見シタルトキハ詳細事實ヲ記シ直ニ報告ノ手續ヲナスヘシ

第八條 官報々告主任及報告事務擔任ノ吏員ハ常ニ報告ノ精確ニシテ敏捷ナランコトヲ勉ムヘシ

第九條 官報原稿ハ文字簡明ヲ主トスト雖モ其事件ニ關係アル人名場所時日等ヲ詳

欠

MISSING

年		表一十四第		自殺者ノ年齢及因由		應名			
親屬ノ不和	前非テ	因由	未滿十六年	十六年以上二十年	二十年以上三十年	三十年以上四十年	四十年以上五十年	五十年以上	合計
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計

一 變死人員ハ警察上ニテ變死セシ者ハ記入ス可カラス
 一 棄兒ハ生死ニ關セス總テ之ヲ掲ク可シ

藥		不其途獸火難海洪過		盜賊		怨恨		捕拒		暴行		其爲メ		誤計		上害		發蟲		合	
兒	計	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計

報年		表九十三第		火災		應名	
目次	度數	度數	度數	度數	度數	度數	度數
出火ノ度數	放火ノ度數	雷火及不審火ノ度數	延燒セシ度數	延燒セサシ度數	火災ニ罹リシ軒數	燒失セシ建坪	計
一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月
九月	十月	十一月	十二月	合計	合計	合計	合計

報年		表十四第		變死及棄兒		應名	
自殺	類	別	一月 <th>二月 <th>三月 <th>四月 <th>五月 </th></th></th></th>	二月 <th>三月 <th>四月 <th>五月 </th></th></th>	三月 <th>四月 <th>五月 </th></th>	四月 <th>五月 </th>	五月
入水	入水	男	一月	二月	三月	四月	五月
刃物	刃物	女	六月	七月	八月	九月	十月
銃物	銃物	合計	十一月	十二月	合計	合計	合計
毒藥	毒藥	合計	合計	合計	合計	合計	合計
其他	其他	合計	合計	合計	合計	合計	合計

一 全戸燒失ニ至ラサルモ火災ニ罹リシ時ハ度數ハ勿論軒數建坪ノ欄ヘモ記入ス可シ
 一 軒數ハ住家ナレハ一竈ヲ以テ一軒ト算シ學校病院寺院等ナレハ一構ヲ以テ一軒ト算ス可シ

第三條 本則ニ報告スヘキ明文ナキセノト雖臨時必要ト認ムル事項ハ之ヲ報告スヘシ

第四條 報告ハ警察署長分署長ヨリ知事ニ報告スヘシ其事項左ノ如シ
但知事ニ報告スルモノト雖モ第三項ヲ除クノ外上封ハ警部長ニ宛發送スヘシ

一 重罪又ハ廉立タル輕罪犯アリシトキ其原因摸探犯人及被害者ノ住所氏名年齢若シ犯人逃走シタルハ其人相書
二 拾戸以上官衙公舎其他重要ノ關係
火災ニ罹リタルトキハ其地名原因景況及ヒ其戸數
アルモノハ戸數ニ拘ラス

三 傳染病患者アリシトキハ其地名住所身分職業氏名年齢及發病全治死亡ノ月日
四 風水靈雷ノ變災ニ依リ人畜ノ死傷家屋田園道路橋梁山岳堤防ノ破壞荒流船舶ノ覆沒衝突並ニ其他ノ天變地異ニ據リ著シキ損害アルトキハ其地名個數及景況
五 五人以上共犯ニシテ重罪ヲ犯セシト認ムルモノ捕獲並ニ一個ノ場所ニ於テ三人
以上殺害セラレシトキ

六 護送囚並ニ留置人逃走死亡シタルトキ

第五條 前條第二項第三項中虎列刺病第四項及ヒ第五項ハ電信ヲ用フルモノトス
但電信ヲ以テ報告スルトキハ第三項ヲ除クノ外警部長ニ宛ツヘシ

第六條 電信ヲ以テ報告シタル事故ハ猶書面ヲ以テ詳報スヘシ但書面ヲ以テ即報ニヨル事故ト雖モ隨時事實ノ詳細ヲ得ルニ從ヒ之ヲ報告スルモノトス

○本署規第五七號 二十三年十二月十一日(宮崎警察署)

廳下及近傍ノ警察事故ニシテ警察報告規則ニ依リ報告スルモノ、外左ノ各項ハ其時々報セ告ラルヘシ

但便宜通知簿ヲ以テ報告セラル、モ妨ナシ

一 盜難

但廉立タルモノ

一 變死

一 火災

一 集會

但集會政社法ニ依ラサルモノ

其他署長ニ於テ報告ヲ要スヘキモノト認ムルモノ

○第九章 警備

○内務省 十二年十一月十二日 東京警規(東京府本署府縣ヲ除ク)

敕使參向ノ節内規別紙之通候條自今宮内省ヨリ通報次第警備方可取計此旨相違候事(別紙)

正式敕使參向内規

第一條 此内規ノ關スル期限ハ詔書祭文ヲ受ケ 皇居ヲ出ルヨリ復命迄ノ時間又ハ各地方ニテハ其當日旅館ヲ出ルヨリ旅館ニ歸ル迄ノ時間トス

第二條 使並ニ隨員大禮服ヲ着用ス

第三條 詔書祭文ハ錦ノ袋ニ納テ隨意首ニ掛ク若シ隨員ナクハ敕使自ラ之ヲ捧持スル等ハ總テ時宜ニヨル

第四條 下乘ハ皇族下乘所ニ於テス

第五條 乘用ハ馬車又ハ騎馬タルヘシ

第六條 警備トシテ警部四騎ヲ付ス二騎前ニアリ二騎後ニアリ

第七條 途上常備ノ巡查ヲシテ一會注意セシム

○大乙第四十四號 十三年十二月二十二日(府縣)

國稅領收順序ニ據リ各地大藏省爲換方ヘ預ケタル税金遞送之節巡査護衛之義ニ付十二年乙第十九號ヲ以テ相違候趣モ有之候處來ル十四年一月以後大藏省爲換方ニ於テ現金遞送致候條爲換方ヨリ申立次第途中又ハ宿伯中巡査ヲシテ護衛セシメ都テ不都合無之樣可取計此旨相達候事但護衛人員ノ儀其應ノ適宜ニ任候事

○內務訓令第一六一號 十九年四月廿一日 警規(北海(東京府)道廳(府縣)ヲ除ク)

大藏省現金支拂所ヨリ公債証書元利支拂ノ爲メ各郡區役所ヘ現金携帶出頭ノ際保護ヲ受ケ度旨請求アリタル時ハ沿道警察署ノ巡査ヲシテ適宜保護セシムヘシ

右訓令ス

○內務訓令第九八二號 十九年十二月二十七日
國庫金取扱所ノ出張所ニ於テ諸稅納期ニ際シ金員領收之節盜難等ノ怨レ有之ニ時保護ニ困難ヲ極メ候場合ニ於テ該出張所ヨリ最寄警察署若クハ巡査派出所ヘ取締方依頼シタル時ハ便宜巡査ヲシテ特ニ注意ヲ加ヘ保護セシメラルヘシ

○第十章 監督

○本規第二二號 明治十九年四月十六日(警部長ヨリ各署長ヘ)

今般各警察署ヘ外勤部長兩名ヲ配置セラレ尙ホ內勤部長ヘモ外勤ヲ兼シメラレタルハ專ラ外部ノ擴張ヲ企圖スルノ趣旨ニ付各自其意ヲ得若シ外勤部長ニ於テ欠席アルトキハ兼勤者ヲシテ之ヲ補ヒ可成欠員ナキ樣取計之レアルヘシ

○內務訓令第三十六號 二十年六月十一日 警視廳(東京府)府縣(ヲ除ク)

警察巡閱規則

第一條 本則ハ警察各部ニ於ケル紀律ノ張弛服務ノ勤惰處務ノ弊否其他法律命令實

施狀況ヲ視察シ警察ノ實効ヲ收メシムルカ爲メニ設ケルモノトス

第二條 巡閱ハ毎年四月五月ノ間ニ於テ東京ニ在テハ警察本署長其他ノ府縣ニアリテハ警部長ヲ以テ之ヲ施行セシムヘシ

第三條 巡閱官ハ左ノ項目ニ就テ其方法ノ如何ヲ查閱ス可キモノトス

- 一 執行事務及其報告ノ方法
- 二 執行官吏ノ配置及警邏
- 三 執行事務ノ監督及警邏ノ監督
- 四 非常召集ノ法

五 司法警察即チ被告人ノ搜查逮捕訊問及檢察官ヘ送付手續等

六 留置人取扱及遞傳護送

七 諸願何書等ニ關スル諸文書ノ取扱

八 違警罪及諸規則違犯者処分

九 戶口調査及監視人ノ取扱

十 文書統計記錄ノ整理

十一 服裝姿勢及禮式

十二 教習及訓授

十三 會計經理及被服給與

十四 警察署分署派出所及留置場ノ構造裝置

十五 火災消防及器具ノ使用

十六 警察上緊要ノ器具

十七 集會ニ關スル取締

十八 衛生警察殊ニ傳染病撲滅ノ方法及衛生ニ關スル諸船ノ取締

十九交通取締即チ道路及舟車ノ狀況等

二十衛生風俗及公安ニ關スル營業取締殊ニ料理店貸座敷宿屋古物商質商及危險物
賣買商等

第四條 巡閱官ハ警察官吏ノ風儀動作其人民ニ對スル關係若クハ過度ナル浪費ヲナ
スヤチ視察スルモノトス

第五條 警察處務ニ關スル便否及ヒ警察官ノ處分ニ關スル意見ヲ巡閱官ニ申告スル
モノアルトキハ之ヲ受理査閱スヘシ

第六條 巡閱官巡閱ヲ終レハ其狀況ヲ盡シ意見ヲ付シ巡閱中ニ係ル日誌ヲ添へ警視
總監又ハ知事ニ復命シ警視總監又ハ知事ハ其概況ヲ內務大臣ニ報告スヘシ

○本訓令第一一四號 二十二年五月四日 (警察署)

全分署

巡查點檢式

第一條 点檢ハ署長ニ於テ巡查ノ服裝其他帶具品ヲ査閱シ姿勢ヲ矯正スルモノトス

第二條 点檢ノ際ハ監督(警部警部補巡查部長アテ) サルトキハ上席監督巡查) 之カ號令司ト爲ルモノトス

第三條 点檢ヲ別テ大点檢小点檢ノ二種トス

第四條 大点檢ハ毎月十四回以上之ヲ行フモノトス但駐在員ハ毎月一回トス

第五條 小点檢ハ大点檢ヲ行ヘサレ場合ニ於テ之ヲ行フモノトス

第六條 小点檢ハ署長ニ於テ第十一條ノ各項内便宜省察シテ行フコトヲ得但帶具品
ノ点檢ハ缺クコトヲ得ス

第七條 號令司ハ呼子笛ヲ鳴ラシ点檢時間ヲ報スヘシ

第八條 號令司ハ列員ノ正面ニ於テ直立シ號令ヲ爲スヘシ但署長ハ號令司ノ上位ヲ
占ムヘキモノトス

第九條 監督ハ教導者トシテ右翼ニ在テ直立スヘシ但監督アラサルトキハ上席巡查

右翼ニ直立スルモノトス

第十條 整列ハ場所ノ廣狹人員ノ多寡ニ依リ適宜ノ號令ヲ下シテ一列又ハ二列ニ編
成スルコトヲ得

第十一條 点檢ハ出務時間四十分前左ノ順序ニ依リ行フヘシ但本條規定外ノ諸運動
ハ總テ巡查操練法ニ據ルヘシ (二十二年六月二十八日訓令第百八十五號改正)

一集レ
此號令ニテ各巡查ハ其指示ニ從ヒ速ニ一列又ハ二列ニ集リ其中央ハ號令司ヨリ
四步距ル如ク位置シ左拳ヲ腰ノ上ナル臑骨ニ當テ右翼嚮導ノ方ニ整頓シテ正面
ニ向キ直ル

二休メ

此號令ニテ各巡查ハ片足ヲ舊位ニ置キ其場ニ立テテ休息ス但最初ハ常ニ左足ヨ
リ休息スヘシ

三氣ヲ付ケ

此號令ニテ各巡查ハ兩踵ヲ一線上ニ揃ヘ且ツ各自ノ骨組ニ應シテ成ルヘク之ヲ
着ケ兩足尖ハ矩形ヨリ少シク狭ク外側ニ向ケテ開キ兩膝ハ凝ラサル様ニ之ヲ伸
ハシ身体ハ正シク腰ノ上ニ落子付ケ稍々前ニ傾ケ兩肩ハ故ラニ張ルコトナク只
一様ニ之ヲ下ケ兩腕ハ自然ニ垂レ掌ハ少シク外方ニ向ケ五指ヲ整接シ小指ハ袴
ノ縫目ノ後ニ當テ頭ハ正シク且自然ニ之ヲ保子兩眼ハ正シク前面ヲ見ルヘシ
四番號

此號令ニテ嚮導ヲ除キ他ノ巡查ハ右翼ヨリ遞次番號ヲ呼フ
五右ハ準ヘ

此號令ニテ嚮導ハ其儘左拳ヲ臑骨ニ當テ他ノ巡查ハ同ク左拳ヲ臑骨ニ當テ嚮導

ニ準フ此時號令司ハ嚮導ノ右翼ニ歩ノ所ニ到リ列中整頓正シカラサル巡查アレハ順次ニ番號ヲ呼ビ後トヘ或ハ前ヘノ號令ヲ下シテ之ヲ正ス但嚮導ヲシテ整頓ヲ正サシムルハ適宜タルヘシ此場合ニ於テハ嚮導ハ其位置ヲ變スルコトナリ頭ヲ左ニ向ケテ整頓ヲ正スモノトス

六直レ
此號令ニテ正面ニ向キ直リ姿勢ヲ正クス
七捕繩

此號令ニテ一同速ニ右手ヲ以テ結束ノ捕繩ヲ探リ臂ヲ体ニ着ケテ前ニ出スヘレ
（以下之）
（ニ準ス）此時號令司ハ臨時列員ノ一名或ハ數各ニ命シテ之ヲ解カシムルコトアルヘシ

八收メ
此號令ニテ一同速ニ捕繩ヲ收メ元ノ如ク姿勢ヲ正クスヘシ（以下同シ）
九呼子笛

此號令ニテ列員ハ一同ニ呼子笛ヲ出スヘシ此時號令司ハ臨時列員ノ一名或ハ數名ニ命シテ其發聲ヲ試ルコトアルヘシ但笛ハ初メニ長ク二度吹キ後ニ短ク二度吹クヲ例トス

十收メ
十一手帳

此號令ニテ一同手帳名刺ヲ開示スヘシ此時署長並號令司ハ列員ノ前面ニ沿フテ精密ニ査閲スヘシ

十二收メ
此時署長又ハ號令司ハ列ノ前後ヲ巡檢シ服裝ヲ正スヘシ

十三抜ケ ケン

「抜ケ」ノ號令ニテ列員ハ一同左手ニテ鯉口ヲ握リ右手ヲ刀柄ニ掛ケ抜劍ノ意用ヲ爲ス（ケン）ノ號令ニテ刀身ヲ抜キ刀背上ニシテ前方ニ提出スヘシ（柄頭ヲ帶當テ切尖キ凡ソ一尺下ス）此時署長並號令司ハ列員ノ前面ニ沿フテ巡檢スヘシ但本項ノ號令ハ毎月一回大点檢ノ際ニ於テ爲スモノトス

十四收メ ケン
「ケン」ノ号令ニテ一同刀背ヲ右ニシ捧劍ヲナシテ徐ニ收ムヘシ
十五休メ

此時署長ハ列員ノ諸申告ヲ聽キ或ハ實務ノ訓授ヲ爲スコトヲ得
十六氣ヲ付ケ

此號令ニテ第三項ノ姿勢ニ復スヘシ
十七解レ 進メ

此號令ニテ各自隨意ニ解散スヘシ
○本縣訓令第二百二號 二十三年七月十五日（警察署）
監督巡視規程左ノ通之ヲ定ム

但明治二十二年九月訓令第二百三十號監督巡視心得ハ廢止ス

監督巡視規程

第一條 監督ハ各巡查警邏ノ方法及度數戸口調査ノ精粗品行ノ正否人民ニ對スル所爲諸取締規則ノ實地執行方並ニ日誌ノ記載其他服裝姿勢禮式等ノ適否ヲ嚴正ニ視察シ兼テ各巡查ヲ訓練スヘシ

第二條 各監督者所在地ノ巡視ハ左ノ程度ニ依ルヘシ
一 警察署分署所在地ノ準市街地ハ（下穗北分署所在地地下穗北）
村大字妻町ヲモ包含ス

警察署長分署長

毎月五回以上

警部警部補

毎月十五回以上

巡查部長

毎日二回以上

二所在地受持町村ハ(前項市街)地ヲ除ク

警察署長分署長

毎月一回以上

警部警部補

毎月二回以上

巡查部長

毎月三回以上

第三條 各監督者駐在所ノ巡視ハ左ノ程度ニ依ルヘシ

一所屬署ヲ距ル十里以内ノ駐在所ハ

警察署長分署長

二ヶ月間ニ一回以上

警部警部補

二ヶ月間ニ一回以上

巡查部長

毎月一回以上

二所屬署ヲ距ル十五里以内ノ駐在所ハ

警察署長分署長

三ヶ月間ニ一回以上

警部警部補

三ヶ月間ニ一回以上

巡查部長

二ヶ月間ニ一回以上

三所屬署ヲ距ル十五里以外ノ駐在所ハ

警察署長分署長

六ヶ月間ニ一回以上

警部警部補

四ヶ月間ニ一回以上

巡查部長

三ヶ月間ニ一回以上

第四條 全所轄内周到ノ巡視ハ署長及警部警部補ハ毎年一回巡查部長ハ毎年二回トス但警察署長ハ所屬分署部内サモ巡視スヘシ

第五條 周到巡視ハ全所轄内各部チ一時ニ爲スヲ要セス第二條第三條ノ巡視中ニ於テ兼テ之ヲ爲シ一週年ノ終リ迄ニ規程ノ度數ヲ充タシムヘシ

第六條 各署ニ監督日誌ヲ備ヘ巡視中ニ係ル一切ノ事項ヲ記載シ署長ノ査閱ニ供スヘシ

第七條 巡視ノ際ハ各駐在所ノ日誌並ニ各所警羅表ヲ精査シ且ツ捺印スヘシ

第八條 各監督者ニ於テ所轄内周到巡視ヲ爲シタルトキハ其都度概況ヲ知事ニ復命スヘシ

第九條 各署ニ於テハ左ノ離形ノ巡視表ヲ製シ翌月十日迄ニ警部長ニ進達スヘシ

○第十一章 護送

○太政官達第十九號 十五年二月一日(内務省開拓使)東京府(警視廳府縣)ヲ除ク

明治六年十一月第三百九十一號並同十年七月第四十九號ヲ以テ囚人護送規則及ヒ遞傳方相違置候處今般更ニ別冊ノ通囚人護送遞傳方改正シ本年七月一日ヨリ施行候條從前達中矛盾ノ廉ハ同日限廢止ス此旨相違候事

(別冊)

囚人護送手續

第一條 甲應ヨリ乙應又ハ集治監ヘ送移スル囚人ハ囚籍及處刑宣告書所持ノ物品ヲ併セ沿道警察本分署ニ於テ遞傳護送スヘシ但シ一府縣管内本支監獄ノ間ニ護送スル囚人モ其距離拾里以外ニ至ルモノハ本文ニ準スルヲ得

第二條 新タニ就捕セシ犯罪人及ヒ諸令狀ニ據引致スル刑事被告人又ハ脱走ノ軍人軍屬ノ遞傳護送ヲ要スル者モ前條ノ手續ニ準スヘシ但入監後糾問等ノ爲メ所在ノ法衙ニ往復スルハ本文ノ限ハアラス

第三條 第二條ノ護送ニ付スル囚人ノ員數及ヒ發出日時ハ其當該官吏ヨリ前以テ沿道警察本分署ヘ通報スヘシ

第四條 護送囚人ノ數ハ一行拾名以下トス護送警吏及ヒ繩取ノ人員ハ適宜タルヘシ但便利海路ニヨルトキハ適宜囚人ヲ増加スルコトヲ得

第五條 護送警吏ハ日出ヨリ日没マテテ限トス

第六條 警察本分署ニ於テハ護送囚人ノ郷貫氏名刑名又ハ犯罪見込書ノ要領及ヒ着發日時ヲ記載シ置クヘシ

第七條 護送囚人ハ沿道警察本分署ニ宿泊セシムヘシ若シ支障アルトキハ該地戸長ニ照會シ宿所ヲ定メ適宜取締ヲナスヘシ

第八條 護送途中囚人病發スルトキハ沿道警察本分署ニ付シ療治スヘシ若シ死去スルトキハ該地戸長ニ埋葬ヲ囑シ引取人アル者ハ之ニ下付ス醫師ニ死去証書ヲ作ラシメ戸長及ヒ護送警吏連印シ書類物品ヲ併セ送達スヘキ衙署ニ遞付シ仍ホ發出衙署ニ報知スヘシ

第九條 護送途中囚人逃亡スルトキハ先ツ緝捕方ヲ最寄警察本分署ニ報告シ仍ホ發出衙署及ヒ送達スヘキ衙署ニ報告スヘシ但第八條及ヒ本文ノ手續ヲ爲スタメ他囚護送ヲ遅緩ス可カラス若シ速ニ手續ヲ了シ難キ場合最寄警察本分署ノ助力ヲ請フコトヲ得

第十條 遞傳護送スル警察官吏ノ旅費ハ都テ沿道地方ノ警察費ヲ以テ支辨スヘシ但繩取ノ雇給ハ第十一條第十二條ノ區別ニ依リ囚人ニ屬スル費用中ニテ支辨スヘシ第十一條 第一條ニ掲グル囚徒ニ屬スル護送中ノ費用ハ明治十四年第十七號布告ニ依リ區分シ集治監ニ送ルトキハ沿道府縣ノ仕拂ニ立テ其他ハ出發府縣ノ監獄費ヨリ支拂フベシ

第十二條 第二條ニ掲グル各犯人ニ屬スル護送中ノ費用ハ沿道地方警察費ヲ以テ支辨スヘシ

第十三條 護送囚人死歿シ引取人ナキモ其所持金錢物品埋葬費ニ足ルモノアル者及ヒ陸軍隊付下士卒海軍下士卒ノ埋葬費ハ第十一條第十二條支辨ノ限ニアラス尤モ其費額ハ都テ拾圓以内タルヘシ但下士卒ノ分ハ追テ陸軍省海軍省ヨリ各自ニ拂戻スヘシ

第十四條 遞傳ニ係ル囚人犯罪人ノ賄費額ハ警察本分署ニ於テハ都テ拘留人ノ例ニヨルヘシ他ニ宿泊セシムルトキハ一宿ニ賄具點燈手數料ヲ合セテ金貳拾五錢以下一晝食金七錢以下藥價診察料等ハ實費支辨スヘシ

○内務省第三十五號 十五年六月五日警視廳府縣(東京府)ヲ除ク
○内務省第三十號 十七年七月八日警視廳府縣(東京府沖繩縣北海道三縣ヲ除ク)
○内務省第三十號 十七年七月八日警視廳府縣(東京府沖繩縣北海道三縣ヲ除ク)
今般冬假留監設置セラレ候ニ付徒刑流刑及禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒送致方及ヒ聯合地方ノ區分左之通相定候條此旨相達候事

徒刑流刑禁獄送致方

一 徒刑流刑禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒裁判確定セシ時ハ之ヲ管束セシ地方ヨリ警察遞傳ヲ以テ直ニ其聯合假留監ヘ押送スヘシ但本監ノ都合ニヨリ典獄ヨリ其聯合地方ヘ囚徒押送ノ延期ヲ通知スルコトアルヘシ

聯合地方區分

一 兵庫假留監

- 京都府 大坂府 兵庫縣 滋賀縣 石川縣 富山縣 福井縣 島根縣 鳥取縣
- 岡山縣 廣嶋縣 山口縣 和歌山縣 德島縣 高知縣 愛媛縣

一東京假留監

警視廳 神奈川縣 埼玉縣 群馬縣 千葉縣 茨城縣 栃木縣 三重縣 愛知縣

靜岡縣 山梨縣 岐阜縣 長野縣

一宮城假留監

新潟縣 福島縣 宮城縣 岩手縣 青森縣 秋田縣 山形縣

一三池假留監

長崎縣 福岡縣 大分縣 佐賀縣 熊本縣 宮崎縣 鹿兒島縣

○本縣丁第四十九號 明治十九年五月十二日 (警察本署 警察署)

囚人護送心得

第一條 凡囚人ノ護送ハ明治十五年太政官第十號達ニ仍ルト雖モ尙ホ左ノ各條ニ從ヒ取扱フヘシ

第二條 囚人ヲ護送スルルハ發遣ノ署ニ於テ一件書類及ヒ証據物件囚人ノ所持品ヲ封緘シ(所持金ヲ現金ノ儘付スル場合ハ封入)別ニ沿道警察署及ヒ分署ニ對シタル別紙書式ノ傳遞狀(人相書ヲ添フ若シ他府縣ヨリ護送シ來ル囚人ニシテ其人相書ナキモノハ最初之ヲ受ケタル警察署分署ニ於テ新ニ調成)ヲ付シ發遣スヘシ但管内ニ於テ甲署ヨリ乙署限リ送付スル囚人ハ便宜遞付簿ヲ以テスルモ妨ケナシ(明治二十二年八月訓令第二百)

第三條 巡查ナシテ護送セシムル囚人ニハ必ス繩取夫ヲ付スヘシ但逃走ノ憂シト認メ捕繩ヲ施サ、ルモノニ限り繩取ヲ付セサルモ妨ケナシ

第四條 囚人二名以上五名マテハ繩取一名ヲ六名以上十名マテハ尙ホ巡查一名繩取二名増スヘシ但模様ニ因リ護送巡查及ヒ繩取ノ數ハ各署ニ於テ便宜増減スルヲ得

第五條 傳遞護送ニ付スヘキ囚人ノ行狀(逃走ニ巧ナルカ又ハ狂暴ナルカ等)ヲ當初發遣ノ署ニ於テ篤ト取調傳遞狀ニ記載シテ不虞ノ害ヲ豫防スヘシ且ツ途中異狀ノ舉動ハ護送巡查ニ於テ傳遞狀ノ紙尾又ハ別紙ニ詳細記載スヘシ但護送巡查ニ於テ記載シタル事項中裁判上又ハ取調ニ必要アリト思料スル廉アルルハ之ヲ受ケタル署ニ於テ該狀又ハ拔書ヲ當該官ヘ交付スヘシ

第六條 護送ノ囚人疾病ニ依リ歩行シ難キ場合ハ最寄醫師ヲシテ診察セシメ車馬ニ乘ラシムルモ妨ケナシ但醫師アラサル地又ハ急行ヲ要スル場合ハ此限リニアラス

第七條 囚人護送途中分署派出所等アラサル地ニ於テ宿泊スルルハ必ス相當ノ看守者ヲ雇入逃走ノ憂ナキ様取締ヲナスヘシ

第八條 護送途中囚人ヲシテ他人ハ勿論囚人相互ノ間ト雖モ猥リニ談話セシムヘカラス

第九條 護送途中休泊ノ際囚人ト相對シテ喫飯スヘカラス

第十條 囚人ヲシテ飲酒喫烟ハ勿論常食外ノ食物ヲ與フヘカラス

第十一條 護送途中囚人ニ而接又ハ物品ヲ與ヘント請フ者アリト雖モ一切受理スヘカラス

第十二條 前條請願者ノ住所氏名緣故ノ如何等聞糾シ其答辨及ヒ其際囚人ノ舉動第六條ニ準シ記載スヘシ

第十三條 囚人ノ引渡終リタルルハ其身柄及ヒ書類物件トモ其受領ノ証ヲ請ヒ受クヘシ

傳遞狀

書式

住所身分職業

氏名

罪名又ハ刑名

右ハ目錄ノ書類物件ト共ニ何府或ハ何鎮臺又ハ何所迄沿道警察署及ヒ分署遞傳護送相成度候也

但本犯又ハ被告人ハ云ヤト第六條ニ依リ注意ヲ要スヘキ事項ヲ記ス

宮崎縣

何警察署又ハ分署印

年 月 日
何府或ハ何鎮臺何所迄沿道
警察署警察分署

御 中

目錄

一何府何々宛封書

幾通

一何々

何個

一何々

何々

メ 何点

右之通有之候也

一何月何日何所ニ於テ被告人誰ハ何々々々

一何々

(護送巡查ニ於テ途中ノ舉動ヲ記載スル例)

○内務省令第五號 (明治二十三年十月三十一日)

重罪輕罪ノ公訴ノ判決ニ對シ控訴アリタル場合又ハ上告ニ由リ他ノ裁判所ニ移スノ言渡アリタル場合ニ於テ被告人拘禁中ノ費用並ニ裁判確定ノ後囚人ニ係ル費用ハ總テ最前裁判言渡アリタル地方ノ監獄費ヲ以テ支辨シ其費額ハ一人一日金二十錢トス但裁判確定ノ後ノ囚人ハ漁軍又ハ漁船ニ依リ最モ押送ニ便ナル地方ニ在テハ原地方廳ノ請求ニ依リ送還スルコトヲ得此場合ニ於テハ護送官吏ノ旅費及囚人ニ屬スル費

用ハ請求地方ノ負擔トス

○本警部第六九號 二十二年十一月十三日 (警部長ヨリ各署分署ヘ)

海軍々人軍屬ノ犯罪者送致方ニ付左ノ通司法省ヨリ訓令相成候條此旨心得ラルヘシ

司法省刑甲第四三二號 二十二年十一月七日 (裁判所 北海道廳 憲兵司令部 警視廳 府 縣(東京府ヲ除ク))

海軍々人軍屬ノ犯罪者ヲ逮捕シタル時ハ從來橫須賀鎮守府軍法會議ヘ送致シ來リタル宛明治廿二年七月東京皇佐世保ノ各地ニ軍法會議開設後モ仍ホ橫須賀ヘ向送致シ來リ候者有之趣自今海軍々法會議ノ管轄ニ屬スル犯罪者ヲ逮捕シ或ハ其自首ヲ受タル時ハ其最近ノ軍法會議若クハ被告人ノ所屬長ニ送致ス可キ儀ト心得ヘシ但海軍諸官ヨリ逮捕ヲ囑托シタル者ハ其囑托シタル諸官ニ送致スル儀ト心得ヘシ

○明治十九年十二月五日

岐阜縣同

第一條 損害要償私訴覆審事件ニ付在監輕罪囚ニ對シ管轄控訴院ヨリ呼出狀送達アリ尙監獄ヘハ押送方照會アル場合ニ於テハ之レニ應シ被告人ヲ警察傳遞ニ付シ控

訴院所在地ノ監獄ヘ押送シ同監獄ヨリ出庭セシムル儀ト心得可然哉

第二條 前條押送スヘキモノトセハ其押送費用ハ沿道警察費支辨ニ屬スル者ニ候哉

第三條 控訴院所在ノ監獄ニ滯留中ノ衣食費ハ其監獄ニ於テ支辨スル儀手又ハ發送地ノ監獄費ヲ以テ實費ヲ支辨スル乎或ハ在府縣獄囚徒費計算法ニ準シ一日金二十錢ノ制ヲ以テ支辨スル儀ニ候哉

○内務省司法省指令 十九年十二月二十二日

第一條 伺ノ通

第二條 第三條 其呼出ヲ請求シタル者ノ支辨タルヘシ

但シ護送者旅費ハ本年内務省令第十一號ニ依リ囚徒ノ諸賄費用ハ實費ニ據リ裁

判所ニ請求スヘシ

○第十二章 執行事務

○太政官 達第二十九號 八年三月七日(府縣 東京府 除ク)
行政警察規則別冊ノ通相定候條本年四月一日ヨリ施行可致就テハ從前捕亡吏取締組
番人等ノ名稱ヲ廢シ巡查ト改稱可致此旨相違候事

但捕亡費ヲ改テ警察費ト稱シ定額ハ先從前ノ通ニ候條出張所並ニ吏員配置ノ儀ハ
適宜タルヘク尤モ差向規則ノ通施行難致事情在之向ハ其段内務省ヘ可申出事

(別冊) 行政警察規則

第一章 警察職務之事

第一條 行政警察ノ趣意タル人民凶害ヲ豫防シ安寧ヲ保全スルニアリ

第二條 各府 東京府 縣長官其事權ヲ提掌シ警部ヲシテ之ヲ分掌セシメ便宜各所ニ出
張シ巡查ヲシテ各部ニ分派シ巡邏巡察セシム

第三條 其職務ヲ大別シテ四件トス

第一人民ノ妨害ヲ保護スル事

第二健康ヲ看護スル事

第三放蕩淫逸ヲ制止スル事

第四國法ヲ犯サントスル者ヲ隱密中ニ探索警妨スル事

第四條 行政警察豫防ノ力及ハスシテ法律ニ背ク者アルトキ其犯人ヲ探索逮捕スル

ハ司法警察ノ職務トス之ヲ行政警察ノ官ニ於テ行フルハ「檢事章程並司法警察規
則」ニ照スヘシ

第五條 警察官吏ハ公同一般ノ裨益ヲ計リ一家隱微ノ小惡ヲ發ク可ラス且一己ノ功

ヲ貪リ警察一般ノ目的ヲ愆ル可カラス

第二章 警部勤務ノ事

第一條 各「出張所」ニ派出セル警部ハ時々本廳ニ參會シ事務ヲ商議シ處分異同ナキ
ヲ要スヘシ

第二條 凡ソ布告布達ハ其旨趣ヲ巡查ニ教示シ誤解スルモノナキヲ要スヘシ

第三條 時々區内ヲ巡視シ其景况並ニ巡查動息正否ヲ察スヘシ區内人員戶數職業等
ハ成丈ケ詳知スルヲ要スヘシ

第四條 區内ノ事故ハ月報ヲ以テ長官ニ報告スヘシ若シ非常急緊ノ事故アレハ速ニ
報知スヘシ時機ニ因リ直ニ「警保頭」ニ報告スルヲ得ヘシ

第五條 凡ソ警察ノ事ニ付テハ直ニ他府縣ノ警察官ニ報告若シクハ照會スルコトヲ
得ヘシ

第六條 達又ハ訊問等ノコトアルニ付テハ敕奏官及ヒ華族有位ノ者ハ家令家扶執事
ヲ呼出スヘシ判任官以下士族平民ハ直ニ本人ヲ呼出スコトヲ得ヘシ

第七條 違警犯人ハ其犯狀ヲ按シ違警條目ニヨリ處斷シテ後長官ニ具申シ其疑案ア
ルモノハ長官ノ指揮ヲ受ケテ處分スヘシ

第三章 巡查勤方ノ事

第一條 第一章第三條ヲ以テ職務ノ大目的トナスヘキ事

第二條 持區内ノ居民並道路行人ヨリ困難出來シテ救護ヲ乞フトキハ何時ニテモ乞
ニ應シ或ハ救護ヲ乞ハサルモ見聞次第力ヲ盡シテ防護スヘシ
但街路其外ニテ人命ニ係ル危難在之節ハ瞬速救護シ最寄ノ醫ヲ頼ミ治療ノ手續
ヲ懇切ニ取計フヘシ

第三條 老幼癡疾婦人等ハ就中注意シテ保護スヘシ

第四條 持区内ノ大小往來筋及市街村落ノ位置區長戸長ノ宅等盡ク詳知スヘシ
第五條 持区内ノ戸口男女老幼及ヒ其職業平生ノ人トナリニ至迄注意シ若シ無産体ノ者集合スルカ又ハ怪シキ者ト認ルルハ常ニ注目シテ其舉動ヲ察スヘシ
第六條 持区内ヘ他ヨリ移リ來ル者アラハ前條ニ隨而速ニ之ヲ探知スヘシ
但右等ノ事ニ付權威ヲ以テ其人ヲ呼出ス等ノ儀ハ決シテ有之間敷勉テ當人之覺知セサル様隱密ニ探偵スルヲ以テ警察ノ本意トス若シ已ムヲ得サルコトアルトキハ自ラ行テ尋問スヘシ

第七條 布告布達等總テ新令ノ出ルニ付人心ノ信否ヲ考察シテ警部ニ報告スヘシ

第八條 巡邏中職務ニ關スル大小ノ事故ハ逐一手帳ニ記シ警部ヘ報知スヘシ

第九條 非番タリトモ合圖アルカ又ハ臨時呼出ヲ受レハ早速ニ駆付ヘク平常其心掛アルヲ要ス

第十條 往來筋ノ妨害トナルヘキ物ヲ見ルトキハ速ニ之ヲ取除カシムヘシ

第十一條 道路ノ荒蕪溝渠ノ淤塞及ヒ不潔物アレハ之ヲ戸長ニ告ケ掃除ノ手續ヲナスヘシ

第十二條 官舎橋梁道路其他公有ノ建造物破損スルルハ警部ニ報知スヘシ

第十三條 行人ニ道路或ハ其他ノ事ヲ尋問セラルトキハ丁寧ニ教示スヘシ

第十四條 稚兒道ニ迷フアラハ保護シ其居所不明ナル者ハ之ヲ其地ノ戸長ニ預ケ之ヲ警部ヘ通知スヘシ若シ其居所分明ニシテ其持区内ナラハ之ヲ送致シ他ノ區ナラハ其地ノ區戸長ニ掛合送致ノ手續ヲナスヘシ

第十五條 芝居其他群集ノ所ニハ出張シテ亂雜ヲ防制スヘシ

第十六條 放レ牛馬アレハ之ヲ便宜ノ所ニ留メ置キ其主分明ナル者ハ之ヲ附與シ然ラサレハ警部ノ指圖ヲ受ケヘシ

第十七條 路上酒ニ酔ヒ失心スル者ハ之ヲ注意シ又ハ最寄人民ニ介抱セシメ其暴動スル者ハ取押ヘ其地ノ戸長ニ引渡スヘシ

第十八條 路上狂癡人アレハ穩ニ之ヲ介抱シ其暴動スル者ハ取押ヘ其地ノ戸長ニ引渡スヘシ

第十九條 路上ニ狂犬アラハ打殺シ戸長ニ告ケ之ヲ取棄ル手續ヲナスヘシ

第二十條 道路河渠ニ死屍アルトキハ其摸樣ヲ檢シ警部ニ報知シ指圖ヲ受ケヘシ

第二十一條 獸畜ノ死骸アルトキハ速ニ戸長ニ告ケ之ヲ取除ク手續ヲナスヘシ

第二十二條 鳥獸魚類其他食物ヲ販賣スル店ニ賤造腐敗ノ品アルヤチ常ニ検査スヘシ

第二十三條 人家夜間戸締油斷ノ者アラハ速ニ其主ニ知ラスヘシ

第二十四條 怪シキ者ヲ見認ルルハ取押シテ様子ニ依リ持区内「出張所」ニ連行或ハ警部ニ密報シ差圖ヲ受ケヘシ倉卒ノ取計アル可カラズ

第二十五條 失火ノ節ハ巡查失火ノ合圖ヲナシ一般ニ知ラシム且燒失ニ罹ル家ハ其家人ヲ助ケ消防ノ事モ勤ムヘシ消防人巳ニ集ルニ至レハ勉テ亂雜及ヒ窃盜ヲ防ク事ニ注意スヘシ

第二十六條 同斷ノ節第一ニ其人ヲ救ヒ出シ次ニ書類金貨等ヲ出スヘシ又官廳其他區戸長ノ宅ハ文書第一ニ取出スヘシ

第四章 巡查心得ノ事

第一條 專ラ行儀作法ヲ正ク威權ケ問敷儀無之シテ區民ノ侮慢ヲ受サル様可心掛事

第二條 法度規則ヲ遵守シ上官ノ命令ヲ遵奉スヘシ決シテ職外ノ事ヲ議スヘカラス

第三條 同勤中ハ一心全体ト心得常ニ謙和温順ヲ旨トシ忠實ヲ以テ交誼ヲ盡シ職務ニ怠ラサル様互ニ獎勵スヘキ事

第四條 節儉ヲ守リ分限不相應ノ義致間敷事

第五條 職務上ニ付上官ニ申立ノ事ハ總テ實直ヲ旨トシ愛憎偏倚ノ儀決シテ有之間敷尤モ後日ニ至リ前言ヲ翻改スル儀無之様心得可事

第六條 巡邏中道路行人並營業ノ者ノ妨ニ不相成様可心得事

第七條 往來ノ者ヲ取扱ニハ柔和ヲ旨トシ辨ヘナキモノハ殊更穩ニ取扱ヒ決シテ凌辱ヲ加ヘ手荒キ處置致間敷事

第八條 取調ノ爲メ人家ニ至ル節ハ接對筋總テ懇篤ニ可致但シ公私ノ分ヲ守リ押レ々敷儀決シテ有之間敷事

第九條 巡邏中私人家ニ立寄候義ハ勿論徒ラニ市店ヲ詠メ職務ヲ怠ル間敷事

第十條 持区内ニテ金譚等頼入或ハ物ヲ買ヒ其價ヲ借ル等ノ儀決シテ有之間敷事

第十一條 出勤中醉態ヲ露ハシ又ハ婦女ヘ對シ戲ケ間敷儀決シテ有之間敷事

第十二條 機密ノ筋ハ勿論職務ニ係リタルトハ凡テ他言致間敷事

第十三條 公事出入等ニハ一切關係致間敷若シ強テ相頼候者アラハ警部ヘ具申スヘキ事

第十四條 官ヨリ相渡サレタル得物ノ外兵器ヲ携ル義ハ不相成且相渡サレタル品ハ犬切ニ取扱フヘキ事

第十五條 得物ハ自身ヲ擁護スル具ト心得猥リニ人ヲ打擲致間敷候ハ勿論凶暴人アリテ手ニ餘リ不得止節ハ格別ノ事

第十六條 巡邏中傍人ノ嘲哂スルコトアリト雖モ必ス耻辱ト思フヘカラス能ク忍耐シテ相當ノ處置ヲナシ決シテ憤怒ノ色ヲ顯シ争闘ケ間敷義致間敷事

第十七條 何様ノ事アリトモ職務上ニ付人民ヨリ謝物トシテ金銀物品ヲ受ルト有ル可カラサル事(十五年第四十四號達行政官吏職務紀律ノ發布ニ依リ津減ス)

第十八條 巡邏中ハ必ス役服ヲ着用シ能ク客姿ヲ正フシ他人ト同行雜談スヘカラザル事

第十九條 毎朝衣服冠物其他器械ヲ檢査シ常ニ見苦シカラサル様注意スヘキ事

第二十條 「屯所」ハ毎朝清潔ニ掃除スヘキ事

○太政 達第八十八號 七年七月(省使東京府)
東京府管下兵隊屯營ヲ除クノ外官廳地官用地構内ニ居住ノ者有之ニ付テハ警察上取調ノ爲メ警部又ハ巡查等其守門者ヘ申通臨時立入候儀可有之候事

○太政 達第三十號 十年二月二十八日(使府縣東京府)
明治七年七月第八十八號ヲ以テ東京管下各官廳地官用地構内ニ居住ノ者警察上取調ノ爲メ該官吏其守門者ヘ申通シ臨時立入候儀相達候處右地方ニ於テモ同様ノ義ト可心得此旨相達候事

○本 縣訓令第四十三號 二十二年三月十三日(警察署)
外勤巡查勤務規程左之通之ヲ定メ本年四月一日ヨリ施行ス但明治十九年十二月訓令第二十號巡查勤務規程ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

外勤巡查勤務規程
第一條 外勤巡查ハ受持区内ノ警邏查察戸口調査水火警防及衛生風俗道路交通營業取締其地執行警察ノ事務ニ從事ス

第二條 受持区内執行警察ノ事務ニ付テハ受持巡查其責ニ任ス

第三條 駐在巡查ハ其受持区内ニ生スル左ノ事件ヲ取扱フモノトス
一 行政處分ニ屬スル輕易ノ變死傷火災届及盜難届ヲ受付シ又ハ其現場ヲ檢視シ調書ヲ作り所屬署長ニ送付スル事但時機ニ依リ檢証處分ヲ必要トスル場合ハ警部補代理タルヘシ

- 二 祭典屆及諸興行屆ヲ受理スル事
- 三 警察取締ニ屬スル請願ノ實地ヲ檢査スル事
- 四 諸興行其他群集ノ場所ニ監臨ノ事
- 五 棄兒迷子屆ヲ受付シ現場取調ノ上所屬署長ニ申告スル事
- 六 警察取締ニ屬スル諸營業檢査ノ事
- 七 被監視人ノ行狀視察及認印ヲ與フル事
- 八 陸軍召集條例ニ依リ証明ヲ與フル事
- 九 遺失物紛失物及得遺失物屆ヲ受付スル事但長大貴重ノ物件ハ此限ニアラス
- 十 埋火葬ノ認許證ヲ檢閱スル事
- 第四條 前條各項ノ事件至急ヲ要セサル場合ハ便宜所屬署長ニ送付スヘシ但書類ハ受付ノ月日ヲ紙端ニ朱記シテ認印スヘキモノトス
- 第五條 駐在巡査ハ日勤ニテ一晝夜八時以上ヲ服務時間トシ其ノ時間ヲ休憩トス但夜間ハ一時間以上警邏ノ勤務ヲナスヘシ
- 第六條 駐在巡査ハ一日程五里以上ニテ毎月十五回以上村落ヲ巡回ヲ爲スヘシ
- 第七條 駐在巡査ハ服務時間内ニ於テ戸口調査及視察事務上ニ從事スルコトヲ得
- 第八條 警察署分署所在地ノ受持巡査ハ隔日勤務ニテ一晝夜十四時間以上ヲ服務時間トシ其ノ時間休憩トス
- 第九條 市街巡行ノ步數ハ一分時ニ七十歩以內トス
- 第十條 隔日勤務ノ巡査ハ非番ヲ以テ受持區内ノ戸口調査及視察事務ニ從事スヘシ但署長ノ許可ヲ受ケ服務時間内ニ於テ書問戸口調査ヲ爲スコトヲ得
- 第十一條 當直員ニ不足ヲ生シタルトキハ非直員ヲ操上ルコトアルヘシ
- 第十二條 非直ノ者臨時勤務ニ服スト雖モ他日別ニ非直スルコトヲ得ス但其勞動ヲ

- 計リ署長特ニ廿四時間内ノ休憩ヲ與フルコトアルヘシ
- 第十三條 立番ヲ爲シタルトキハ其位置ヨリ四方五十歩以內運動スルコトヲ得但形跡ヲ失フ如キ曲路ニ到ルヘカラス
- 第十四條 當直巡査ハ交代時間ヨリ四十五分前ニ出署シ第一勤怠簿ニ捺印シ第二點檢第三訓授ヲ受ケ各勤務ニ服スヘキモノトス
- 第十五條 外勤巡査ハ其受持區内ノ人家稠密交通頻繁ノ地ヲ撰ミ宿所ヲ定ムヘキモノトス
- 第十六條 組合長ハ組合區内ニ於テ万報又救援等ノ煤助其他組合ニ關スル取締ヲ爲スヘキモノトス但受持區内ニ於ケル權限ハ受持巡査ニ異ナルコトナシ
- 第十七條 駐在巡査ハ日誌ヲ備ヘ左ノ事項ヲ登記スヘシ但日誌ハ毎月(出頭)所屬署ニ携帶シテ署長ノ點檢ヲ受ケヘシ
 - 一 服務時間警邏巡査戸口調査ノ事項
 - 二 營業者被監視人視察等其他取締ニ從事シタル勤務ノ種別
 - 三 巡回ノ町村名^{トモ}字^名及取扱タル事項
 - 四 前各項記載外ノ要件
- 第十八條 駐在巡査職務ノ爲メ出張巡回ヲ要スルトキハ其勤務ニ服スル前巡回出張等ノ町村名^{トモ}字^名及時間ヲ日誌ニ登記スヘシ
- 第十九條 受持巡査ノ取扱ニ屬スヘキ諸般ノ事件ニ關シ通報ヲ要シ救援ヲ求ムル場合ニ在テハ各受持區組合内ハ勿論時機ニヨリテハ他ノ組合ト便宜相互ニ通報又ハ救援スヘシ但通報救援ノ煤助ハ組合長之ヲ爲スヘシト雖事緊急ノ場合ニ於テ各自適宜ノ活動ヲ爲スハ素ヨリ妨ナシトス
- 第二十條 村落警邏ノ線路ニ於テハ適宜ノ場所ヲ撰定シ警邏表ヲ備置クヘシ

第廿一條 警邏服務ノ際ハ村落備付ノ警邏表ニ必ス認印ヲ捺スヘシ
 第廿二條 警邏表ハ左ノ雛形ニ倣ヒ調製スヘシ
 第廿三條 疾病其地正當事故ノ爲メ勤務ニ服スルコト能ハサル場合ハ速ニ所屬署長ニ届出ヘシ
 第廿四條 署長ハ土他ノ狀況ニ依リ規定度數ノ巡回行ハレサルトキハ警部長ノ認可ヲ得テ其巡回ヲ減少スルコトヲ得
 第廿五條 署長ハ勤務ノ細則ヲ定メ警部長ノ認可ヲ得テ施行スルコトヲ得
 ○保第一五六號 二十二年八月十六日日本
 部保安課ヨリ各署ヘ
 今般訓令第二百二十號ヲ以テ別紙對話書沿海町村役場ヘ配付相成候條爲念及御送付候也

Gentlemen,

Be so Kind as to write answers down on the following questions

The Name of your ship?

where from & what for?

when & where for to start?

貴下 譯

左ノ順序ニヨリ御手数數ナカラ御記載ヲ乞フ

一 貴艦名

一 何地ヨリ何用デ入港

一 何時又ハ何地ニ向テ起程スルヤ

○本部警訓第四號 二十三年三月六日 (警察署 全分署)
 民事上召喚不應者引致ノ件ニ付左ノ通警保局長ヨリ通知相成候條此旨心得ラルヘシ
 ○警發第七號 二十三年二月二十八日
 民事上召喚不應者引致ノ件ニ付別紙ノ通司法大臣ヨリ各裁判所ヘ訓令相成候條爲御心得及御通知候也

(別紙)

○司法省民第三二四號 二十三年二月十九日 司法大臣

民事上裁判所ノ召喚ニ應セサル者アルトキハ其何タル場合ヲ問ハス警察官ニ照會シテ引致セシメ得ルノ慣例ニ有之候處本來證人ノ如キ必要アル場合ニ於ケル外ハ一切之ヲ引致スヘカラサルモノトス

現今ニ至ツテハ實際濫ニ引致セシムル義ハ無之ト思考スレトモ依然舊慣ニ依リ居候様ニテハ不都合ニ付心得有之警ナレトモ爲念此旨更ニ訓令ス

○内務訓令第一三八號 二十三年三月六日

市町村ニ於テ火災水害ノ予防ヲ周到ナラシムルカ爲メ消防組水防組ヲ設置シ其組織等ハ條例トシテ規定スルヲ得ヘシト雖モ水火災ニ關スル事項ハ府縣警察官ノ職權ナルヲ以テ市町村ノ設立ニ係ル消防組水防組ト雖モ所轄警察官ノ監督ニ屬シ尙警察官臨場ノ際ニ在リテハ其指揮ヲ受クヘキモノトス就而ハ市町村ニ於テ右ノ旨意ヲ誤ルコト無之様豫メ注意セラルヘシ

右訓令ス

○本部警規第三一號 明治二十三年十二月三日 (警察署 全分署)

警察取締ニ關スル營業者ハ受持巡查ニ於テ左ノ區別ニ從ヒ非番若クハ巡回途次臨檢ヲ爲スヘシ但特ニ視察ヲ要スルモノハ適宜其數ヲ増加スルコトアルヘシ

- 一被監視人 一ヶ月 二回
- 一湯屋 全 全
- 一料理屋 全 一回
- 一飲食店 全 全
- 一斃牛馬並獸類化製場及諸獸骨鷹貯藏場 全 一回

○本警規第二號 二十三年二月七日 (警部長ヨリ各署ヘ)
民事上裁判執行之件ニ付別紙之通内務大臣ヨリ訓令相成候條右ニ據リ執行スヘシ
(別紙)

○訓令第五二號 二十三年二月一日内務大臣ヨリ本縣ヘ
明治十八年七月二日當省甲第二十六號ヲ以テ民事上裁判執行之件相達置候處爾今裁判言渡書寫ノ末尾ニ該命令書ヲ添付セサルモ權利者ニ於テ裁判官ノ命令書ヲ提供シ義務者所轄ノ警察署ニ該執行ヲ願出ツルトキハ警察官ハ直ニ義務者ヲシテ右命令書通執行セシムヘシ

○第十三章 休暇歸省出張赴任

○本縣丁第十八號 十六年十一月八日 (警察本署 警察署 警察分署)

巡查病氣引籠規程

第一條 巡查疾病ニ罹リ欠勤スルモノハ渾テ左ノ手續ヲ爲ス可シ
第一病氣ノ爲ノ執務ニ堪ヘサルモノハ病症届出テ二日以内引籠ルヲ得
第二病氣引籠當日ヨリ三日ニ至リ出勤爲シ能ハサルトキハ公立病院 (該院ナキ地ハ私立病院若クハ開業醫師) ノ診斷書ヲ添ヘ病狀届出七日以内引籠ルヲ得若

シ七日ヲ經テ猶ホ治療セサルトキハ七日毎ニ全様ノ手續ヲ以テ届出ヘシ
第三醫師ノ診斷ニ依リ轉地療養又ハ歩行運動ヲ必要トスル病症ナルトキハ醫按書ヲ添ヘ其旨願出許可ヲ受クヘシ

第四快痛出勤スルキハ其旨届出ヘシ

第二條 病氣引籠後五十日ヲ經テ執務ニ堪ヘサルモノハ醫按書ヲ添ヘ一旦退職願出ツ可シ

但職務上負傷治療中ノモノハ此限ニアラス

第三條 前二條ノ願届書ハ代理代印等ヲ以テ爲スコトヲ許サス

第四條 病氣引籠中ノモノハ許可ナクシテ外出スルヲ許サス

但非常ノ場合ハ此限リニアラス

○本署 第二百九十二號 明治十六年五月五日 (警察本署ヨリ各署ヘ)
各署詰警部警部補公務上出處ノ節ハ着發ハ勿論宿所等其都度届出可有之此段及通達候也

○本署 第七百八十四號 十八年五月十八日 (警察本署ヨリ各署ヘ)

各警察署分署詰警部警部補出張巡回等ノ節ハ其都度發着届可有之此段及通達候也

但巡查ノ分署長ハ本文同様届出可有之
○本縣 丁第九號 明治十八年三月九日 (警察本署 警察署)
自今警部以下轉署出發心得別紙之通相定候條此旨相達候事
(別紙)

警部以下轉署出發心得

第一條 警部警部補准判任御用係ニ於テ轉署ヲ命シタルトキハ其拜命日ヨリ七日以内ニ發足スヘシ

第二條 條前新任ノモノハ拜命ノ日ヨリ四日以内ニ發足スヘシ
第三條 各署長ハ代任到着ノ日ヨリ四日分署長ハ代任到着ノ日ヨリ三日以内ニ發足スヘシ

但次席ノモノハ事務引繼クトキハ第一條ノ日限ヲ適用ス
第四條 巡查及ヒ准等外御用係雇ニ於テ轉署ヲ命シタルトキハ其拜命ノ日ヨリ四日以内ニ發足スヘシ

但派出所交代ハ此限ニ非ス

第五條 前條新任ノモノハ拜命ノ日ヨリ三日以内ニ發足スヘシ

第六條 事務引繼其他公用及ヒ病氣等ニテ實際不得止事故アリテ日限内ニ出發シ難キハ其旨申出警部長ノ承認ヲ受クヘシ

但新任ノ外各署詰巡查以下ハ其署長ノ承認ヲ受クヘシ

第七條 前條ノ承認ヲナシタルハ其旨轉任ノ署ニ通報スベシ

○内務省外 十八年七月三十日(警視廳府縣 東京府)

巡查看守休暇規則左ノ通相定候條其細目順序ハ適宜相定可届出此旨相違候事

但本文ニ抵觸スル從前ノ指令ハ取消候事

巡查看守休暇規則

第一條 巡查看守ハ常ニ定員ノ充足ヲ要スルヲ以テ休暇ヲ許サ、ルヘキモノナレモ其勤務上差支ナキニ於テハ皆勤ノ者ニ限り特ニ慰勞ノ爲メ休暇ヲ與ルコトヲ得

第二條 休暇ノ日數ハ左ノ割合ニ從フ
休暇日數

一ヶ年間皆勤ノ者 三週間
半ヶ年間皆勤ノ者 一週間

第三條 非番父母祭日及職務上負傷者ノ欠勤ハ欠勤日數ニ算入セス
第四條 休暇日數ハ數年ニ通算シテ併與スルヲ得ス

○本縣丁第四十三號 十八年八月廿二日(警察本署 警察署)
巡查休暇規則

第一條 巡查ハ常ニ定員ノ充足ヲ要スヘシト雖モ勤務上差支ナキ場合ニ於テハ皆勤ノ者ニ限り特ニ慰勞トシテ休暇ヲ與フヘシ

第二條 休暇ノ日數ハ左ノ割合ニ從フヘシ

壹ヶ年間皆勤ノ者 三週間

半ヶ年間皆勤ノ者 一週間

第三條 皆勤年數ハ本人就職ノ當日ヨリ起算スヘシ但忌引ハ前后ノ皆勤數ヲ通算スルモノトス

第四條 非番休暇父母祭日及職務上傷病ヲ受ケ治療中等ノ日數ハ缺勤ニ算入セス

第五條 休暇ハ數年ニ通算シテ併與スルヲ得ス但一年内ニ分與スルコトヲ得

第六條 休暇ヲ爲サント欲スルモノハ署長又ハ分署長ハ願出許可ヲ受クヘシ

第七條 休暇中旅行若クハ歸省セントスルトキハ其場所等ヲ詳記シ更ニ前條ノ手續ヲ爲スヘシ

○本縣訓令第二百九十號 二十二年十二月十四日(警察本署 警察分署)

巡查赴任出張ノ途次疾病天災其他正常事故ノ爲メ期限ヲ經過シタルトキハ所在地醫

察署又ハ分署ノ証明書ヲ添ヘ(病氣ハ醫師ノ診 速ニ所屬署長ニ届出ヘシ但警察署分

署在ラサル地ニ於テハ所在地駐在巡查又ハ町村長ノ証明書ヲ添付スルモ妨ナシトス

○本縣訓令第二百九十三號 二十二年十二月十八日(警察本署 警察分署)

巡查歸省心得

第一條 父母疾病ノ爲メ歸省ヲ要ヘルトキハ其所在地警察署又ハ分署ノ證明書及醫師ノ診斷書ヲ添ヘ所屬署長ニ出願スヘシ

第二條 自己養病ノ爲メ轉地ヲ要スルハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ所屬署長ニ出願スヘシ

第三條 一家ノ浮沈ニ關スル場合ニ於テ歸郷ヲ要スルハ其所在地警察署又ハ分署ノ證明書及親族(親族アラサルトキハ隣佑二名以上)ノ事情書ヲ添ヘ所屬署長ニ出願スヘシ

第四條 歸省歸郷及ヒ轉地ノ日數ハ往復ヲ除キ三週日以内ニ限ルモノトス

第五條 前條ノ場合ニ於テ延期ヲ要スルトキハ其日限内事由ヲ詳記シ第一條第二條第二條ノ手續ニ從ヒ追願スヘシ但前條許可ノ日數ヲ經過スルトキハ所在地警察署又ハ分署ノ

第六條 往復中正常事故ノ爲メ許可日數ヲ經過スルトキハ所在地警察署又ハ分署ノ證明書ヲ添ヘ(病氣ハ醫師ノ診斷書ヲ添ユ)速ニ所屬署長ニ届出ヘシ但警察署又ハ分署アラサル地ニ於テハ所在地駐在巡查又ハ町村長ノ證明書ヲ添ユルモ妨ケナシトス

第七條 出發ハ前日歸着又ハ到着(歸省歸郷轉地ノ場所ニ到着スルヲ云フ)ハ翌日必ス所屬署長ニ届出ヘシ

第八條 往復ノ日數ハ一日十里(一里ニ滿サル端數ハ除棄ス)ヲ以テ計算スト雖モ汽船汽車其他交通ノ便アル地ニ於テハ實際往復ヲ要スル日數ニ依ルヘシ

第九條 歸省歸郷及轉地ノ願書ニハ其町村番地里程及往復日數ヲ詳記スヘシ

○警訓第七七號 二十二年十二月十八日 警部長ヨリ各署ヘ
今般訓令第二九三號ヲ以テ巡查歸省心得被相定候處第一條ノ場合ニ於テ父母急病ニ際シ本條ノ手續ヲ爲スニ違アラシテ電信又ハ急飛ニ依リ出願シタルハ一時許可スルモ妨ケナシト雖モ速ニ通常ノ手續ヲ履行セシムヘキハ當然ナリトス又第二條一家ノ浮沈ニ關スル場合ハ他ニ相當ノ保持者ナキハ限リ許可セラルヘシ但歸省歸郷

又ハ轉地ヲ許可スルニ當リ能ク其實事ヲ審査シ幣害ヲ生セサル様注意セラルヘシ

○第十四章 巡查教習

○内務訓令第一二四號 十九年四月八日

自今新ニ召集スル巡查ハ其職務ニ服從セシムル前ニ於テ別紙教習規則表序ニ依リ粗ホ警察ノ要領ヲ訓授シ實務ヲ練習セシムヘシ

(別紙) 巡查教習規則標準

第一條 巡查教習所ハ新募巡查ナシテ其實務ヲ練習セシムル所トス

第二條 巡查教習所ハ警察本部内若クハ府縣廳所在地ノ警察署内ヘ設置スヘキモノトス

但便宜ヨリ警察本部若クハ警察署ノ附屬舎ヲ以テ之ニ充ルヲ得

第三條 教師ハ警官練習所ニ於テ卒業シタル警部警部補ノ内壹人若クハ二人ヲ以テ之ニ充ツヘキモノトス

第四條 授業ハ警察ノ職務ニ關スル要領ヲ示スモノトス其科目左ノ如シ

- 一 巡查職務ノ本分並ニ服務紀律ノ大意
- 一 衣類ノ着裝及帶劍ノ心得
- 一 禮式及姿勢運動ノ作法
- 一 巡查懲罰例及賞與規則給助例ノ大意
- 一 警邏巡察ノ際注意スヘキ條件
- 一 緊要ナル取締規則ノ要領
- 一 諸興行場其他ノ場所監視方ノ心得

一 人民ニ對スル言語動作ノ心得
 一 非常警戒ノ心得
 一 遞傳護送ノ心得
 一 警備警備ノ心得
 一 注意申報ノ心得
 一 外國人取扱方ノ心得
 一 報告書其他公用文書記録方心得
 一 職務中告訴發テ受ケタルトキ取扱方心得
 一 現行ノ重罪犯人アルヲ見聞シタルトキ取扱方心得
 一 現行ノ違輕罪犯人取扱方心得
 第五條 新募巡查ハ定期間練習ヲ經ヘタル者ニアラサルハ實務ニ從事セシムヘカラス
 第六條 但非常警戒ヲ要スヘキ事アルトキハ本文ノ限ニアラスト雖モ先任巡查ノ部伍ニ編入スヘキヲ要ス
 第七條 教習ノ期限ハ一ヶ月ヨリ短カ、ラス二ヶ月ヨリ長カラサルモノトス
 但修業時間ノ外見習ノ爲メ先任巡查ノ部伍ニ編入シテ實務ニ服セシムルヲアルヘシ
 第八條 教習期限ノ終ニ於テ修業成績ヲ試驗スヘキモノトス
 第九條 試驗ニ於テ及第シタル者ハ直ニ實務ニ服セシメ其落第シタルモノハ仍ホ一ヶ月間練習セシメ更ニ試驗ヲ受ケシムルヲアルヘシ
 ○ 內務訓令第一二五號 明治十九年四月八日

新ニ召募スル巡查訓練ノ儀今回及訓令候處右ハ素ヨリ警察ノ大要ヲ領得セシムルニ止ルモノニ付其教習ヲ經テ現職ニ服シタル者ヲシテ仍ホ實務ニ練熟セシムル爲メ別紙標準ニ據リ訓授ヲ爲スヘシ
 右訓令ス
 (別紙)
 巡查訓授例
 第一條 警察署長警察分署長若クハ其代理官ハ巡查ヲシテ其實務ヲ習熟セシムル爲メ警察關スル法律命令及ヒ該縣ノ取締規則其他ノ執務方法中緊要ナル條件ヲ訓授スヘキモノトス
 第二條 訓授ハ毎朝點檢交代ノ際之ヲ爲スヘシ其時間ハ三十分間ヨリ小ナカルヘカラス
 第三條 訓授ノ材料ハ別表記載ノ條件ヲ標準トシ之ヲ定ムヘキモノトス

明治	年月調	何々縣警部氏	名	印
一	日	警察事務ノ要旨		
二	日	巡邏巡察ノ際最注意スヘキ條件		
三	日	行狀及心得ノ事		
四	日	注意申報ノ心得		
五	日	帶劍心得ノ要領		
六	日	該地方長官ノ告達ニ係ル取締規則中緊要ナル條項		自何條至何條
七	日	警察ニ關スル前一周日間ノ閣令省令及該地方長官ノ告達類中緊要ノ件		應問
八	日	集會條例及之ニ關スル告達中緊要ノ條項		自何條至何條
九	日	嘯聚暴動及群集喧嘩ノ警防方心得ノ事		自何條至何條
十	日	傳染病豫防規則中ノ要項及檢疫心得		自何條至何條
十一	日	藥品取締規則及之ニ關スル告達中緊要ノ條項		自何條至何條

第一編第十四章 巡查教習

一三〇

表 授 訓 查 巡 署 察

十二日	爆發物取締規則中ノ要項	自何條至何條
十三日	火藥取締規則中主要ノ條項	自何條至何條
十四日	銃砲取締規則中ノ要項	自何條至何條
十五日	警察ニ關スル前一周日間ノ閣令省令及該地方長官ノ告達類中主要ノ條件	應問
十六日	賭博犯處分規則及細則中緊要ノ條項	自何條至何條
十七日	古物商及質屋條例其細則中緊要ノ條項	自何條至何條
十八日	出版條例寫真條例新聞條例中緊要ノ條項	自何條至何條
十九日	度量衡取締規則及米商會社條例中ノ要項	自何條至何條
二十日	諸印紙稅則規中緊要ノ條項	自何條至何條
廿一日	鳥獸獵規則ノ要項	自何條至何條
廿二日	警察ニ關スル前一周日間ノ閣令省令及該地方長官ノ告達類中ノ要件	中間
廿三日	墓地及埋葬取締規則中要ノ項	
廿四日	水災風震等ノ變災ニ關スル心得方ノ要旨	
廿五日	人命急變救援方心得ノ事	自何條至何條
廿六日	難破船及漂流物取扱規則中緊要ノ條項	自何條至何條
廿七日	遺失物取扱規則中ノ要項	自何條至何條
廿八日	警察ニ關スル前一周日間閣令省令及該地方長官ノ告達類緊要ナル條件	應問
廿九日	治罪法中巡查ニ必要ナル條項	同上
三十日	刑法中最注意ヲ要スヘキ條項	同上
三十一日	教會講社祭典葬儀等取締方ノ要件	同上

○本縣第五五三號 明治二十二年九月十七日(警察本部)
 明治二十年十月廿六號訓令巡查教習所規則左ノ通り改定ス
 巡查教習所規則
 第一條 教習所ハ受業生ニ警察ノ要務ヲ教習スル所トス但實務ノ練習ヲ爲サシムル
 一アルヘシ
 第二條 教習所ハ警察本部ニ於テ管理ス
 第三條 教習所ニ所長一人教官一人助教一人乃至二人ヲ置ク

第一編第十四章巡查教習

- 第四條 教習所長ハ本部課長若クハ其所在地警察署長ヲシテ兼務セシム
- 第五條 教官ハ警官練習所卒業ノ警部若クハ警部補助教ハ巡查ヲ以テ之ニ充ツ但助
 教ハ他ノ學力相當ナル巡查ヲ以テ充ルコトアルヘシ
- 第六條 教習所長ハ警部長ノ監督ヲ受ケ教官助教ヲ指揮ス
- 第七條 教習所長ハ教官助教及受業生ノ進退賞罰ヲ警部長ニ具狀スルヲ得
- 第八條 教習所長ハ所内整理ノ責ニ任ス
- 第九條 教習所長事故アルトキハ首席ノ者其内部ノ事務ヲ代理ス
- 第十條 教官助教ハ教授ノ責ニ任シ兼テ所内ノ事務ヲ分掌ス
- 第十一條 教官助教ハ受業生ノ勤怠能否ヲ教習所長ニ申告ス
- 第十二條 受業生ハ修業期限間教習所内ニ寄宿セシム
- 第十三條 授業ノ科目左ノ如シ
 - 一 警察大意
 - 二 警察取締規則
 - 三 警察服務心得
 - 四 姿勢動作法
 - 五 司法警察訓則
 - 六 告訴告發其他公文記錄ノ心得
 - 七 操練捕繩
 - 八 擊劍水泳
- 第十四條 修業期限ハ二ヶ月トス
- 第十五條 授業時間ハ毎日七時間トス但日曜日大祭日ハ一般休暇ノ例ニ依ル
- 第十六條 試験ハ小試験卒業試験ノ二種ニ分チ小試験ハ毎月一回卒業試験ハ修業ノ

終期ニ於テ行フヘシ

第十七條 試験ノ成績ハ及第落第ノ二種ニ分チ每科ノ点数十點ヲ以テ満点トシ科目ノ數ヲ以テ得点總數ヲ除シ得タルモノヲ平均点トス

第十八條 小試験ノ平均点數ハ卒業試験ノ得点數ニ合算シ三ヲ以テ其和ヲ除シ每科平均点數六點ニ達セサルモノハ及第トナスコトヲ得ス

第十九條 卒業試験ノ及第者ニハ卒業證書ヲ授與シ其満点ヲ得タルモノニハ別ニ優等證書ヲ授與スルコトアルヘシ

第二十條 受業生取締其他教習細目ハ教習所長之ヲ定メ警部長ノ認可ヲ經テ施行スヘシ

○本縣訓令第百十九號 二十三年四月十四日(警察署全分署)

巡查訓授規程

第一章 要領

第一條 警察署長分署長(署長差支アルトキハ監督)ハ毎朝点檢ノ後必ス訓授ヲ行フヘシ

第二條 訓授ハ專ラ各巡查ヲシテ實務ニ練達セシメ處分ノ中正ヲ期スルニ在ルヲ以テ訓授ノ事項ハ警察上必要ナル法律規則其他ノ命令訓示例規及職務執行上ニ關シ適切ノモノナルヲ要ス

第三條 毎朝訓授スヘキ事項ハ各署長ニ於テ適宜選定スヘシト雖モ臨時必要ノ場合ニ在テハ警部長ニ於テ指定スルコトアルヘシ

第四條 署長ハ毎月別離紙形ノ訓授表並應問表ヲ作り翌月五日迄ニ警察本部ニ送致スヘシ

第二章 訓授ノ方法

第五條 訓授ハ書物ヲ用フルコトナク而シテ其法律規則ノ如キハ主要ヲ摘シ理論ヲ去リカメテ平易簡明ニ口授スヘシ

第六條 訓授ノ時間ハ点檢後凡ソ三十分トス

第七條 毎朝訓授ノ始若クハ其終ニ於テ前日當番ノ者ノ申告ヲ聽キ其處分ノ當否ヲ正スヘシ

第八條 毎週一回前日訓授シタル事項ヲ試問シ其優劣ヲ判シ点数ヲ取ルヘシ但試問点数八十ヲ以テ最高トス

第九條 町村駐在巡查ハ毎朝訓授ヲ行ヒ雖キニ付在署巡查ニ訓授セシ事項ハ一月内數次ニ通知(例ハ何日ヨリ何日マテ何々條例全部何々規則第何條ヨリ何條マテ別ニ通知スルノ類而テ事務處分上ノ訓授ニ關ルモノハ其要達スヘシ)シ毎月召集ノ際尙ホ其通知セシ事項ノ要点ヲ訓授シ同時ニ試問ヲ爲スヘシ

第十條 前條訓授及試問ハ必ス二時間以上之ヲ爲スヘシ

第三章 受訓者心得

第十一條 監督(監督差支アルトキハ首席巡查)ハ毎朝点檢檢査後直ニ巡查ヲ率ヒ訓授場ニ到リ署長ノ來場ヲ待ツヘシ

第十二條 署長來場又ハ退場ノトキハ齊シク立禮スヘシ

第十三條 受訓中ハ脱帽着席シ應問又ハ申告ノトキハ帽ヲ冠リ直立シテ劍ノ柄頭ヲ握リ右手ヲ垂下シ終始姿勢ノ肅正ヲ保チ言語明瞭ニ陳述スヘシ

第十四條 点檢後直チニ其場ニ於テ訓授ヲ受ルトキハ總テ訓授者ノ指揮ニ從ヒ第十一條以下ノ規定ニ依ルヲ要セス

○本縣訓令第百二〇號 廿三年四月十四日(警察署全分署)

巡查講習所規則左ノ通之ヲ定ム

但明治十九年(七月)丁第六十一號巡查訓練規則ハ廢止ス

巡查講習規則

第一條 本則ハ巡查ヲシテ職務上必要ナル各般ノ科目ヲ講習セシムル爲メ設クルモノトス

第二條 講習ハ毎月二回以上四回以下各警察署分署ニ於テ開會スヘシ

第三條 講習開會ノ度數ハ前條ノ範圍ニ依リ各署ニ於テ豫メ之ヲ定メ警部長ニ届出ツヘシ

第四條 町村駐在巡查ニシテ毎回出會シ難キ者ニハ各署長ニ於テ便宜自修ノ方法ヲ授クヘシト雖モ可成毎月一回以上ハ出會セシムヘシ

第五條 警察署長分署長ハ自ら會頭ト爲リ講習上百般ノ責ニ任スヘシ

第六條 警察署長分署長ハ署員中技術熟達ノ者一名又ハ二名ヲ選抜シテ教導ト爲シ

武術教練ノ任ニ當ラシムヘシ

第七條 講習科目ヲ分ツコト左ノ如シ

一文學

警察上必要ナル法律規則

二武術

擊劍柔術水練捕繩

三操練

巡查操練法敬禮式

第八條 前條講習科目中文學ニ在リテハ警部長ヨリ必要ナル書目ヲ指定スルコトアルヘシ

第九條 警部長ハ毎年三月法律規則中ヨリ試験問題數題ヲ發シ期日ヲ定メ警察署長分署長ヲシテ試験ヲ執行セシムヘシ但武術操練ノ試験ハ毎年巡閱ノ際ニ於テスルモノトス

第十條 試験問題ハ署長ニ於テ封ノ儘保管シ當日試験場ニ於テ開封スヘシ
答案時間ハ一時三十分トス

第十一條 警察署長分署長ニ於テ試験ヲ執行シタルトキハ成績書類ニ別紙甲號式ノ考查表ヲ附シ試験執行ノ顛末ヲ警部長ニ報告スヘシ

第十二條 試験點數ハ法律規則壹題各二十點武術操練一技各十點トス
前項各科總點數ノ半數以上ヲ得タル者ヲ及第トシ十分ノ八以上ヲ得ルタモノヲ優トス

第十三條 警部長ハ警察本部警部一名ヲ委員長ト爲シ警部警部補ノ内二名ヲ委員等ト爲シ試験成績ヲ審査評定セシムヘシ

第十四條 武術操練ノ成績ハ警部長之ヲ査定シテ審査委員ニ下附スヘシ但武術ハ各署教導ヲシテ參考點ヲ採ラシルモノトス

第十五條 委員審査終レハ別紙乙號式ノ成績表ヲ製シ考查表ヲ添ヘ委員長意見ヲ付シ警部長ニ報告スヘシ

第十六條 試験優等ノ成績ヲ得タル者ハ警部長指名シテ特別試験ヲ行フコトアルヘシ但特別試験ニ在リテハ武術操練ノ二料ヲ除クモノトス

第十七條 優等者ニハ特ニ賞狀ヲ下附スルモノトス

第十八條 試験當日事故アリテ應スルコト能ハサル者ニハ事故終了ノ後受験セシムヘシ但問題ハ新ニ之ヲ授ルモノトス

(甲號式)

考查表

何警察署又ハ何分署詰

(監督内勤) 駐在豫備

巡查 何 某

拜命年月日

明治何年何月何日

現俸

何圓

年 齡

何年何ヶ月

賞

何年何月何日何々犯探偵逮捕ノ功ニヨリ賞金何程
(本欄ハ本人拜命後職務上ニ關ル一切ノ賞與事項ヲ記入スルモノトス)

性 質

居常寡言沈恒ニシテ事ニ臨テ勇氣アリ且職務上ノ事項ニシテ已レ主ト爲テ辨論ヲ要スルモノ、如キハ事理寸毫モ疑ナキニ至ルマテ極論スルハ毎回講習中ニ實見スル處ニシテ本人ノ特性ナリトス云々等

罰

何年何月何日何々ニヨリ罰金何拾錢
(本欄ハ本人拜命後ニ關ル一切ノ懲罰事項ヲ記入スルモノトス)

職 務

從來監督勤務中能ク其任ヲ盡シ今又内勤ニ從事シ處務敏達殊ニ司法警察事務ハ本人ノ長所タリ追々熟達ノ見込アリ

進

何年何月何日巡查拜命月俸何圓何年何月何日何圓ニ昇給何年何月何日巡查監督申付ラル何年何月何日監督免セラル
(本欄ハ本人拜命後進退ニ關ル一切ノ事項ヲ記入スルモノトス)

素 行

曾テ汚名不品行ノ跡ナシ云々又ハ少ク飲酒チナスモ能ク自ラ守リ同僚チ會合スル等ノコトナシ云々等

(乙號式)

明治何年巡查講習試験成績表

何警察署又ハ分署

刑 法	何 々	集 會	何 々	擊 劍	柔 術	水 練	捕 緝	操 練		合 決	巡 査 氏 名
								操 練 法	敬 禮 法		
一八	一五	一六	一八	四			八	一〇	一〇	九九優等	何 某
一七	一五	一五	一〇	〇			八	一〇	一〇	八九三及第	何 某
一五	一四	一〇	一一	五			一〇	五	五	五七五全	何 某
一〇	一〇	一五	一五	五			五	一〇	五	五七〇全	何 某
〇	一〇	一五	〇	一〇			五	五	五	五五五落第	何 某

○本部警訓第三三號 二十三年七月二十三日(警部長ヨリ)
巡査訓授規程第十一條監督ガ巡査訓授場ニ引キテ署長ノ來場ヲ待ツヘキ規定ノ主旨
タル監督ヲシテ訓授中其場ニ在ラシメ各巡査ガ謹肅ニ署長ノ訓授ヲ聽クヤ否不適當
ノ應答又ハ偽リノ申告ヲ爲スモノナキヤ否等ヲ監視シ而シテ當日訓授セラレタル事
項ハ各巡査ガ果シテ之ヲ遵行スルヤ否ヲ督察スルノ要アツテ存スル義ニ付監督警部
警部補巡査部長ハ(緊急職務ノ場合ヲ除ク)必ラス訓授場ニ在リテ訓授ヲ聽キ兼テ巡
査ヲ監視スヘシ

○第十五章 召集及操練

○本部警訓第三三號 二十二年五月六日(警部長ヨリ)
非常事變其他警察上急速ヲ要スル場合ニ於テ署員參集ノ時間ヲ豫知スルハ召集上緊
要ノ事ニ係條左ノ事項取調置カレヘシ

- 一 署員宿所ヨリ所屬署マテ距離
- 一 署員宿所ヨリ所屬署マテ參集スル時間

○本縣訓令第二百九十四號 二十二年十二月十九日(警察署)
警察官吏召集規則左ノ通り之ヲ定ム

警察官吏召集規則

- 第一條 此規則ハ非常事變其他急速ヲ要スル場合ニ於テ警察官吏ヲ召集スルノ手續
ヲ示スモノナリ但演習ノ爲メ臨時召集ヲ爲スコトヲ得
- 第二條 召集ヲ分チテ大召集小召集ノ二種トス大召集ハ警部長ニ於テ管内ノ警察官
吏小召集ハ警察署長又ハ分署長ニ於テ所屬ノ警察官吏ヲ召集スルモノヲ云フ
- 第三條 召集ハ必要ノ人員ヲ度トシ全部又ハ幾部ヲ召集スルモノトス

- 第四條 警察署分署交番所ハ非常ノ場合ト雖モ閉鎖スルヲ得ス
- 第五條 召集票ヲ受ケタルトキハ直ニ正裝晝夜兼行シテ指定ノ場所ニ參集スヘシ
- 第六條 警察署分署ニ於テ大召集票ヲ受ケタルトキハ直ニ便宜ノ場所ニ召集ヲ行ヒ
上班ノ者之ヲ引卒シテ指定ノ場所ニ參集スヘシ但路程ノ便ニ依リ直ニ指定ノ場所
ニ參集スヘキ旨ヲ召集票ニ附記スルコトヲ得
- 第七條 召集票ハ發程ノ際携帶シテ參集シタル場所ノ上官ニ納ムヘシ但召集票ヲ落
手シタル上官ハ其裏面ニ參集時間ヲ記入スヘシ
- 第八條 召集票ヲ受ケタルモノ疾病其他正當事故ノ爲メ參集スルコト能ハサルトキ
ハ急飛ヲ以テ直ニ召集票ヲ發シタル上官ニ届出ツヘシ
- 第九條 召集票ハ豫テ警察本部警察署分署ニ於テ調製シ召集ノ用ニ備フヘシ
- 第十條 召集票ハ召集ヲ要スル場合ニ於テ指定ノ場所ヲ記入シ便宜ノ方法ヲ以テ迅
速送達シ且ツ受取書ニハ到達シタル日時ノ記入ヲ要ス但電信アル地ニ於テハ電報
ヲ以テ召集スルコトヲ得
- 第十一條 召集票ハ左ノ雛形ニ據ルヘシ但警衙所在地ノ警察官吏ニ發スル召集票ハ
木札ニ換用スルコトヲ得

召集票雛形 豎五寸 用紙厚紙

面表 寸二巾

何	何官署又ハ何地ハ
召	警部巡査何十名又 官 署 名
集	ハ總員ヲ召集ス

警部長ヨリ各署ニ警察署長ヨリ分署ニ付テ發スル記載例トス

印

裏面

何警察署(何分署)

警部長ヨリ各署ニ警察署長ヨリ分署ニ向テ發スル署名ノ記載例トス

寸法用紙同上

表面

何官署又ハ何

官署名

警部長署長ヨリ所屬官吏各自ニ向テ發スル記載例トス

裏面

地へ召集ス

印

裁例トス

大召集ノトキハ警察署分署ニ於テモ表面ニ大召集ト書スヘシ

裏面 何年何月何日 前何時發

何年何月何日 后何時着

住所 官氏名

參着時間ハ第七條但書ニ依リ記入スヘキ記載例トス

第十二條 警察署分署ニ於テ演習ノ爲メ召集ヲ爲シタルトキハ必ス點檢訓抄等ヲ行ヒ空シク歸任セシメザル様注意スヘシ

第十三條 警察署分署ニ於テ召集ヲ行フトキハ召集簿ヲ製シ左ノ事項ヲ記載シ置クヘシ

一 召集ノ顛末

二 參着ノ日時

但先着者ヨリ順次記載スヘキモノトス

三 不參又ハ遲參ノ事由
四 前項記載外ノ要件

第十四條 警察署分署ニ於テ召集ヲ行フタルトキハ第十三條召集簿原本ヲ添ヘ警部長ニ申報スヘシ

○ 本縣訓令第五百五十八號 明治二十三年五月十三日
巡查操練法總則

第一 此操練法ハ巡查各個ノ教練及ヒ分隊半小隊ノ教練ヲ以テ目的トスルモノニシテ實ニ巡查ニ授クル操練教訓ノ一基礎ナリ故ニ此操練法ハ精密ニ意ヲ用ヒテ教授スルヲ要ス

第二 教師各運動ヲ説明スルニハ簡易ニシテ明瞭ナル言語ヲ用ヒ諸運動ハ皆親ヲ行フテ摸範ト説明トヲ併セ授ケ巡查ヲ示サレタル姿勢ヲ自ラ執リ得ルニ慣習セシノ愚鈍ニシテ止ムヲ得サル者ニ非サルヨリハ決シテ手ヲ下シテ其姿勢ヲ修正スルコト勿レ又教師ハ始終其音聲ヲ活潑ニシテ巡查ノ注意ヲ醒覺シ同シ運動ヲ長ク行ハシムルコトナク且巡查ヲシテ齊整確實ニ運動セシメント欲スルハ宜ク漸ク以テスヘシト雖モ巡查ノ誤リハ些少ト雖モ決シテ之レヲ等閑ニ附スカラス又教師ハ常ニ儆正ノ威容ヲ執ルヲ要ス

第三 號令ニ二種アリ一ヲ豫令ト云ヒ一ヲ勅令ト云フ

豫令(本文草書ニテ記スルモノ)ハ音聲ヲ高クシテ明瞭ニ發唱シ且最後ノ一音ヲ少シク長クスヘシ

勅令(本文楷書ヲ以テ記スルモノ)ハ短而快活ニ發唱スヘシ又教官ハ豫令ト勅令トノ間ニ適宜ノ時間ヲ存ス可シ
豫令ト勅令トノ間ニ適宜ノ時間ヲ存ス可シ

第四 總テ巡查操練法中ノ諸規則及ヒ諸注意ハ教師之レヲ了得シ密ニ其主意ヲ体認シ巡查ヲシテ其意義ヲ會得セシムルヲ勉ム可シ第一章以下特ニ其ノ△ノ符ヲ記シタル文ハ教師字々之レヲ熟識シテ教授スルヲ肝要トス

但シ本交中傍訓ヲ附セシ文ハ教師常ニ之ニ從テ説明ヲ下ス可キモノトス
巡查操練法ノ區分

第五 此操練法ハ分テ二章トナス又各章ヲ分テ若干數トナス
第一章ニハ巡查ノ各個教練ヲ載セ其第二章ニハ密集分隊及ヒ半小隊ヲ以テスル巡查ノ教練ヲ載ス

第一章 各個教練

總 則

第六 第一章ヲ教ユルニハ同時ニ教授スヘキ巡查ノ數成ルヘク寡少ナルヲ可トス
諸巡查ハ身幹ノ長短ニ從テ一列ニ並ヒ且其右臂ハ右隣者手頭ヲ張リ瓜及ヒ掌ヲ後ロニ向ケテ左拳ヲ腰ノ上ナル臍骨ニ當テタル時此隣者ノ左肘ニ觸ル、如ク位置ス此ノ如クスレハ每巡查互ニ十五珊知米突ノ間隔ヲ存スルヲ得各巡查ニハ常ニ右ヨリ左ニ番號ヲ附ス背面向ヲ爲シタルハ列ハ其前後ヲ變換スルモ巡查ノ番號ハ正面向ノ時ニ同シ故ニ此時ノ列ハ一時左ヨリ右ニ至ルノ番號ヲ有ツ可シ
各號令以テ行フ動作ハ皆一節ヲ以テ行フ然レモ巡查ヲシテ明カニ其作法ヲ會得セシムル爲メ之ヲ分テ數舉動ト爲ス

最初ノ演習ニ在テハ號令ノ一音ニテ活潑ニ各節ノ第一舉動ヲ行ヒ次ニ二三等ノ號令ニテ其余ノ舉動ヲ行フ

總テ演習ヲ始メシムルニハ教師左ノ號令ヲ下ス

△此號令ニテ巡查ハ其意ヲトメ不動ノ姿勢ヲ執ル

氣ヲ付ケ

第一教

○不動ノ姿勢

第七 △兩踵ヲ線上ニ揃ヘ且其人ノ骨組ニ應シテ成ヘク之レヲ着ケ兩足ハ矩形ヨリモ少シク狭ク開キテ同様ニ外側ニ向ケ兩膝ハ擬テザル様ニ之ヲ伸ハシ身体ハ正シク腰ノ上ニ落テ附ケテ且少シク前ニ傾ケ兩肩ハ故テニ張ルコトナク唯一線ニ之レヲ下ケ兩臂ハ自然ニ垂レ掌ハ少シク外側ニ向ケ指ハ伸シテ之ヲ並ヘ小指ハ袴ノ縫目ノ後ロニ當テ頭ハ高ク正ク且自然ニ之ヲ保テ兩眼ハ正シク前面ヲ見ル可シ

第八

△巡查ヲ休憩セシムルニハ教師左ノ號令ヲ下ス

休メ

第九 此號令ニテ巡查ハ姿勢ト動カサル事トニ意ヲトムルコトナク片足ヲ舊位ニ置キ其場ニ立テテ休息ス

○頭首左右ノ運動

第十 △教師左ノ號令ヲ下ス

頭首

右(左)

直レ

第十一 右左ノ號令ニテ巡查ハ烈シク運動スルコトナク又肩ノ位置ヲ崩スコトナク頭ヲ右(左)ヘ少シク回ハシ同列中已レノ右(左)ニ在ルニ番目ノ巡查ハ眼ノ線ト僅カニ其胸ヲ見ルニ至リテ止ム
直レノ號令ニテ巡查ハ頭ヲ正面ニ復ス

第二教

○右向右向

第十二 教師左ノ號令ヲ下ス

右(左)向ケ

右(左)

第十三 右(左)ノ號令ニテ左リ足尖ト右足トヲ少シク上ケ左リノ踵トニテ踵ノ四分一丈ケ右(左)ニ向キ廻リ右踵ヲ左踵ノ脇ニ着ケテ同シ體ニ揃フ

○半ハ右向ケ
○半ハ左向ケ

第十四 △教師左ノ號令ヲ下ス

半ハ右(左)向ケ

右(左)

第十五 此運動ハ右(左)向ノ運動ノ如ク行フ但シ巡查ハ環ノ四分一ノ半ハ右(左)ニ向キ廻ル

○右轉回

第十六 △教師左ノ號令ヲ下ス

廻われ

右

第一節三舉動

第一舉動

第十七 右號令ニテ左リ踵ニテ半ハ右向ヲナシ同時ニ右足ヲ矩形ニ開キ左リ足ヨリ十五珊知米突離レタル所ニ置キ其中央ヲ左リ踵ニ對セシム

第二舉動

第十八 二ノ號令ニテ兩足尖キヲ少シク上ケ踵ヲ伸シ兩踵ニテ後ロニ向キ廻ハル

第三舉動

第十九 三ノ號令ニテ速ニ右踵ヲ左リ踵ニ引キ着ケ

第三教

○諸歩度ノ要領

早足

第二十 早足ニ於テ一步ノ長サハ踵ヨリ踵マテヲ七十珊知米突トシ其早キハ一分時間ニ百二十歩トス

第二十一 △教師ハ巡查ノ前方十歩或ハ十二歩ノ所ニ立チテ之ニ面シ次ニ示ス如ク舉リテ分解シテ歩ノ作法ヲ説キ示シ且同時ニ觀ラ之レヲ行フテ説明ト模範トヲ併セ授ク然ル後左ノ號令ヲ下ス

前ハ

進メ

第二十二 △前ヘノ號令ニテ巡查ハ体前ニ傾ケ其重ミヲ右足ノ上ニ移ス

第二十三 進メノ號令ニテ巡查ハ左リ脚ノ踵ヲ伸ハシ地面ヨリ高ク上ルコトナク足尖ヲ少シク外側ニ向ケテ之レヲ右キ足ヨリ七十珊知米突ノ所ニ出シ右踵ヲ充分ニ上ケテ全ク体ノ重ミヲ踏ミ着ケタル足ノ上ニ移ス

第二十四 二ノ號令ニテ巡查ハ右キ脚ヲ前ニ出ス但シ左リ脚ニ就テ説キ示セシト同法ヲ用ヒテ同シ距離ノ所ニ置キ而シテ教師ノ下ス一二ノ號令ニ從ヒ兩足ヲ踏ミ違ヘルコトナク又兩肩ヲ廻スコトナク兩臂ヲ自然ニ振り動カシ頭ヲノ位置ハ常ニ正シクシ續キテ行進ス

第二十五 △行進ヲ止ムルニハ教師差ノ號令ヲ下ス

分隊

止ル

第二十六 止ルノ號令ハ右キ(左)足ニ就テ下スモノニシテ巡查ハ上ケタル足ヲ七十

珊瑚知米突前ノ所ニ踏ミ着ケ後トナル足ヲ前ナル足ニ引キ着ケテ止マル

第二十七 教師ハ先ツ初メニ巡查ヲシテ定規ノ歩ノ長サニ慣習セシムルヲ勉メ而シテ巡查全ク此方法ニ慣習シタルトキハ漸ク歩度ヲ早クシ遂ヒニ一分時間三百二十歩ノ調子ニ至ラシムヘシ

第二十八 △歩ノ作法ヲシテ規則正シク且確實ナラシムル爲メ教師左ノ條件ニ注意スヘシ

△其一 身体ノ重ミヲ正シク前ナル足ニ移ス事

△其二 身体ノ重ミヲ容易ク前足ニ移シ得ル爲メ直子ニ後トナル足ノ踵ヲ上ケシムル事

△其三 頭ハ常ニ高ク保チ体ハ決シテ左右ニ傾ケサル事

第二十九 △巡查定規ノ歩ノ高サト早サトニ熟練セシトキハ教師ハ歩ヲ分解シテ教フルナク唯一二ノ號令ヲ下シテ調子ヲ附シ以テ行進スルヲ演習セシムヘシ但シ一ノ號令ハ左リ足ノ地ニ着クトキ之ヲ下ス二ノ號令ハ右足ノ地ニ着クトキ下スヘキモノトス

第三十 △此時教師列ヲ止ムルニハ第二十五ニ記載セル號令ヲ用ユヘシ

止ルノ號令ハ右左リノ足何レニテモ地ニ着ク時下スモノニシテ巡查ハ上(第二十 六) 説キ示シタル如ク止マル

○退歩

第三十一 △巡查止立セル時教師左ノ號令ヲ下ス

後トヘ

第三十二 進メノ號令ニテ巡查ハ速カニ左リ足ヲ後トニ引キテ前足ノ踵ヨリ後足進

ノ踵マテ三十五珊瑚知米突離レタル所ニ置キ次ニ右キ足ニ就テモ同シ事ヲ爲シ左ノ號令ヲ下ス遂續キテ退却ス

分隊

止ル

止ルノ號令ニテ巡查ハ前ナル足ヲ後トナル足ノ後ロニ踏ミ着ケ又前ナル足ヲ後トナル足ニ引キ着ケテ止マル

第三十三 △教師ハ巡查ノ踵ヲ伸シテ眞直ニ後方ニ行進スルト姿勢ヲ崩サ、ルニ注意スヘシ退歩ノ調子ハ早歩ノ調子ニ異ナルコトナシ

○駈足

第二十四 駈足ニ於テ一步ノ長ハ七十五珊瑚知米突トシ其早サハ一分時二百八十歩トス

第三十五 △教師左ノ號令ヲ下ス

進メ

進メ

第三十六 駈足ノ號令ニテ巡查ハ兩手ヲ腰ノ上ニ上ケ指ヲ閉チ爪ヲ内ニ向ケ肘ヲ後ロニシ體ヲ前ニ傾ケテ其重ミヲ右足ノ上ニ移ス

第三十七 進メノ號令ニテ巡查ハ左脚ヲ前ニ出ス此時脚ヲ少シ屈メテ膝ヲ僅カニ上ケ足尖キヨリ下ロシテ右足ヨリモ十五珊瑚知米突ノ所ニ踏ミ着ケ次ニ右足ニテモ左リ足ニ就テ説キ示セシト同シ事ヲナシ常ニ体ノ重ミヲ踏ミ着ケタル足ニ移シ兩肘ヲ自然ニ振り動カシ斯ノ如ク續キテ行進ス

第三十八 △教師歩ノ調子ヲ示スニハ第二十九ノ規則ニ從フ可シ

第三十九 △行進ヲ止ルニハ第三十二記載セル號令ト方法ヲ用ヒ巡查停止スレハ直

ニ両手ヲ下サシム可シ

第四十 △駢歩ハ諸種ノ早サヲ以テ之レヲ行フヲ得火急ノ場合ニ在テハ一分時間ニ百九十歩ノ調子ニ至ルコトアリ

第四十一 △教師ハ巡查ニ諭シ駢歩中成ル可ク口ヲ閉テ鼻ニテ呼吸セシムヘシ實驗ニ依ルニ此法ヲ用フルルハ疲勞少シクシテ長ク駢歩ヲ行フヲ得

○途歩○變歩

第四十二 △途歩ニハ調子ヲ附スルコトナク又其早サ及ヒ長サハ一定スルコトナシ練習セル伍隊一十米突ニ通過スルニハ通常十二分時ヲ以テスト雖極メテ熟練セル伍隊ニ在テハ一分時ヲ以テ之ヲ通過ス

巡查授業生教練ニ在テハ途歩演習ヲ行フコトナシ

第四十三 △變歩ニハ調子ヲ附スル法トス此歩法早歩ト同要領ヲ以テ行フト雖其通常ノ早サハ一分時間ニ百四十歩トス然レモ此歩ハ之ヲ用フルノ場合ニ應シ巡查シテ其能シ得ル丈ケノ早サヲ以テ行進セシムルヲ要スルコト屢々之アリ

○足踏

第四十四 △巡查行進シ在ルル教師左ノ號令ヲ下ス

足踏

進メ

第四十五 進メノ號令ハ右左リノ足何レニテモ地ニ着ケ下スモノニシテ巡查ハ進ムコトナク唯交ル々兩足ヲ踏著ケテ調子ヲ取ル

第四十六 △巡查ヲシテ再ヒ行進セシムルニハ教師左ノ號令ヲ下ス

前へ

進メ

第四十七 進メノ號令ハ上ニ進ヘタル如ク下スモノニシテ巡查ハ之レニ從ヒ以前ノ行進ニ復ス

○踏替

第四十八 △巡查行進セル時教師左ノ號令ヲ下ス

踏替

進メ

第四十九 進メノ號令ハ右左リノ足何レニテモ地ニ着ケ下スモノニシテ巡查ハ之レニ從ヒ上ケタル足ヲ前ニ踏ミ着ケ後ノナル足ヲ踏ミ着ケタル足ノ後トニ引キ着ケ次ニ此踏ミ着ケタル足ヨリ行進ス

○行進間ノ右轉回

第五十 △巡查ヲ停止セシムルコトナク背面ニ向ケテ行進セシムルニハ教師左ノ號令ヲ下ス

回れ右前へ

進メ

第五十一 進メノ號令ハ右足ノ地ニ着クトキ下スモノニシテ巡查ハ左リ足ヲ前ニ踏ミ着ケ此足ニテ後口ニ向キ回リ右足ヲ左足ノ傍ラニ引キ着ケ其後新タニ左リ足ヨリ踏ミ出ス

第五十二 巡查駢足ニ在ルトキハ新方向ニ踏ミ出ス前ニ其場ニ於テ駢足ノ調子ヲ以テ四小歩ヲ行ヒ以テ背面ニ向キ回ハリ左足ヨリ踏ミ出スヘシ

第五十三 △巡查早足或ハ駢足ニテ進行セルトキ之レヲ背面向ニ停止セシムルニハ教師左ノ號令ヲ下ス

廻れ右へ

止ル

第五十四 止ル。號令ハ右キ足ノ地ニ着ク時下スモノニシテ巡查ハ之ニ從ヒ左リ足ヲ前ニ踏ミ着ケ此足ニテ後ロニ向キ回ハリ右キ足ヲ左リ足ニ引キ着ケテ止マル

注意

第五十五 △上ニ記載スル最初ノ諸演習ニ於テハ教師強テ巡查ノ整頓スルヲ望ム可カラス巡查諸種ノ歩度ノ長サト早サトニ熟練スルトキハ自ラ整頓スルノ方法ヲ會得スルモノナリ

第五十六 早足ハ隊伍常用ノ歩法ナリ故ニ號令中早足ヲ唱フルハ他ノ歩法ヲ用ヒル隊伍ヲシテ早足ニ復サシムルトキニ限ル

第二章 分隊及ヒ半小隊ノ教練

總則

第五十七 △第二章ノ諸運動ヲ行フニハ巡查八名乃至十二名ヲ以テ分隊ヲ編成ス最初ニハ一教二教三教ハ先ツ一列ニテ之レヲ行ヒ後ニ二列ニテ之レヲ行フ分隊及ヒ半小隊ノ教練ニハ總テ一名ノ嚮導ヲ置ク但番號ハ右ヨリ左リニ附ス教師ハ常ニ嚮導ニ方向点ヲ指示ス嚮導ハ此点ニ準シ中間諸点ヲ取り以テ其行進方向ヲ正フスヘレ

嚮導一翼ニ移ルニハ常ニ分隊或ハ半小隊ノ正面前ヲ常ニ驅足ニテ通過スヘシ靜肅ト沈着トハ隊伍ノ順序ヲ維持スルノ第一緊要事ナルヲ以テ教師ハ常ニ其教授スル隊ヲシテ之レニ慣習セシムルヲ求メ且レ其模範トナルヘシ

第一教

整頓ノ要領

第五十八 分隊長ハ巡查ニ整頓ノ要領ヲ了解セシムル爲メニ各個整頓ノ法ヲ教ユ

之レカ爲メ先ツ左ノ號令ヲ下シテ嚮導ト右(左)ノ二巡查トナシ三歩前セシム

右(左)二人三歩前へ

第五十九 嚮導及ヒ呼ヘレタル二名ノ巡查三歩進ンテ止マリ拳ヲ腰ノ上ナル臍骨ニ當ツ分隊長ハ此三人ノ傍ラニ致リ之レニ並ヒテ其右(左)ニ立チ整頓ヲ正ス其後左ノ號令ヲ以テ順々ニ各順々ニ各巡查ヲ呼ビ出シ最初ノ二巡查ヲ以テ作りタル整頓ニ就カシム

三番(四番五番)等

線へ

第六十 線へノ號令ニテ呼ハレタル巡查ハ三歩前進ス但シ最後ノ一步ハ少シク縮メ整頓線ノ後ロ大約二十珊知米突ノ所ニ於テ正ク止リ決シテ此線ヲ踏ミ越スヘカラス此ニ於テ眼ト頭ト右(左)ニ廻ハシ左リ拳ヲ上ニ説キ示セル如ク腰ノ上ナル臍骨ニ當テ次ニ胸ヲ伸シ小歩ヲ踏ミテ靜カニ整スヘキ方ノ隣者ノ傍ラニ就ク但シ此時頭ノ位置ヲ崩スナク眼ト肩トノ線ヲ隣者ト同シ線ニ畫キ其肘ハ僅カニ此隣者ノ肘ニ觸ル、如ク整頓線ニ就クヘシ

第六十一 △分隊長ハ列ノ前方十歩或ハ十二歩ノ所ニ立チテ之レニ面シ巡查上ノ要領ヲ正シク行フヤ否ヤヲ監視ス又一名毎ニ整頓軸ノ方ニ到リ已レノ肩ヲ巡查ノ肩ノ延線内ニ置キテ整頓ヲ正シ而シテ巡查全ク整頓線ニ就キ了レハ左ノ號令ヲ下ス直レ

第六十二 此號令ニテ巡查ハ左手ヲ列中ニ下シ頭ヲ正面ニ復ス此規則ハ直レノ號令アレハ常ニ行フヘキモノトス

第六十三 △分隊長又ハ嚮導ヲシテ各巡查ノ整頓ヲ正サシムルコトアリ

第六十四 △巡查上ノ法ニヨリ一名毎ニ正シク且確ニ整頓ヲ行ヒ得ルニ至レハ分隊長ハ左ノ號令ヲ以テ同時ニ全分隊ヲ整頓セシム

右(左)へ
準へ

第六十五 此号令ニテ嚮導及ヒ整頓軸タル最初ノ二巡查ヲ除キ他ノ巡查ハ殘ラス同時ニ新整頓線ニ就ク上ニ示セル如ク(第五十九)位置ス

第六十六 分隊長ハ上ニ説キ示セル如ク(第六十)各巡查整頓ノ要領ヲ守ルヤ否ヤヲ監視シ次ニ整頓軸ノ方ニ至リ整頓ヲ正ス

第六十七 整頓正シカラサル巡查アレハ整頓軸ノ方ヨリ順次ニ此巡查ノ番号ヲ呼ビ後トヘ或ハ前ヘノ号令ヲ下ス呼レタル巡查ハ僅カニ頭ヲ整頓軸ノ方ニ廻シテ其度ヲ見計ヒ靜カニ其線ニ就ク

第六十八 列ノ整頓終リタル片ハ分隊長左ノ号令ヲ下ス

直レ

第六十九 後口ノ方ハ整頓スルモ又同シ法ヲ以テ行フ但シ巡查ハ整頓線ヲ後口へ踏越エテ止マル然ル後小歩ニテ前へ進ミ整頓線ニ就クコト(第五十九)ニ説キ示セル如ク

第七十 △分隊長ハ先ツ左ノ號令ヲ以テ嚮導及ヒ右(左)ノ二巡查ヲ四步後方ニ退カシム

右(左)二人四步後トへ

進メ

△次ニ左ノ号令ヲ下ス

後口右(左)へ

準へ

注意

△分隊長ハ巡查ヲシテ嚴ニ上ノ諸要領ヲ實行セシムルニ注意シ且左ノ諸規則ヲ遵守セシムヘシ

△巡查体ヲ後ロニ傾ケス又ハ頭ヲ前ニ傾ケサル事

△巡查ノ頭ヲ廻ハスハ成ルヘク總カニシテ(第十一)ニ示スカ如クスヘキ事

△何番前へ或ハ後トノ号令アルトキ呼ハレザル巡查ハ決シテ動ク可カラサル事直レノ号令アレハ列中ニ於テ復タ動ク可カラサル事

第七十二 △分隊二列ニアルトキハ嚮導及右(左)ノ二伍ヲ以テ整頓軸ヲ作ル分隊長ハ此時号令ヲ下スニ二人ト呼ハスシテ二伍ト呼フヘシ又分隊長ハ後列巡查ノ正シク其距離ヲ取り且正シク前列ノ各巡查ニ重ナルヤ否ヤニ注意スヘシ

第二教

○前面及ヒ背面ニ於ケル正面行進

第七十三 △分隊正シク整頓シ在ル片分隊長ハ嚮導ヲ右或ハ左ニ置キ高聲ニテ方向ヲ示シタル後左ノ号令ヲ下ス

前へ

嚮導右(左)

進メ

第七十四 進メノ号令ニテ分隊ハ活潑ニ在リ足ヨリ行進ヲ起シ最初ノ一步ハ少シク調子ヲ高クス嚮導ハ注意シテ示サレタル点ニ向テ進ミ常ニ肩ノ位置ヲ正シクス嚮導ノ傍ラニ在ル巡查ハ殊ニ嚮導ヨリ出過キサルニ注意スヘシ

第七十五 △分隊ハ上下同法ヲ以テ背面行進ヲ行ヒ之カ爲メニハ分隊長先ツ背面ヲ

爲シメ分隊二列ニ在ルトキハ背面向テナシタル後嚮導ハ新前列ニ就クヘシ

注意

第七十六 △分隊長ハ次ノ諸規則ヲ嚴重ニ遵守セシムルニ注意ス可シ

△巡查ハ常ニ嚮導ノ方ニ在ル隣者トノ間隔ヲ失ハザルニ注意スヘキ事

△嚮導ノ方ヨリ押シ來ルキハ之レニ從ヒ反對ノ方ヨリ押シ來ルキハ之ニ抵抗スヘキ事

△巡查間隔ヲ失フタルトキハ徐々ニ之レヲ復スヘキ事

△嚮導ハ何レノ方ニ在ルモ巡查ノ常ニ頭ヲ正シク且高ク保ツヘキ事

△巡查整頓線ヨリ進ミ過ルカ或ハ之ヨリ後レタルトキハ成ルヘク體カニ步度ヲ加減シテ徐々ニ整頓線ニ就クヘキ事

○斜行進

第七十七 巡查直行進ニ熟練シタルハ斜行進ヲ演習セシム之カ爲メ分隊行進セルハ分隊長左ノ号令ヲ下ス

斜めに右(左)へ

進メ

第七十八 進メノ號令ハ右(左)足ノ地ニ着ク片下スモノニシテ巡查ハ(右)足ヲ定メテ距離ニ踏ミ着ケテ半ハ右(左)ニ向キ右(左)足ヨリ新方向ニ出シ此方向ニ向テ眞直ニ行進シ時々眼ヲ右(左)ノ隣者ニ注キテ其步ヲ如減ニ其肩ハ此隣者ノ肩ニ同シ様ニ並ヘ又同列中他ノ巡查ノ頭ハ此隣者ノ頭ニテ見ヘサル如ク行進スヘシ此時諸巡查ハ步度ヲ同クシ又斜メニ行進スル度ヲ同フスルニ注意スヘシ

前へ

進メ

嚮導右(左)

第八十 進メノ號令ハ左(右)足ノ地ニ着ク時下スモノニシテ巡查ハ右(左)足ヲ定メノ距離ニ出シテ休ヲ半ハ左(右)ニ向ケ次ニ各巡查左(右)足ヨリ直行進ノ規則ニ從テ眞直クニ行進ス

第八十一 斜行進ニ於テハ嚮導ヲ置キ換ユルコトナク各巡查ハ常ニ斜行スル方ニ整頓シテ直行進ニ復スレハ再ヒ嚮導ノ方ニ整頓スヘシ

第八十二 巡查上ノ諸要領ニ熟練シ身体ノ姿勢歩ノ作法ニ移リ又早歩ヨリ踵足ニ移サシム

第八十三 是レカ爲メ分隊長左ノ號令ヲ下ス

駈歩

進メ

第八十四 進メノ号令ハ右左ノ足何レニテモ地ニ着ク片下スモノニシテ分隊長ハ之レニ從ヒ駈歩ヲ行フ此時各巡查ハ駈歩ノ要領ヲ守リ且常ニ整頓スルコトニ注意スヘシ

早歩

進メ

第八十六 進メノ号令ハ右左ノ足何レニテモ地ニ着ク片下スモノニシテ隊伍ハ之レヒ早歩ニ復ス

第八十七 △分隊ヲ停止スルニハ分隊長ハ前ニ示セル方法ト號令トヲ用フヘシニ從

第八十八 △分隊早歩ニテ行進セルハ分隊長ハ前ニ示セル方法ト號令トヲ用ヒ分隊ヲ時々足ミ踏踏替ヲ行ハシムヘシ

第八十九 △分隊行進セルキ之ヲ止ムルナク背面行進ヲ行ハシムルニハ分隊長左ノ號令ヲ下ス

廻れ右前へ

進メ

嚮導左(右)

第九十 △進メノ號令ニテ巡查ハ前ニ説キ示セル如ク行進間轉回ヲ行フ嚮導モ亦分隊ト同時ニ背面ニ向キ此新方向ニ於テ示サレタル一点ニ向テ行進ス分隊二列ニ在レハ嚮導ハ新前列ニ就ク

第九十一 △分隊駐足ニテ行進スルトキハ各巡查ハ前ニ説キ示セル方法ヲ以テ右轉回ヲ行フ

第九十二 △右轉回ヲナシタル後直チニ分隊ヲ停止スルニハ分隊長前ニ説キ示セル方法ト號令トヲ用ヒ此并嚮導ハ前列ニ就クヘシ

第九十三 △分隊停止シ在ル時分隊長ハ左ノ號令ヲ以テ退歩ヲ行ハシム

後トヘ

嚮導右(左)

進メ

第九十四 進メ號令ニテ巡查前ニ説キ示セル規則ニ從ヒ退歩ヲ行フ

第九十五 △分隊二列ニ在テ行進スルトキハ後列ハ正シク其前列者ノ背後ニ在テ行進シ且常ニ其距離ヲ保存スヘシ

○方向變換

第九十六 △方向變換ハ停止間及ヒ行進間ニ於テ之レヲ行フ

○停止間ノ方向變換

第九十七 △分隊停止シ在ルトキ分隊長左ノ號令ヲ下ス

分隊右(左)へ

進メ

第九十八 進メノ號令ニテ右(左)ノ巡查ハ其儀右(左)向ヲナス其他ノ巡查ハ半ハ右(左)向ヲナシ次ニ近道ヲ探リ駐足ニテ新整頓線ニ就ク此時各巡查ハ逐次ニ新整頓線ニ至レハ前ニ説キ示セル方法ヲ以テ其右(左)隣者ノ方ニ整頓ス嚮導ハ軸ノ方ニ在レハ右(左)向ヲナシタル巡查ノ傍ニ就キ又反對ノ方ニ在レハ最後ノ巡查ト共ニ進ミテ新整頓線ニ就ク

第九十九 △分隊長ハ前列ノ種線上ニ到リテ整頓ヲ正ス然ル後左ノ號令ヲ下ス

直レ

○進行間ノ方向變換

第百 △分隊行進シ在ルトキ嚮導ヲ方向變換ノ反對翼ニ移シテ後チ分隊長左ノ号令ヲ下ス

(右)左ニ方向ヲ換ヘ

進メ

第百一 此號令ハ分隊方向變換スヘキ点ヨリ六方前ノ所ニ來リタル時下スモノトス進メノ號令ハ分隊此点ト齊頭ノ所ニ來リタル時下スモノニ嚮導ハ之レニ從ヒ其經過スヘキ土地ヲ見計ヒ七十珊知米突ノ步度ニテ行進ス但最初ノ一步ヲ踏ミ始ムル時ヨリシテ外側ノ肩ヲ少シク前ニ出シ時々眼ヲ列ノ方ニ注キテ其步法ヲ斟酌スヘシ軸ノ方ニ在ル巡查ハ大約二十珊知米突ノ步ヲ踏ミテ行進翼ノ運動ニ從ヒ施烟点ノ周圍ニ於テ輪形ニ歩ミツ、前進ス其他ノ巡查ハ頭ヲ行進翼ノ方ニ廻ハシ此方ヨリ間隔ヲ取り嚮導ノ運動ニ從ヒ行進ス都テ巡查ハ其位置旋廻軸ニ近キニ從ヒ次

第三其歩ヲ縮ムヘシ

列ノ中央ハ少シク中凹トナルヲ長トス

分隊長ハ各巡查正シク上ノ要領ニ從ヤ否ヤニ注意スヘシ

第二百二 △方向ヲ變換シ終レハ分隊長左ノ號令ヲ下ス

、前へ

進メ

嚮導左(右)

第二百三 此號令ハ方向ヲ變換シ終ルヘキ点ヨリ六歩前ノ所ニ於テ下スモノトス

第二百四 進メノ號令ハ全ク方向ヲ變換シ終リシ時下スモノニシテ軸ニ在ル巡查及ヒ

其他ノ巡查ハ智七十珊知米突ノ歩度ニ復シ頭ヲ具直クニ嚮導ハ示サレタル点ニ向テ行進スヘシ

第二百五 △分隊二列ニアレハ後列者ハ其前列者ノ運動ニ從ヒ又距歩ニテ方向變換ヲ行フ時モ上ノ規則ニ從フヘシ

○右(左)旋回ノ運動

第二百六 △分隊行進シ在ル分隊長方向ヲ變換スヘキ方ニ嚮導ヲ移シテ左ノ號令ヲ下ス

右(左)旋レ

進メ

第二百七 △此號令ハ上ニ觀キ示セル如ク下スモノトス

第二百八 進メノ號令ハ分隊旋回ヲ行フヘキ点ニ來リシ時下スモノニ嚮導ハ之レニ從

ヒ行進中右(左)向ヲナシ歩ノ長サト調子トヲ變スルヲナク新方向ニ面シ續キテ行進ス各巡查ハ嚮導ニ反對スル肩ヲ前ニ出シ近道ヲ經テ距足ニテ新方向ニ踏ミ嚮導

ノ方ナル隣者ノ傍ヲニ出テ早足ニ復ス諸巡查ハ斯ノ如クシテ逐次ニ新線上ニ就クヘシ

第二百九 分隊二列ニ在ル各後列者ハ其ノ運動ニ從フヘシト雖モ之ト同時ニ新線ニ就クヲ求ムル勿レ

○停止或ハ行進間分隊ノ折敷及ヒ伏臥

第二百十 △分隊ヲ折敷セシムルニハ分隊長左ノ號令ヲ下ス

折敷ケ

第二百十一 此號令ニテ各巡查ハ速ニ膝姿抜劍ノ姿勢ヲ取ルヘシ分隊二列ニアルハ

後列者ハ其儘共ニ其姿勢ヲ取ル

第二百十二 分隊ヲ伏臥セシムルニハ分隊長左ノ號令ヲ下ス

伏セ

第二百十三 此號令ニテ各巡查ハ伏姿抜劍ノ姿勢ヲ取ルコトナシ分隊二列ニ在ル時前

列者ハ二三歩前進シ次ニ兩列共ニ伏姿ヲ取ル

分隊長ハ折敷及伏臥ノ運動ヲ行フハ監視ノ爲メ起立ス

第二百十四 △折敷或ハ伏臥シ在ル分隊ヲ起立セシムルニハ分隊長左ノ號令ヲ下ス

立テ

第二百十五 此號令ニテ各巡查ハ立テ後列者ハ前列者ヨリ定メノ距離ヲ取リ嚮導ノ方

ニ整頓ス

○分隊ノ解散及ヒ集合

第二百十六 △分隊ヲ解散スルニハ分隊長左ノ號令ヲ下ス

解レ

進メ

第一百十七 此号令ニテ隊伍ヲ解散ス
第一百十八 △再ヒ分隊ヲ集ムルニハ分隊長左手ヲ高ク上ケテ左ノ號令ヲ下ス

集レ

第一百十九 此號令ニテ各巡查ハ其指示ニ從ヒ速ニ一列或ハ二列ニ集リ番號ノ順序ニ從ヒテ整列シ其中央ハ分隊長ヨリ四步距離如ク位置ス此時各巡查ハ分隊長ニ面シ自ラ右ニ整頓ス又嚮導ハ分隊ノ右ニ就ク次ニ分隊長左ノ號令ヲ下ス

○第三教

側面行進

第一百二十 △分隊一列ニ在テ停止シ正シク整頓シ在ルハ分隊長ハ右側面或ハ左側面行進ヲ爲サシメントスルニハ嚮導ヲ右或ハ左ニ置キ次ニ左ノ號令ヲ下ス

右(左)向け

右(左)

前)

進メ

第一百廿一 右(左)ノ號令ニテ嚮導及ヒ各巡查ハ右(左)向ヲ爲シ次ニ偶數者(奇數者)ハ速ニ奇數者(偶數者)ノ右左ニ出テ之ニ並ヒ二巡查ヲ以テ一伍ヲ作り此時伍ハ常ニ同シニ巡查ヨリ取ル者ニシテ其中一名ハ奇數ノ番號ヲ保テ他ノ一名ハ偶數ノ番號ヲ保ツ例トハ一番ト二番ト三番ト四番ト五番ト六番等ハ常ニ相重複スルガ如シ
第一百廿二 進メノ號令ニテ各巡查ハ活潑ニ左足ヨリ行進ヲ起シ各伍ハ前列ノ方ニ整頓シ且定メノ距離ヲ保ツ嚮導ノ後ロニ在ル巡查ハ正シク其後ニ跟テ行進シ又他ノ巡查ハ列中ニ在テ進ヒニ前後ニ重リ其首ク前ニ在ル巡查ノ頭ヲ以テ其前方各巡

查ノ頭ヲ盡ク掩フ如ク行進ス

第一百廿三 △分隊長ハ通常分隊ノ側面ヨリ五六步ノ所ニ在リテ各伍其距離ヲ保存スルヤ否ヤ又時トシテ重複セル列ノ後方ニ至リテ立止シ之レヲシテ十五步或ハ二十步過キ行カシメ各巡查送ヒニ正シク重複スルヤ否ヤヲ檢視スヘシ

第一百廿四 △巡查二列ニ在リテ側面向キナナスハ前列者ハ上ニ説キ示ス如ク重複ス後列者ハ一步右(左)ニ寄リタル後又同法ヲ以テ重複ス故ニ運動終レハ各伍ハ前列ノ方ニ整頓セル四名ノ巡查ヨリ成ルモノトス

○行進間伍ノ分解及ヒ重複法

第一百廿五 △分隊側面行進ヲ爲シアルトキ分隊長左ノ號令ヲ下ス

伍々解レ

進メ

第一百廿六 進メノ號令ニテ各列中重複シタル巡查ハ其步ヲ縮メテ常ニ並フヘキ兩隣者ノ間ニ入ル次ニ後列者ハ一步右(左)ニ寄リテ其前列者ノ側ラニ就ク

第一百廿七 △伍ヲ重複セシムルニハ分隊長左ノ號令ヲ下ス

伍々併セ

第一百廿八 進メノ號令ニテ各伍ハ上ニ説キ示セル如ク重複ス

分隊ノ停止及ヒ正面

第一百廿九 △分隊長左ノ號令ヲ下ス

分隊

止ル

右(左)へ

正面
第三百二十 止ルノ號令ニテ分隊ハ止マリ各巡查ハ命令距離ヲ失フモ亦動クヘカラス
第三百二十一 正面ノ號令ニテ各巡查ハ示サレタル方ニ向キ其後ロニアル者ハ伍ヲ解
キテ速カニ其列中定メノ位置ニ復リ
△次ニ後列者ハ其距離ヲ閉ツ

直レ
第三百二十二 △巡查此諸運動ヲ行フニ熟練シタルトキハ分隊長左ノ號令ヲ以テ停止
セル後直チニ正面向テ爲スコトヲ習ハシム
左(右)向け

止ル
第三百二十三 止ルノ號令ニテ分隊ハ止マリ次ニ上ニ説キ示セル如ク示サレタル方ニ
正面ヲナス

第三百二十四 巡查二列ニアレハ後列者ハ前列者ノ如ク伍ヲ解キ次ニ其距離ヲ閉ツ
第三百二十五 △分隊長ハ時トノ巡查ヲ一列或ハ二列トナシ伍ヲ重複スルナク側面
行進ヲ行フヲ習ハシム此時下スヘキ號令ハ上ニ示ス如シト雖モ豫メ巡查ニ「其
儘」ト告諭ス又分隊長ハ歩調ト距離トヲ失ハシメザルヲ注意スヘシ
伍々方向變換

第三百二十六 巡查側面行進ニ熟練シタルトキハ分隊長之レヲシテ停止或ハ行進間伍々
方向ヲ變換スルヲ習ハシム之レガ爲左ノ號令ヲ下ス
伍々左(右)へ

第三百二十七 進メノ號令ニテ先頭ノ伍ハ小サキ環形ヲ歩ミツ、左(右)ニ方向ヲ變ヘ

此伍ノ二巡查(四巡查)ハ常ニ前列ノ方ニ整頓ス行進翼ニ在ル巡查ハ續キテ同シ歩
ノ長サト早サトヲ以テ行進シ旋廻軸ニ在ル巡查ハ最初ノ三四步(五六步)ヲ縮メ各
伍ハ其先キナル伍ト同シ所ニ到リテ方向ヲ換ヘ行進中俄カニ止マルコト或ハ突キ
當ルコトナキニ注意スヘシ

第三百二十八 巡查一列ニテ側面行進ヲ行フハ各巡查ハ第一ノ巡查ト同シ所ニ於テ
方向ヲ變換シ常ニ歩ノ長サト調子トヲ變スルヲナキヲ要ス
○行進間ノ右向或ハ左向

第三百二十九 △行進間右向或ハ左向ヲ行ハシムルニハ分隊長左ノ號令ヲ下ス
右(左)向け前へ

進メ
巡查正面行進ニ復シタルトキハ更テ左ノ號令ヲ下ス
嚮導左(右)

第四百十 進メノ號令ハ右(左)足ノ地ニ着クトキ下スモノニシテ巡查ハ左(右)足ヲ
定メノ距離ニ踏ミ着ケテ休テ廻ハシ右(左)足ヨリ新方向ニ踏ミ出シテ歩調ヲ變ス
ルコトナク續キテ行進ス此時各伍ハ速カニ伍ヲ解キ或ハ重複ス

第四百十一 △分隊長行進間右(左)向ヲ行ハシムルノ度數ハ多キニ過キサルヲ要ス
是レ巡查ノ意慮ヲシテ混亂セシメサルガ爲ナリ又正面行進ヨリ側面行進ニ移ルト
キ嚮導ハ行進スヘキ方ニアラサレハ進メノ號令ニテ速カニ此方ニ移ル可シ

第四百十二 △距歩ヲ以テスル側面行進ノ要領ハ早歩行進ニ於ケルト異ナルヲナシ
但分隊長ハ進メノ號令ノ前ニ距足ノ號令ヲ下スヲ要ス
分隊ヲ横隊ニ作ル法

第四百十三 △分隊側面向ニ在テ停止シ或ハ行進セルトキ分隊長左ノ號令ヲ下ス

右(左)へ并び
進メ

第四百四十四 進メノ號令ニテ嚮導ハ續キテ眞直クニ行進スルカ或ハ其儘動クコナク
各巡查ノ右(左)肩ヲ前ニ出シ距足ニテ近道ヲ經テ新線ニ到ル此時伍解キ一名ヅ、
逐次ニ此線ニ到ルニ注意シ新線ニ到レハ嚮導ノ向ナル隣者ノ步度ニ準フカ或ハ隣
者ニ整頓ス

第四百四十五 分隊二列ニ在ルル横隊ヲ作ルニハ後列者ハ其前列者ノ運動ニ從フヘシ
ト雖厄之下同時ニ新線ニ就クヲ求ムル勿レ

第四百四十六 此運動ハ常ニ押伍列ニ反對スル方即チ行進ヲ規定スル嚮導ノ在ル方ニ
行フモノトス

第四百四十七 △分隊一列ニ在ルトキ之ヲ二列ニ作ルニハ分隊長左ノ號令ヲ下ス
二列ニ右へ

右

第四百四十八 右ノ號令ニテ嚮導ハ其儘動クコトナシ其他ノ各巡查ハ悉ク右向ヲナシ
テ重複ス

第四百四十九 進メノ號令ニテ第一伍ノ二巡查ハ左向ヲナシテ左リ拳ヲ腰ノ上ナル體
骨ニ當テ其他ノ各伍ハ行進ヲ起シテ間隔ヲ縮メ然ル後停止シテ左向ヲナシ自ラ右
ニ整頓ス

△次ニ分隊長左ノ號令ヲ下ス

直レ

第四百五十 △二列ニアル分隊チ一列ニ作ルニハ分隊長左ノ號令ヲ下ス

一列ニ右へ

右

第四百五十一 右ノ號令ニテ嚮導及ヒ分隊ハ其儘右向ヲナス

第四百五十二 進メノ號令ニテ嚮導ハ前列ノ延線ニ從テ行進シ第一伍モ又之レニ跟ヒ
テ同時ニ行進ス其他ノ各伍ハ伍ヲ解キ得ル丈ノ距離ヲ得ルニ從テ逐次ニ行進ヲ起
ス而シテ最後ノ一伍行進ヲ赴サントスル時分隊長左ノ號令ヲ下ス

分隊

止ル

左リへ

正面

第四百五十三 正面ノ號令ニテ左向ヲナシテ伍ヲ解キ左ニ整頓ス
△次ニ分隊長左ノ號令ヲ下ス

直レ

第四百五十四 △此運動ハ右方或ハ左方ニ行フヲ得ヘシ分隊長之ヲ左方ニ行ハシメン
ト欲セハ先ツ右轉回ヲ爲サシム此時嚮導ハ新前列ノ右ニ就キ運動終レハ分隊長右
轉回ヲナサシメ嚮導ハ右ニ轉ス

○本部警發第八八號 (二十二年五月十日)

(警務課長ヨリ各署へ)

警察官吏召集規則第十一條召集票雛形中警部長ヨリ所屬官吏各自ニ向テ發スル召集
票裏面ニ何年何月何日 前時發トアルハ應召者ニ於テ其發足年月日時ヲ記入スヘキ筈
ニ有之候処召集票發布ノ年月日時ト誤解ノ向モ有之趣ニ付爲念此段及御通知候條各
官吏へ誤解無之様御通達有之度候也

○第十六章 禮式

○太政官達 第四十六號 十四年五月廿四日 (官省院使 廳府縣)

無等判任官以下席次左ノ通相定候條此旨相達候事

一 無等判任官ト有等判任官トノ席次ハ月俸ノ多寡ニ依リ其月俸同シキ者ハ有等判任官ヲ以テ上席トス

一 無等判任官中ノ席次ハ月俸ノ多寡ニ依リ其月俸同シキ者ハ判任官ノ前後ニ依ル例ニ同シ

一 無等判任官ハ月俸ノ多寡ニ拘ハラス判任官ノ次席トス其同官中ノ席次ハ前項ノ例ニ同シ

一 無等外吏及准等外吏ハ前三項ノ例ニ同シ

一 布告達ニ於テ席次ノ定制アル者ハ前四項ノ例ニアラス

○太政官達 第二十七號 十五年五月廿二日 (官省院廳府縣)

○官達 第二十七號 十五年五月廿二日 (官省院廳府縣)

○本規 甲第二十五號 明治十九年三月十九日 (警部長ヨリ)

○内務省 第十八號 十九年九月廿七日 (廳府縣 東京府)

第一條 警察官吏制裝ヲ爲シタルトキハ以下各條ニ從ヒ禮式ヲ行フヘシ

第二條 凡ソ禮式ヲ行フニハ姿勢ヲ正シ禮式ヲ受クヘキ人ニ注目スヘシ

第三條 禮式ヲ別ツコト左ノ如シ
一 最敬禮 二 敬禮

第四條 最敬禮ハ五步前ニ於テ正面ノ方向ヲ取リテ直立シ兩足ヲ整ヘ兩手ヲ垂下シ

首ヲ禮式ヲ受クヘキ人ニ對シ其人ノ通過シ了ルノ間之ニ注目スヘシ

警部補以上ニアリテハ前項ノ外仍ホ禮式ヲ受クヘキ人ノ正面ニ來リタルトキ右手

ヲ舉テ帽ニ當ツヘシ

第五條 敬禮ハ禮式ヲ受クヘキ人ニ對シ五步前ニ於テ左手ヲ垂下シ右手ヲ舉ケ五指

ヲ整閉シ其第一關節指ヲ帽ノ下端ニ當テ之ニ注目スヘシ

第六條 警部補以上ハ 天皇三皇々太子及皇族ニ對シテ最敬禮ヲ行フヘシ

馬上ニ在ルモノハ正面ノ方向ヲ取馬ヲ駐メ禮式ヲ行フヘシ道路狹隘ニシテ之ヲ爲

シ得ヘカヲサルトキハ帽ヲ縮メテ馬首ヲ舉ケ通過ノ際右手ヲ舉ケ帽ニ當ツヘシ

内閣總理大臣各省大臣正式敕使及東京ニ在テハ警視總監東京府知事其他ノ府縣ニ

テハ所屬知事並ニ上班ノ警察官ニ對シテ敬禮ヲ行フヘシ

第七條 巡查ハ 天皇三后皇太子皇族内閣總理大臣各省大臣正式敕使及東京ニ在テ

ハ警視總監東京府知事其他ノ府縣ニ在テハ所屬ノ知事ニ對シ最敬禮ヲ行ヒ其他上

ナ垂下シ直立スヘシ若シ椅子ニ倚リタルトキハ起立シテ本文ノ禮式ヲ行ヘシ
第十一條 整列シタルトキ又ハ隊伍ヲ爲シテ行進スルトキハ其指揮ヲ掌ル者ノミ相
當ノ禮式ヲ行ヒ其他ノ者ハ禮式ヲ受クヘキ人ニ注目スヘシ
第十二條 同班警察官吏ハ互ニ敬禮ヲ行ヘシ
第十三條 警衛消防囚徒護送其他特別ノ注意ヲ要スヘキ職務ニ從事スルハ禮式ヲ
行フノ限ニアラス

○内務省訓令第十九號 十九年九月廿七日 廳府縣(東京府) (ヲ除ク)
警察官吏禮式心得

警察官吏禮式心得

- 第一 警察官吏タル者ハ其上官ニ對シ從順ナルハ勿論之ニ對シ禮讓ヲ盡サルヘカラス上官タル者亦言語ハ勿論舉動ニ於テモ下班ノ者ヲ凌侮シ又ハ之ヲ押暈スヘカラス
- 第二 一般ノ官吏ニシテ公務ヲ帯ヒ其管内ヲ巡回スル等ノコトアルトキ場合ニヨリ適宜之ニ對シ禮式ヲ行フコトアルヘシ
- 第三 禮式ヲ行フニハ如何ナル場合ト雖モ其禮式ヲ受クヘキ人ヲシテ其禮ヲ轉回スル等ノ勞ナカシメ之ニ對シ常ニ便利ノ道ヲ讓ルハ下班ノ者ノ上官ニ對シ從順ナル義務ナルヲ以テ途上々官ニ出會シタルトキハ其宜シキニ應シ右又ハ左ニ避クヘシ殊ニ狹隘ノ道路及ヒ橋梁廊下格子段等ニ於テハ立止マリ上官ノ通行ヲ待ツヘシ若シ如此場所ニ於テ下班ノ者既ニ進行中ナルトキハ立戻リ上官ヲシテ已レノ通過ヲ待タシメサル様注意スヘシ
- 第四 禮式ヲ行フ際ハ決シテ喫烟又談笑等ヲ爲スヘカラス
- 第五 城門橋梁及ヒ狹隘ノ道路ニ於テ最敬禮ヲ行ハントスルニ方リ通行人ノ妨ケト

ルノ恐アルトキハ敬禮ヲ行ヒ最敬禮ヲ行ニ及ハス其他禮式ヲ受クヘキ人合圖ヲ爲シ又ハ其他ノ舉作ニ由リ最敬禮ヲ停メタルトキモ亦同様タルヘシ
第六 下班ノ者上官ト同行スルトキハ常ニ二三ノ後ニ從フヘシ上官若シ己ニ對シ談話セルトキハ其左側ニ副ヒ上官ト足並ノ違ハサル様注意スヘシ但左側ニ副フトキハ上官ヲシテ不便利ナラシメ又ハ危險ナラシムルノ恐アルトキハ其宜シキニ應シ右側ニ副フヘキモノトス

第七 下班ノ者途上ニ於テ上官ニ出會シ申告ヲ爲サントスルトキハ凡ソ其三步前ニ進ミ直立シテ申告スヘシ上官若シ歩ヲ止スシテ進行スルコトヲ示シタルトキハ下
班ノ者ハ上官ノ左側ニ副ヒ同歩シテ其申告ヲ爲スヘシ但左側ニ副ヒ上官ヲシテ不便利又ハ危險ナラシムルノ恐アルトキハ前項但書ノ例ニ同シ

第八 上官他人ト談話スルトキハ成ルヘク之ヲ妨ケサル様注意シ此際自ラ申告セン
ト欲スルコトアルモ先ツ暫ク差扣ヘ談話ノ終ルヲ待テ申告スヘシ

第九 上官ト同歩スル際家屋若クハ室内ニ入ラントスルトキハ下班ノ者其戸ヲ開キ先ツ上官ヲシテ入ラシムルハ勿論ナリトス

第十 警部補以上ニ在テ官署室内ニ入ルトキハ帽ヲ脱スヘシ但下班ノ者室内ニ入ルトキハ脱帽セサルモ妨ケナシ

第十一 巡查帶劍シテ官署室内ニ入ルトキハ帽ヲ脱スヘカラス其劍ヲ帶セサルハ
脱帽スヘシ

第十二 下班ノ者上官ノ室内ニ入ルトキハ其入口ニ直立シ來意ヲ告ケ指揮ヲ待ツヘシ
第十三 室内ニ於テ上官ニ申告ヲナスハ其三步前ニ進ミ警部補以上ニアリテハ劍ヲ左手ニ握ミ帽ヲ右手ニ持テ帽裏面ヲ体ニ着徽章ヲ前面ニ向ケ直立スヘシ巡查ニ

在テハ劍ヲ左手ニ握ミ右手ハ垂下スヘシ其劍ヲ帶セルハ帽ヲ左手ニ持チ右手ハ垂下スヘシ申告ヲ終リタルトキハ徐ニ左回シテ舊席ニ復スヘシ上官ノ招呼ニ應シタルトキハ亦同シ

第十四 室内ニ於テ公務ヲ談スルトキ下班ノ者上官ノ許可ヲ得ルトキハ着席スルヲ得ヘシ

第十五 上官物品ヲ下班ノ者ニ交付スルニ際シテハ其二步前ニ進ミ右手ヲ以テ之ヲ受クヘシ下班ノ者上官ニ物品ヲ呈スルトキ亦同シ

第十六 途上ニ於テ上官ノ答禮ハ舉手スヘキモノトス下班ノ者假令上官ノ答禮ナシト雖モ決シテ已レテ輕侮シタリトノ念ヲ懷クヘカラス

第十七 凡ソ禮式ニ上班ト稱スルハ巡查ノ警部警部補以上ニ於ケル警部警部補ノ警視以上若クハ警部長ニ於ケルカ如シ但署員ノ其署長ニ於ケル亦同シ

第十八 職務上人民ヨリ正當ニ禮ヲ受ケタルトキ之ニ答禮スルハ勿論ナリトス
○内達第十二號 十九年十月十八日
新年紀元節天長節賀表書式左之ヲ改正ス

賀表書式

一書式ヲ別テ四種トス其第一ハ准奏任官以上第二ハ非役有爵者同從六位以上同勳六等以上ノ賀表書式トス其第三ハ判任官准判任第四ハ非役正七位以下同勳七等以下ノ賀表書式トス其料紙ハ大奉書ヲ用ユヘシ但便宜ニ依リ美濃紙薄葉ヲ以テ代用スルモ妨ケナシ

一賀表ハ新年ニ朝拜シ又ハ新年紀元節天長節ニ宮内省ハ參賀シ得ヘキ身分ニシテ他所出張或ハ在勤在任ノ者ハ書式ノ通り認メ直チニ式部職ヲ經テ上ル可シ但奏任官并准奏任ハ連名ヲ以テ上ルモ便宜タル可シ

シ

一判任官准判任ハ所屬廳ヘ參賀ス可シ内閣ノ省元老院府縣各廳ノ長官(臨時建築局ハ總裁内閣中會計檢査院鐵道局ハ其長官)ハ所轄判任官ノ參賀及出張若クハ各所在勤者ノ賀表ヲ受ケ參賀言上書式ノ通り認メ式部職ヲ經テ上ル可シ其所屬廳ヘ參賀又ハ賀表差出サセ方ハ各廳ニ於テ適宜之ヲ定ムヘシ但シ郵送スル賀表ヲ取纏ル爲メ時日ヲ要スル時ハ數日ノ後言上スルモ妨ケナシ

一陸海軍兵卒生徒等ニシテ正七位以下勳七等以下ヲ有スル者ハ總テ本項ノ例ニ准シ書式ノ通り認メ上ル可シ

一神官判任ハ其長官ニテ參賀ヲ受ケ書式ノ通り認メ式部職ヲ經テ上ル可シ若シ長官不在ニシテ代理者判任ナル時ハ一同直ニ内務省ヘ賀表ヲ差出シ同省ヨリ第三書式ニ准シ認メ上ル可シ

一北海道廳判任官在京ノ節ハ内閣ヘ地方判任官神官判任在京ノ節ハ内務省ヘ參賀シ又判任官ニシテ其長官ニ從ヒ他所出張中ハ長官參賀ヲ受ケ書式ノ通り認メ上ル可シ

一非役正七位以下同勳七等以下ノ者ハ所在地方廳ヘ參賀シ該廳懸隔ノ地ニ在ル者ハ賀表ヲ差出ス可シ其賀表書式並差出サセ地方廳ノ適宜ニヨル尤其廳長官ヨリ書式ノ通り認メ上ル事第三項ノ例ニ准ス

一有爵者及從六位以上勳六等以上ニシテ判任官奉職ノ者ハ第二書式ニ依リ認メ上ル可シ又正七位以下勳七等以下ニシテ等外或ハ雇等ノ名義ニ使用セラル者所在地方廳ニ參賀ス可シ該廳懸隔ノ地ニ在ル者ハ第六項ニ准ス

一祝節ニ當リ艦船ニ乗組又ハ航海中ノ者ハ賀表ヲ上ルニ及ハズ
要書式

第三條 室内ノ最敬禮ハ六歩前ニ於テ正面ノ方向ヲ取り直立シ兩足ヲ整ヘ右手ニテ帽ノ前庇ヲ摘ミ之ヲ垂直ニ提ケ裏面ヲ袴ノ縫目ニ附着シ劍ヲ垂下シ左手ヲ以テ柄頭ヲ握リ體ノ上部ヲ少シク前ニ傾クヘシ

但佩劍セサルトキハ左手ヲ垂下スヘシ

第四條 室外ノ最敬禮ハ行幸啓儀仗兵アレハ御旗ノ過クル時期トス六歩前ニ於テ正面ノ方向ヲ取り直立シテ兩足ヲ整ヘ佩劍ヲ垂下シ左手ヲ以テ劍ノ柄頭ヲ握リ右手ヲ舉ケ五指ヲ整接シテ食指ト中指トテ帽ノ前庇ノ右側ニ當テ掌ヲ稍外面ニ向ケ肘ヲ肩ニ齊シク敬スヘキ人ニ注目シ通過了ルノ間其姿勢ヲ保ツヘシ

第五條 馬上ニ在ルトキ最敬禮ハ正面ノ方向ヲ取り馬ヲ駐メテ禮式ヲ行フヘシ

第六條 天皇三皇皇太子及皇族ニ對シテハ最敬禮ヲ行フヘシ

第七條 外國皇帝皇后皇太子及皇族ニ對シテハ最敬禮ヲ行フヘシ

第八條 室内ノ敬禮ハ五歩前ニ於テ姿勢ヲ正シ右手ニテ帽ノ前庇ヲ摘ミ之ヲ垂直ニ提ケ裏面ヲ袴ノ縫目ニ附着シ左手ヲ以テ劍ノ柄頭ヲ握リ體ノ上部ヲ少シク前ニ傾クヘシ

但佩劍セサルトキハ左手ヲ垂下スヘシ

第九條 室外ノ敬禮ハ五歩前ニ於テ姿勢ヲ正シ右手ヲ舉ケ五指ヲ整接ノ食指ト中指ト帽ノ前庇ノ兩側ニ當テ掌ヲ稍ヤ外面ニ向ケ面肘ヲ肩ニ齊シクシ受禮者ニ注目スヘシ

第十條 馬上ニ在ルトキ敬禮ハ通過ノ際禮式ヲ行フヘシ

第十一條 宮城並青山御所明宮後殿及離宮禁苑御料地内ニ於テハ親任官以下高等官並ニ有爵者タルコトヲ認知シタルトキハ凡テ敬禮ヲ行フヘシ

第十二條 本邦駐在各國公使及書記官書記生等ニ對シテハ又前條ニ同シ

第十三條 凡ノ禮式ハ下班ノ者ヨリ之ヲ行ヒ同僚ハ相互ニ敬禮ヲナスヘシ

第十四條 駐立スル際受禮者ノ通過スルトキハ正面ノ方向ヲ取り椅子ニ倚リタルトキハ起立シテ本文ノ禮式ヲ行フヘシ

第十五條 本條ニ所謂室内トハ宮殿及居室事務室應接所等ニシテ廊下扈厨等ハ室外トナス

第十六條 凡ソ居室ニ入ルトキハ脱帽スヘシ但上班ノ者下班ノ者ノ居室ニ入ルトキハ脱帽セサルモ妨ケナシ

第十七條 官位勳記辭令等ヲ受クルトキハ第六條ノ禮式ヲ行ヒ適宜前進シ劍ヲ垂下シ帽ヲ左腋ニ挾ミ右手ヲ以テ拜受シ左手ヲ副ヘテ披見シ直ニ之ヲ收メ舊位ニ復シ再敬禮ヲ行ヒ退去スヘシ

第十八條 整列シタルトキ又ハ隊伍ヲ爲シテ行進スルトキハ其指揮ヲ掌ル者ノミ相當ノ禮式ヲ行ヒ其他ノ者ハ禮式ヲ受クヘキ人ニ注目スヘシ

第十九條 途上上官ヘ申告セントスルトキハ定式ノ禮ヲ行ヒ適宜前進シテ申告スヘシ上官若シ止メスシテ進行スルトコトヲ示シタルトキハ下班ノ者ハ上官ノ左側ニ副ヒ同步シテ申告ヲナスヘシ

但下班ノ者上官ト同行スルトキハ三歩後ニ從フヘシ

第二十條 狹隘ノ道路及橋梁廊下階子段等ニ於テ上官ニ出會シタルトハ立止リ上官ノ通行ヲ待ツヘシ若シ下班ノ者既ニ進行中ナルトキハ便宜立戻リ上官ヲシテ已レノ通過ヲ待タシメサル様注意スヘシ

第二十一條 物品ヲ携帶シ相當ノ禮式ヲ行フ能ハサル場合ニ於テハ物品携帶ノ儘停止シテ受禮者ニ注目スヘシ

第二十二條 特別ノ注意ヲ要スヘキ職務ニ從事スルルハ禮式ヲ行フノ限リニ非ス
○宮内省達第二號 二十二年二月十一日

皇族列次ハ實系ノ遠近ニ從ヒ 皇位繼承ノ須序ニ依ル但シ親王敍品宣下アリシ者ニ
限リ特殊ノ席次ヲ以テシ一般ノ列次左ノ通り定ム

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 熾仁親王 | 晃 親王 | 彰仁親王 | 貞愛親王 | 朝彦親王 | 能久親王 |
| 威仁親王 | 載仁親王 | 依仁親王 | 裁仁親王 | 邦芳親王 | 博恭王 |
| 菊麿王 | 成久王 | 恒久王 | 輝久王 | 邦憲王 | 邦彦王 |
| 守正王 | 多嘉王 | 鳩彦王 | 稔彦王 | | |

第十七章 恩給及救助

○太政官達第七十九號 明治六年三月三日
三子出産ノ者其家困窮ニシテ孽養行届兼候向ハ以來養育料トシテ一時金五圓給與致
シ候間地方官ニ於テ速ニ施行致シ追テ請取方大藏省ヘ可申出候事
○太政官達第百六十二號 明治七年十二月八日

恤救規則

濟貧恤窮ハ人民相互ノ情誼ニ因テ其方法ヲ設ヘキ筈ニ候得共目下難差置無告ノ窮民
ハ自今各在ノ遠近ニヨリ五十日以内ノ分左ノ規則ニ照シ取計置委曲内務省ヘ可伺出
此旨相達候事

- 一 極貧ノ者獨身ニテ癡疾ニ罹リ産業ヲ營ム能ハサル者ニハ一ケ年米一石八斗ノ積ヲ
以テ給與スヘシ
- 一 但獨身ニ非ズト雖モ餘ノ家人七十一年以上十五年以下ニテ其身癡疾ニ罹リ窮迫ノ
者ハ本文ニ準シ給與スヘシ
- 一 同獨身ニテ七十一年以上ノ者重病或ハ老衰シテ産業ヲ營ム能ハサル者ニハ一ケ年米
一石八斗ノ積ヲ以テ給與スヘシ

但獨身ニ非ズト雖モ餘ノ家人七十一年以上十五年以下ニテ其身重病或ハ老衰シテ
窮迫ノ者ハ本文ニ準シ給與スヘシ

一 同獨身ニシテ疾病ニ罹リ産業ヲ營ム能ハサル者ニハ一日米男ハ三合女ハ二合ノ割
ヲ以テ給與スヘシ

但獨身ニ非ズト雖モ餘ノ家人七十一年以上十五年以下ニテ其身病ニ罹リ窮迫ノ者
ハ本文ニ準シ給與スヘシ

一 同獨身ニテ十二年以下ノ者ニハ一ケ年米七斗ノ積ヲ以テ與給スヘシ
但獨身ニ非ズト雖モ餘ノ家人七十一年以上十五年以下ニテ其身窮迫ノ者ハ本文ニ
準シ給與スヘシ

一 救助米ハ該地前月ノ下米相場ヲ以石代下ヶ渡スヘキ事
○内務達乙第八十五號 明治八年七月三日

窮民恤救ノ儀ニ付テハ昨七年第百六十二號ヲ以御達ノ趣モ有之候處爾後右等ノ者共
救助筋申請ノ砌ハ左ノ簡條ニ照シ篤ト調査ノ上可伺出此旨心得トシテ相達候事

第一條 恤救規則ニヨル可キモノハ獨身老幼癡疾疾病等ニテ何等ノ業モ爲ス能ハス
事實赤貧ニシテ曾テ他ニ保育スル者モ無之全ク無告ノ窮民而已ニ限ルヘシ然ルニ
唯年齡癡疾等ノ名儀ニヨリ救ヲ伺出ル等ノ儀コレアリテ恤救規則ノ趣旨モ背戾可
致ニ付假令二十年以上又ハ癡疾ノ者タリモ其業ニヨリテ生産ノ道可相立者ナシト
セサレハ篤ト現場ノ實況査定シ眞ニ不得已者而已具狀イタスヘシ

第二條 同上ニヨリ是迄其市村内或ハ隣保ノ情誼ニヨリ互ニ協救仕來ル如キハ別段
官ノ給與ヲ乞ハサルヲ以本旨トスヘシ

第三條 同上ニヨリ互ニ協救スルト雖若シ其手當不足ニシテ其内幾分ヲ官ヨリ仰カ
サレハ補助スル能サル等ノ如キハ其幾分救助ノ次第及ヒ石數金員ニ至ル迄詳悉記

第四條 傷疾給助ノ額

一 二等傷 終身不具トナリ自用ハ年金三十拾円ヨリ少カラス四十拾円ヨリ多カラサル額ヲ給ス

二 二等傷 終身不具トナリ自ハ年金貳拾円ヨリ少カラス三十拾円ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第五條 死亡給助ノ額

一 寡婦又ハ相續ノ孤兒アル時ハ年金三十拾円ヨリ少カラス五十拾円ヨリ多カラサル額ヲ給ス

但寡婦アレハ孤兒ニ給セス

二 寡婦又ハ孤兒ノ給助ヲ受ル者ナク祖父母又ハ二十歳未滿ノ兄弟姉妹ニシテ死者ニ依リ從來生計ヲ爲セシ者アルトキハ一時金五十拾円ヨリ少カラス百円ヨリ多カラサル額ヲ給ス

三 相續者タル孤兒滿二十歳ニ至ルモ廢篤疾ナルトキハ年金ヲ廢止スルニ際シ一時金五十拾円ヨリ少カラス百円ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第六條 療治料ハ傷疾又ハ病症ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

第七條 祭祀料

一 奉職一年未滿ニシテ死亡スル者ハ一時金拾円ヨリ少カラス拾五円ヨリ多カラサル額ヲ給ス

二 職務ノ爲メ死亡スル者ハ前項ノ外一時金五十拾円ヨリ少カラス百円ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第八條 左ノ各項ニ該ル者ハ給助ヲ受ケルヲ得ス

一 公權ヲ剝奪セラレタル者

二 懲罰ニヨリ免職セラレタル者

第九條 左ノ各項ニ該ル者ハ其時間公權ヲ停止ス

一 俸給ヲ受ルノ官職ニ就キタル者

二 公權ヲ停止セラレタル者

三 失踪シタル者

四 許可ヲ得スシテ外國ニ出テ一年以上歸朝セサル者

○ 内務乙第六十八号 明治十五年十二月十五日 (警視廳府縣(東京府)沖繩) 函館札幌根室四縣ヲ除ク

本年七月第四十一号公達巡查看守給助例第二條第一項勳績割註ノ趣ハ全ク一地方内

轉任スル者ニ限ル義ニ付此旨爲心得相違候事

○ 内務第一一八三号 (官制廳) 十九年十二月

巡查看守給助金額之義ニ付上申

來ル明治二十年度ヨリ巡查看守給助例施行候ニ付テハ左ノ金額ヲ以給助致度此段相

同候也

一 退職給助額

一 勳績滿五年ノモノハ一時金貳拾圓ヲ給シ滿六年以上九年マテハ一年毎ニ金三圓

ヲ増給ス

二 勳績滿十年ノ者ハ年金貳拾五圓ヲ給シ滿十一年以上ハ一年毎ニ金壹圓ヲ増給ス

一 傷痕給助額

一 一等傷ハ年金三十五圓ヲ給ス

二 二等傷ハ年金貳拾五圓ヲ給ス

一 死亡給助額

一 寡婦又ハ相續ノ孤兒アルトキハ年金三拾五圓ヲ給ス
 二 寡婦又ハ孤兒ノ給助ヲ受ケタル者ナク祖父母又ハ二十歳未満ノ兄弟姉妹ニシテ死者ニヨリ從來生計ヲ爲セシ者アルトキハ一時金百圓ヲ給ス
 三 相續者タル孤兒二十歳ニ至ルモ殘篤ナルトキハ年金ヲ廢止スルニ際シ一時金百圓ヲ給ス
 一 療治料ハ傷痕又ハ病症ノ輕重ニヨリ一日金五拾錢ヨリ多カラサル額ヲ給ス
 一 祭祀料ノ額
 一 奉職一年未満ニシテ死亡スル者ハ一時金拾圓ヲ給シ滿一年以上一ケ年毎ニ金三圓ヲ増給ス
 二 職務ノ爲メニ死亡スルモノハ前項ノ外一時金百圓ヲ給ス
 内務省指令 明治十九年十二月廿七日
 書面上申之趣認可候事
 ○内務訓令第二十三号 明治二十年四月七日
 巡查看守給助例中年金ハ左ノ各項ニ據リ支給スヘシ
 一 年金ハ毎年三月及九月ニ於テ其月ヨリ前六箇月 六ヶ月ニ滿タルモノハ分ヲ支給スヘシ
 一 年金ハ退職又ハ死亡又ハ傷減ノ翌月ヨリ支給スヘシ
 一 年金ヲ受ケタル者本例第八條第一項及第九條ニ該當スルトキハ日割ヲ以テ支給スヘシ
 一 年金ヲ受ケタル者死亡又ハ本例第五條第一項後段ニ該當スルトキハ其月分全額ヲ支給スヘシ
 ○本 縣 兌 第三九四號 明治二十年四月一日

本縣ヨリ北海道廳及各府縣知事へ巡查看守給助例施行ニ付照會

本縣ニ於テ本年四月一日ヨリ巡查看守給助例施行候處他管ノ者ニシテ其給助ヲ受ケヘキモノ右ニ關スル一切ノ願届書及給助金領收証書ハ本人所在地區戸長ノ奥印ヲ受ケ本管廳ヲ經由シテ當廳へ差出ヘキ成規ニ付自然奥印請求候儀モ可有之候間豫テ其筋へ御訓示置相成度此段及御照會候也

○本規第三號 明治二十一年一月十二日 (警部長ヨリ各署分署へ)

官崎縣警察官吏死亡吊慰法

第一條 警察官巡查及警察雇職務ノ爲メ給助スル者アルトキハ各員餘金シテ之ヲ贈購シ相吊慰スルノ至情ヲ表スルモノトス

但六種傳染病流行ニ際シ豫防驅逐ノ爲メ傳染死亡シテ吊慰料若クハ扶助料ヲ賜ルヘキモノモ本條ノ例ニ依ル

第二條 餘金ハ其死傷ノ當日現在員ノ俸給ニ應シ (午後昇降等アルモ當日ノ俸給ニ依ル) 例圖ニ照シテ割賦スルモノトス

但一ヶ月其金高俸給百分ノ二ヲ超ルトキハ月賦ヲ以テ積集スヘシ尤轉免死亡スルモノハ其月ニ止ム

第三條 吊慰金ハ其父母妻子又ハ相續人等ニ贈購ス其贈購ヲ受ケヘキ者ナキ時ハ記念碑ヲ建テ其功績ヲ勒シ且祭典ヲシテ永ク絶タサシム

但其贈購ヲ受ケヘキ者他管下ニアル時ハ該管轄廳ニ照會シテ金圓ヲ贈購ス總テ其之ヲ受ケタル者ヲシテ徒費セサシムルヲ要ス

第四條 一等傷痕以下ノ贈購ハ直子ニ本人ニ贈ルヘシ

第五條 全時ニ吊慰ヲ受ケヘキモノ二人以上アルトキハ拜命ノ順序又ハ年齢ノ長少

ナ以テ前後ヲ定メ第二條但書ノ例ニ依リ釀金贈賻スルモノトス
 第六條 傷痕ニ罹ル者ノ等差ハ公立病院(正當開業醫二名以上)醫員ノ診斷書ヲ以テ之ヲ定メ各員ニ示スヘシ

吊慰例圖

重傷死ニ至ル者 月給百分ノ二	一等傷痕 終身不具自由ヲ辨スル能ハサル者 全上百分ノ一	二等傷痕 同上次ナル者 同上百五十分ノ一	三等傷痕 同上稍々次ナル者 同上二百分ノ一
-------------------	-----------------------------------	----------------------------	-----------------------------

第七條 釀金ノ取扱ハ警察本部第三課ニ於テ擔當スルモノトス
 ○法律第四十三号 明治二十三年六月二十日

官吏恩給法

第一條 文官判任以上ノ者退官シタルトキハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受ケルノ權利ヲ有ス

第二條 左官滿十五年以上ノ者左ニ掲グル事項ノ一ニ當ルトキハ終身恩給ヲ給ス
 一年令六十歳ヲ越エ退官ヲ許シタルトキ

二 傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘス退官ヲ許シタルトキ
 三 廢官廢廳若クハ官廳事務ノ伸縮又ハ非職滿期ニヨリ退官シタルトキ

第三條 左ニ掲グル事項ノ一ニ當ル者ハ前條ノ年期ニ滿タサルモ終身恩給ヲ給シ尙ホ其最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ヲ給ス

一 公務ニ因リ傷痕ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘス退官シタルトキ
 二 公務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受ケルヲ顧ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪

ヘス退官シタルトキ

ハス退官シタルトキ

第四條 滿五年以上國務大臣ノ職ニ左ル者退官シタルトキハ第二條ノ制限ニ拘ハラズ恩給ヲ給ス

第五條 恩給ノ年額ハ退官現時ノ俸給ト在官年數トニ依リ之ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ退官シタル者ノ恩給年額ハ俸給年額ノ二百四十分ノ六十トシ十五年以降

滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至テ止ム但在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十五年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十五年ノ額トス
 非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス
 交際官及領事貿易事務官等ノ恩給ハ其官等ニ對スル普通文官ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス

兼官ニ依テ受ケル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算スヘシ
 恩給年額円位未滿ノ數ハ円位ニ滿タシム

第六條 恩給ヲ受ケ又ハ恩給ヲ受ケスシテ退官シタル者在官中ノ公務ニ起因スル傷痕疾病引續キ重症ニ趨キタルトキ其事由ヲ詳悉シ左ノ期限内ニ申出レハ査覈ノ上相當ノ恩給ヲ給ス

一 一肢ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後二個年
 二 二肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ兩眼ヲ盲シ若クハ二肢ヲ亡シ生ル之ニ準スヘキ者ハ退官後三個年

第七條 在官年數ハ判任官以上初任ノ月ヨリ起算シ退官ノ月ヲ以テ終リトス
 明治四年八月以前ヨリ任官セラレタル者ハ同年同月ヨリ起算ス但本項ニ掲グル者退官スルトキハ明治四年七月以前ノ勤務ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スレ

第一編第十七章 恩給及救助

一五八

月俸ノ半額ヲ以テ在官年數ノ一個年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

第八條 左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ニ算入スヘシ

一 判任官以上出仕官ニ在ルノ月數
二 武官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ軍人恩給ヲ受ケスシテ現役ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ其現役中ノ日數

三 從軍年加算ノ年月

四 非職及休職中ノ月數

五 退官ノ後再ヒ任官シタル者ハ前在官ノ月數

六 宮内官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ恩給ヲ受ケスシテ宮内官ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ宮内判任官以上在官中ノ月數

第九條 左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ヨリ除算スヘシ

一 年齢二十歳未満ノ者在官月數

二 高等官試補及判任官見習中ノ月數

三 郡區書記ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官職ニ在ル月數及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ル月數

四 御用掛雇等外出仕勤仕ノ月數

五 第八條第二ニ掲クル者ニ在テハ軍人恩給法ニ依リ除算スヘキ日數

六 自己ノ便宜ニ依リ退官シタル後又ハ戒懲處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル後再ヒ任官シタル者ニ在テハ其前官ノ月數

第十條 文官ニシテ從軍シタル者ハ軍人恩給法ノ算則ニ照シテ其從軍年ヲ加算ス

第十一條 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ滿一年以上在官シタル后退官シタルルハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス

一 退官現時ノ俸給前後相同シカラサルトキハ前官年數ヲ後官ノ年數ニ通算シ後官ニ對スル恩給額ト前ノ恩給額トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス

二 退官現時ノ俸給前後相同シキトキハ在官年數ニ依リ恩給額ヲ增加ス但前官十五年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者ニ在テハ前後通算シテ十六年以上ニ至ラサレハ増加セス

第十二條 恩給額受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剥奪ス

左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間恩給ヲ停止ス

一 判任以上ノ官ニ任シ政府ヨリ恩給ヲ受クルトキ但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキハ此限ニアラス

二 公權ヲ停止セラレタルトキ

第十三條 年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニヨリ退官シタル者又ハ戒懲處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失フ

法律ヲ以テ設立シタル議會ノ議員ト爲リタルノ故ヲ以テ退官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失ハス

第十四條 政府ヨリ恩給ヲ受ケタル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ハ恩給ヲ受クルノ權ナキモノトス但郡區書記ハ此限ニアラス

商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ニシテ公務ノ爲メ傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ此法律第三條ニ該當スル者ニ限り退官又ハ罷免現時ノ俸給四分ノ一ヲ終身支給スルコトヲ得

第十五條 恩給支給ノ期ハ退官ノ翌月ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス

第十六條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇年内ニ請求セサレハ其權利ヲ

拋棄シタルモノトス

第十七條 恩給ノ支給ハ本屬長官ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ依リ恩給ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六個月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一箇年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ恩給局ノ裁決ハ終審確定ノモノトス

一 傷疾疾病ノ原因及其輕重

二 職務ニ堪ユルト否ヲサルト

第十八條 恩給ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又ハ負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受ケタル者ハ總テ其恩給ニ依ルハシ但其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

第二十條 此法律施行前ニ退官シタル者ノ恩給ハ明治十七年達官吏恩給令ニ依ルヘシ但此法律施行ノ日ヨリ三箇年以内ニ請求セサレハ之ヲ受クヘキ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第二十一條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

從前ノ命令ニシテ此法律ニ抵觸スルモノハ總テ廢止ス

○法律第四十四號 明治二十三年六月二十日

官吏遺族扶助法

第一條 文官判任以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定スル所ニ依リ扶助料ヲ受ケルノ權利ヲ有ス但第二條ノ納金ヲナスヘキ義務ナキ者

遺族ハ此限ニ在ラス

一 在官十五年以上ノ者在官中死去シタルトキ

二 在官十五年未滿ノ者公務ノ爲メ死去シタルトキ

三 恩給ヲ受ケル者死亡シタルトキ

第二條 文官判任以上ノ者ハ其俸給百分ノ一ヲ國庫ニ納ムヘシ

第三條 交際官及領事貿易事務官等其俸給普通文官ヨリ多額ナルトキハ普通文官ノ俸給ニ依リ少額ナルトキハ現ニ受ケル所ノ俸給ニ依リ第二條納金ヲ爲スヘシ

政府ヨリ俸給ヲ受ケタル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ノ俸給及兼官ニ依テ受ケル加俸ニ對シテハ第二條ノ納金ヲ要セス

第四條 寡婦扶助年額ハ亡夫ノ受ケタル若クハ受クヘキ恩給年額三分ノ一トス

公務ノ爲メ受ケタル傷疾ニ原因シテ死去シ又ハ非常ノ勞動及困苦ヲ忍ビ勤続ニ従事シ爲メニ發病死去シ又ハ公務ニ依リ傳染病者ニ接シ病該毒ニ感染シテ死去シ又

ハ戰地ニ於テ若クハ公務旅行中流行病ニ罹リ死去シタル者ノ寡婦扶助料ハ亡夫ノ俸給ニ對シ官吏恩給方第五條ニ依リ算出シタル恩給年額三分ノ二トス

扶助料年額四位未滿ノ數ハ四位ニ滿タシム

第五條 寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受ケル寡婦死去シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ孤兒ニ給ス

第六條 孤兒扶助料ハ數子アルトキハ家名繼承者ニ給シ戸主ニ非ラサル者ノ孤兒ニ在テハ長子ニ給ス其繼襲者及長子死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿ルトキハ順次年少者ニ轉給スルモノトス但家名繼承者ヲ除クノ外男子ヲ先ニシ女子ヲ後ニス

第七條 恩給ヲ受ケタル者ノ寡婦ニシテ其夫退官後結婚シタル者ハ扶助料ヲ受ケル

コトヲ得ス

第八條 此法律ニ於テ孤兒トハ年齢二十歳未滿ノ男子ニシテ未ダ結婚セサル者ヲ云フ但養子ハ家名繼襲者ニ限ル

第九條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ給ス

第十條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦及孤兒ナク若クハ扶助料ヲ受ケタル寡婦及孤兒戸籍ヲ去リ若クハ死去シ若クハ權利消滅シタルトキハ父母又ハ祖父母アルトキハ寡婦ニ相當スル扶助料ハ先ツ父ニ給シ其父存在セサルトキ若クハ權利消滅シタルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此例ニ依ル

第十一條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戸籍内ニ在ルニテ未滿又ハ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姊妹アリテ之ヲ給養スル者ナキトキハ寡婦ニ相當スル扶助料一個年分ヨリ少カラズ五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ人員ニ拘ハラズ一時限リ其兄弟姊妹ニ母スルコトヲ得

第十二條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三箇年円ニ請求セサレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第十三條 扶助料ハ賣買講與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得

第十四條 扶助料ヲ受クルノ權利ハ左ノ時ヨリ消滅ス

一 寡婦死去又ハ婚嫁シ若クハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月

二 孤兒死去又ハ婚嫁シ又ハ他家ノ養子女トナリ又ハ年齢二十歳ニ滿シタル月ノ翌月

三 父母祖父母死去シ又ハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月

第十五條 孤兒二十歳ニ滿ツルモ養若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハス他ニ給養スル者ナキトキハ寡婦扶助料ノ三分ノ一ヲ其孤兒ニ各終身給スルコトヲ得但一戸籍内ニ寡婦ト同額ノ扶助料ヲ受クル者アルトキハ其間之ヲ給セス

第十六條 扶助料ヲ受クル者日本臣民タルノ分限ヲ失ヒ若クハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ扶助料ノ支給ヲ廢ス

公權ヲ停止セラレタルトキハ其間支給ヲ停止ス

第十七條 扶助料ヲ受クル者公權停止中ハ其轉給ヲ受クヘキ者ニ之ヲ給ス

第十八條 在官十五年未滿ノ者在官中公務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ハ在職最終ノ俸給年額百分ノ一ヲ在官年數ニ乗シタル額トス但一年未滿ノ在官月數ハ計算セス

第十八條 扶助料ノ支給ハ地方長官ノ申牒ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ因リ扶助料ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六個月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一個年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十九條 明治十七年達官更恩給令ニ依リ扶助料ヲ受ケタル者及恩給ヲ受ケタル者ノ遺族扶助料ハ總テ其恩給令ニ依ルハシ但シ其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

第二十條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

○閣令第四號 明治二十三年七月二日
官吏遺族扶助法施行規則
第一章 扶助料ノ請求

第一條 官吏遺族扶助法第一條第一第二及第十七條ニ當ル者アリタルトキハ本屬應ヨリ死者ノ履歷書ヲ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料又ハ一時扶助金請求ノ証ト爲スヘシ

第二條 官吏遺族扶助法第一條第三ニ當ル者ノ遺族其恩給証書ヲ以テ扶助料請求ノ証ト爲スヘシ

第三條 官吏遺族扶助法第四條第二項ニ當ル者アリタルトキハ本屬應ニ於テ事實ヲ查覈シ其傷痍若クハ疾病ノ公務ニ起因シタル証據トナルヘキ書類及醫師ノ診察ヲ爲サシメタル場合ニ於テハ其診斷書ヲ併セテ其遺族ニ下スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料請求ノ証ト爲スヘシ

第四條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ請フ者ハ前者ノ扶助料証書ヲ以テ請求ノ証ト爲スヘシ

第五條 公權停止ニ因リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ハ確定裁判ノ宣告書寫ヲ以テ請求ノ証ト爲スヘシ

第六條 官吏遺族扶助法第十一條及第十五條ニ當ル者ハ其事由ヲ詳記シ廢疾不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル者ハ醫師ノ診料書ヲ添ヘ扶助料ヲ請求スヘシ

第七條 扶助料ノ請求書ハ請求者署名シ後見人アレハ其親族ニ名親族ナキトキハ居住地ノ戶主ニ名連署シ市町村長ノ與印ヲ受ケ第一條乃至第六條ニ掲グル書類ノ外市町村長ノ証明シタル戶籍調書ヲ添附シ地方長官ニ差出スヘシ

第八條 扶助料ノ請求ヲ受ケタル地方長官ハ查覈ノ上扶助料年額ノ計算書ヲ作り証據書類ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

内閣ニ於テ之ヲ許可シタルトキハ扶助料証書ヲ作り地方廳ヲシテ之ヲ本人ニ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ扶助料証書若クハ辭令書ヲ下付シ

タルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報スヘシ

第二章 納金ノ徵收

第九條 官吏遺族扶助法第二條ニ掲グル納金ハ俸給支給ノトキ各廳ニ於テ之ヲ徵收シテ國庫ニ納ムヘシ

第三章 扶助料ノ支給及停止

第十條 扶助料ノ支給ハ官吏恩給法施行規則第七條第八條第九條及第十條第一第二三ノ例ニ依ル

第十一條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキハ地方廳ニ於テ扶助料ノ支給ヲ廢シ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキモノナキトキハ地方廳ニ於テ其扶助料証書ヲ收メテ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第十二條 扶助料ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ公權ヲ停止セラレタルトキハ官吏恩給法施行規則第十三條ノ例ニ依ル

第十三條 大藏省ニ於テ第十一條第十二條ノ通知ヲ受ケタルトキハ官吏恩給法施行規則第十六條ノ例ニ依ル

雜則

第十四條 水火災盜難等ニ依リ扶助料証書ヲ亡失シタルトキ及扶助料ヲ受クル者改氏名ヲ爲シタルトキハ官吏恩給法施行規則第十七條及第十八條ノ例ニ依ル

第十五條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ同令ニ依リ扶助料ヲ受クル者ハ左ノ場合ニ於テ本則ニ依ル

一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二 恩給証書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名又ハ他府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキ
第十六條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村長ノ爲スヘキ
職務ハ區戶長ニ於テ之ヲ行フヘシ
○閣令第三號 明治二十三年七月二日
官吏恩給法施行規則

第一章 恩給ノ請求

第一條 官吏恩給法第二條第三條第六條及第七條第二項第十四條第二項ニ依リ恩給
ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ退官當時ノ本屬廳ノ長官ニ差出スヘシ
但廢官廢廳ニ當リタルトキハ其事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ差出スヘシ

第二條 官吏恩給法第四條ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ内閣總理大臣ニ
差出スヘシ

第三條 恩給請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ
一 在官中履歷書
二 市町村長ノ証明シタル戶籍調書

但官吏恩給法第十四條第二項ニ掲ケタル者ハ之ヲ添付スルニ及ハス
第四條 公務ノ爲メ傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ請求スル者ハ前條ニ掲グル
書類ノ外左ノ書類ヲ以テ其事實ヲ証明スヘシ官更恩給法第六條ニ依リ恩給ヲ請求
スル者亦同シ

一 現認証書又ハ之ヲ証スル公文ノ寫若クハ口供書
二 醫師ノ診斷証書

第五條 恩給ノ請求ヲ受タル各廳長官ハ查覈ノ上請求ノ理由アリト認ムルハ請求
者ノ在官年數及恩給年額計算書ヲ作り証據書類ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

各廳長官ニ於テ請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ具シテ之ヲ内閣總理大臣ニ
差出スヘシ

第六條 内閣ニ於テ前條ノ請求ヲ許可シタルトキハ恩給証書ヲ作り本屬廳ヲ經テ本
人居住地ノ地方廳ヲシテ之ヲ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ
恩給証書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報スヘシ

第二章 恩給ノ支給
第七條 恩給ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前三箇月分ヲ大藏省ヨリ
本人居住地ノ地方廳ヲ經テ支給ス但權利消滅ノトキ及一時支給ノ金額ハ期月ニ拘
ハラス之ヲ支給ス

第八條 恩給ヲ受クル者其金額ヲ受領セントスルトキハ恩給証書ヲ以テ其受領權ヲ
ルコトヲ証明スヘシ

第九條 恩給ヲ受クル者他府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキハ從來ノ居住地ノ地方廳
及轉籍若クハ寄留地ノ地方廳ニ其旨ヲ届出ヘシ
地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタ
ルトキハ大藏省ニ通知シ各廳間互ニ其者ニ係ル恩給支給方ノ受繼ヲ爲スヘシ

第十條 官吏恩給法第十二條ニ當リタル者ハ恩給支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ルヘシ
一 重罪ノ刑ニ処セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日日本臣民タルノ分
限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二 判任官以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルハ俸給ノ支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以
テ支給ヲ終リ其退官シタルハ俸給ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム
三公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ処セラレ若クハ監視ニ付セラルヘキ確

定裁判ノ宣告ヲ受タル日ヲ以テ支給ヲ終リ刑期満限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム
第十一條 官吏恩給法第七條第二項ニ掲クル月俸トハ明治四年六月東京淺草米蔵ノ
平均相場ニ依リ當時ノ官祿一ヶ月分ニ相當スル金額トス
第十二條 官吏恩給法第三條ニ掲クル最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ノ等差ハ左
ノ加シ

第一項

兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ十分ノ七

第二項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罷リタルトキ十分ノ六

第三項 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ十分ノ五

第四項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罷リタルトキ十分ノ四

第五項 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ十分ノ三

第六項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ十分ノ二

傷痍疾病ノ等差ハ明治十八年達文官傷痍疾病等差例ニ依ル

第三章 恩給ノ停止

第十三條 恩給ヲ受クル者重罪若クハ禁錮ノ刑ニ処セラレ又ハ監視ニ付セラレタル
トキハ其確定裁判ノ宣告ヲ爲シタル裁判所ヨリ之ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十四條 官吏恩給法第十二條第二項ノ第一ニ當ル者アルトキハ其任用シタル官廳

ヨリ大藏省ニ通知スヘシ解任シタルトキモ亦同シ但此通知書ニハ本人恩給ノ支給

ヲ受ケタル地方廳名及俸給ノ支給ヲ始ムル日(解任ノトキハ支給ヲ終リタル日)ヲ

付記スヘシ

第十五條 恩給ヲ受クル者死去シタルトキハ其遺族ヨリ地方廳ニ届出ヘシ其遺族ニ

シテ扶助料ヲ受クヘキ權利ナキトキハ死去ノ届出ヲ爲スト同時ニ恩給證書ヲ返ス

ヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ直ニ大藏省ニ通知シ其恩給證書ハ内閣
恩給局ニ送付スヘシ

第十六條 大藏省ニ於テ第十三條第十四條第十五條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之内
閣恩給局ニ通知シ且第十三條第十四條ノ場合ニ於テハ地方廳ニ通知シテ其恩給ノ
支給ヲ停止シ又ハ復給セシムヘシ

地方廳ニ於テ此通知ヲ受ケタルトキハ其恩給ヲ剥奪スヘキモノハ恩給證書ヲ收メ
テ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第四章 雜則

第十七條 水火災盜等ニ由リ恩給證書ヲ亡失シタルモノハ居住地ノ地方廳ニ届出
ヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ其事實ヲ調査シ死亡ノ事由ヲ具シテ閣内
恩給局ニ申出ヘシ此場合ニ於テ恩給局ハ恩給證書ノ謄本ハ恩給證書ト同一ノ効力
アルモノトス

第十八條 恩給ヲ受クル者改氏名シタルトキハ居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ地方廳ハ
恩給證書ノ裏面ニ其事實ヲ記載シ長官署名捺印ノ上本人ニ下付シ其旨ヲ内閣恩給
局及大藏省ニ通知スヘシ

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受クルモノ左ノ場合ニ於テハ本則
ニ依ル

一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名又ハ他府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキ

第二十條 官吏恩給法第二十條ニ依リ恩給ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ

第二十一條 市町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村長ノ爲スヘキ職務ハ區戸長ニ於テ之ヲ行フヘシ

○敕令第九十八號 (明治二十三年六月二十日)

文官判任官以上ノ者在官滿一年以上十五年未滿ニシテ退官シタル者ニハ退官現時ノ俸給半箇月分ヲ以テ在官年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス但非職滿期ニ由リ退官シタル者ハ其在職最終ノ俸給額ニ依リ之ヲ給ス

本令施行前ニ滿年賜金若クハ一時賜金ヲ受ケタル者又ハ前項ノ賜金ヲ受ケタル者再ヒ任官シ自後退官シタルトキハ前項ニ掲ケル在官年數ヲ其再任ノ日ヨリ起算ス恩給ヲ受ケタル者並ニ自己ノ便宜ニ由リ退官シタル者又ハ懲戒処分若クハ刑事裁判ニ由リ免官シタル者ニハ本令ノ賜金ヲ給セス

本令ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

○縣令第一一三八號 (十九年十二月本縣知事ヨリ內務大臣ヘ伺)

一般人民遺族扶助料之儀ニ付伺

茲ニ一般人民ニシテ巡查全様ノ働キナシ爲メニ死亡セシモノアリ之ヲ明治十五年十二月達第六十七号第二項ニ照スニ遺族扶助料ハ父母妻子若クハ死者ニ依リ生計ヲナセシモノヘ金五十圓ヨリ少ナカラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ストアルヲ以テ假令其者次三男等ニ未タ配偶ヲナサス全ク父兄ニ依テ生計ヲナシ來リタルモノト雖モ若シ父母アラハ之ニ扶助料ヲ給スルモノ、如シ然ルニ全年七月達第四十一號巡查看守給助例第五條二項ニ依レハ寡婦又ハ孤兒ノ給助ヲ受ケルモノナク祖父父母又ハ二十歳未滿ノ兄弟姊妹ニシテ死者ニ依リ從來生計ヲ爲セシモノアルトキハ云々トアリテ等シク扶助料ノ名ニシテ支給方ヲ異ニスルハ少シク權衡ヲ得サル被覆候就テハ右達第六十七號遺族扶助料之儀ハ死者ニ依テ從來生計ヲ爲ス父母妻子若クハ其他ノ家

族ニ給スルノ趣意ニシテ死者ノ爲メニ生計ヲナサ、ル父母アルモ給與セサル儀ト相心得可然哉文字上聊疑義相生候條至急何分ノ御指揮相成度此段相伺候也

○內務省指令 明治十九年十二月二十四日

書面伺ノ趣死者ニ依リ從來生計ヲナセシト否トニ拘ハラス其父母ニ給與スル義ト心得ヘキ事

○本縣第七五一號 十九年八月二十日 (知事ヨリ內務大臣ヘ伺)

療治料支給方之儀ニ付伺

本縣巡查之儀者從來勤務ノ一部トシテ定日ニ於テ擊劍柔術等ノ研究ヲナサシメ居候處本年四月中擊劍修行ノ折柄誤テ骨傷ヲ受ケ爲メニ數日間ノ醫療ヲ受ケ候モノ有之右者明治八年第三號公達巡查死傷吊祭扶助療治料規則中別ニ明文無之候得共等シク勤務上ノ負傷ニ付該公達ニ準シ相當療治料支給致度此段相伺候也

○內務省指令 明治十九年九月六日

書面伺之趣相伺候事

○第十八章 褒賞及精勤證書

○內務訓令第二十一號 二十一年十月 警察賞與規則左之通相定ム

警察賞與規則

第一條 警察上功勞アル者ハ本則ニ依リ賣與スヘキモノトス

第二條 警察賞與ヲ分テ左ノ三種トス

甲種 金三圓以上拾五圓以下

乙種 金五圓以下

特別賞 金拾五圓以上三十圓以下

特別賞ハ事ノ重要ニ涉リ功勞ノ特ニ著明ナルモノニ限り之ヲ給スルコトヲ得

第三條 犯罪事件ニ關スル功勞ノ賞與ハ左ノ各項ニ依ル

第一項 左ノ罪犯ヲ現行ノ場合ニ於テ捕獲シ又ハ容易ニ捕獲スルヲ得セシメタル者

甲種

一 國事ニ關スル重罪犯

二 兇徒聚衆ニ關スル重罪犯

三 貨幣偽造變造ニ關スル重罪犯

四人命ニ關スル重罪犯

五 放火ニ關スル重罪犯

六 強盜ニ關スル重罪犯

乙種

一 貨幣偽造變造ニ關スル輕罪犯

二 竊盜ニ關スル罪犯

第二項 前項ノ罪犯ヲ分明ニ訴出タル者亦前項ノ區別ニ全シ

第三項 第一項ノ場合ニシテ罪犯暴行強迫ヲ以テ抗拒シタルトキハ其難易ニ依リ

及第一項ニ掲クル罪犯ニシテ其未遂ノ時ニ訴出タル者ハ其乙種ハ金三圓以上拾圓以下甲種ハ五圓以上貳拾圓以下ノ金額ヲ賞與スルコトヲ得

第四項 前數項ノ外其功勞ノ前數項ニ比シ相下ラサルモノハ其適度ニ應シ賞與スルコトヲ得

第五項 前數項ニ該當スルモノト雖モ事ノ最モ輕キモノ又ハ功勞ノ最モ尠キモノ

若クハ金員ヲ賞與シ難キ事情アルモノハ賞詞ヲ與フルコトヲ得

第四條 水火災其他犯罪ニ關セサル功勞ハ乙種ノ賞ヲ給與スヘシ但其功勞ノ大ナル者ハ甲種ノ賞ヲ與フルコトヲ得

第五條 罪犯判決前ニ逃亡又ハ死去シタル場合若クハ賞與スヘキ事件ノ完結セサル前ト雖モ其疑ナキモノハ賞與ヲ施行スルコトヲ得

第六條 賞與ハ何等ノ場合ヲ問ハス一旦施行シタル後ハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

第七條 本則ニ定メタル賞與ノ金額ハ一事件ノ賞トス但第三條第一項ノ場合ハ一犯罪ニ付テノ賞トス

數事件數罪犯ニテ功勞者一人ナルトキハ數事件數罪犯ノ賞ヲ各別ニ給與スヘシ一事件若クハ數事件一名若クハ數名ノ罪犯ニシテ功勞者數人ナルトキハ之ヲ賞與スル

ニハ一事件若クハ一罪犯ニ對スル金額又ハ數事件若クハ數罪犯ニ對スル金額適宜功勞者ノ人員ニ配當給與スヘシ

第八條 功勞者賞與執行前ニ死去シタルトキハ賞與ノ金額ハ親屬ノ最近ナル者ニ給

ス若シ親屬ナキトキハ戶長ニ交付シテ祭祀料ニ充用セシムヘシ

其所在不分明ナルトキ亦同シ但親屬ナキモノニシテ三十六ヶ月ヲ經過シタルトキハ賞與ノ施行セス

第九條 公權ヲ剝奪セラレタル者ニハ賞ヲ與ヘス

第十條 自己又ハ親屬ノ利害ニ關スル事件ニ就テハ賞ヲ與ヘス但其功勞ノ特ニ著明

ニシテ一般ニ公益ヲ及ホスモノハ時宜ニヨリ之ヲ賞與スルコトヲ得其被害者ト利

害ヲ共ニスル者亦同シ

第十一條 罪犯其親屬ニ係ルトキハ總テ賞與スルコトヲ得ス

第十二條 第八條第十條第十一條ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條

ニ記載シタル者ヲ云フ

第十三條 巡查ニシテ左ノ各項ニ該當スル者ハ本則ニ定ムル賞與ノ區別ニ從ヒ甲種以上及特別賞ヲ與フルコトヲ得

第一項 第三條ニ掲グル罪犯ヲ捜査シ又ハ捕獲シ其功勞著シキ者

第二項 前項ニ該當セスト雖モ其功勞ノ前項ニ比シ相下ラサル者

第三項 第四條ニ掲グル事項及流行病ニ付其功勞著シキ者

第四項 自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救援シタル者

第十四條 巡查罪犯ヲ捕獲シ功勞アリト雖モ未タ拘留セサル前ニ逃走セシメタルセノハ賞與スルコトヲ得ス

護送中逃走セシメ其護送者ニ於テ捕獲シタルトキ亦同シ

第十五條 巡查私事旅行中其管内ニ於テ賞與スヘキ功勞アリタルトキハ其職務上ニ於テ爲シタルモノト同一ノ賞ヲ與フヘシ

第十六條 巡查ニシテ一般人民共ニ人命ヲ救援シタルトキハ賞與スヘキ金額ヲ救援者ノ全數ニ分賦シ其巡查ニ屬スル金額ヲ賞與スヘシ

第十七條 本則第七條乃至第十一條ハ巡查ノ賞與ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第十八條 巡查ノ賞與ハ其所屬廳ニ於テ施行シ其他ハ左ノ區別ニヨリ各管轄廳 東京府ハ警視ニ於テ施行スヘシ

第一項 訴ヲ受ケタル地ノ管轄廳

第二項 罪犯ヲ最初ニ受取タル地ノ管轄廳

第三項 犯罪事件ニ屬セサルモノハ其事件ノ生シタル地ノ管轄廳

第十九條 賞與スヘキ事件若クハ功勞者ノ數官廳ニ牽連スル者ハ互ニ協議ヲ盡シ其金額ヲ定メ之ヲ差分シ又ハ功勞ノ多少ニ依リ適宜分割シ各其廳ニ於テ賞與スヘシ

第二十條 警部其他警察事務ニ從事スルモノニシテ功勞アルトキハ巡查ノ例ニ準シ賞與スルコトヲ得

第二十一條 特別賞與ヲ行フタルトキハ其都度狀ヲ具シ報告スヘシ (明治廿二年内務省訓令第二號ヲ以テ改正)

第二十二條 賞與費額ハ各其所屬ノ經費ヲ以テ支辨スヘシ (内務省甲第一六號 (二十一年十月十二日) 警察賞與規則說明)

閣令第十七號ヲ以テ明治七年太政官達第六十八號外三號ヲ廢セラレタルニ付茲ニ本則ヲ設ケテ警察上功勞アルモノヲ褒賞スルノ規程ヲ定ム而シテ其警察賞與規則ト稱スル所以ハ何人ヲ問ハス苟モ警察上功勞アルモノハ盡ク此規則ノ範圍ニ於テ賞與スルコトヲ明ニスルニアリ

第二條 說明

賞與ヲ分チテ三種トシタル所以ハ其事ノ輕重ニヨリテ其功勞ノ大小難易ヲ生シ自カラ同一ナラサルヲ以テ此段界ヲ必要トス特別賞ハ從前殊功アルモノニ對シ經伺ノ上許可ヲ得テ施行シタルモノ、如キ援群ノ功勞アリテ金額拾五圓以下ヲ以テ賞與スルトキハ未タ其功勞ニ酬ルニ足ラサルモノニ限り之ヲ給ス

甲種

乙種

特別賞 說明

通常賞金ヲ拾五圓以下トシタルハ從前ノ五圓以下ニ比スレバ甚多額ナルカ如ク見ユレトモ大害ヲ除却シ擾亂ヲ防止スル等實際ニ於テ利益スル所復甚大ナルモノアリテ強テ金額ノ多寡ヲ論スヘカラス且從來賞金額ノ寡少ナルヨリ未タ充分ニ實効

ヲ收ムル能ハサルノ感アリ是本則ニ於テ其金額ヲ增多シタル所以ナリ
本項賞金額ハ最高ト最低トヲ示シタルモノニシテ此範圍ヲ脱スルコトヲ得サルハ
勿論ナレトモ事實ノ輕重ニ由リ其功勞ヲ審定シ該範圍内ニ於テ斟酌考量シテ賞金額
ヲ定ムルハ適宜トス然レトモ若シ賞與ニシテ偏輕偏重アルトキハ褒賞ノ旨趣ヲ失
フ者ナルヲ以テ豫メ其程度ヲ定メ輕重宜シキヲ得同一ノ功勞ニシテ甲乙其賞ヲ異
ニスルカ如キコトナキヲ要ス

特別賞ハ獨金額ノ多キノミナラス其援群ノ功勞ナルコトヲ表明スルモノナルガ故
ニ之ヲ賞スルニ當テハ慎重鄭重ニ之ヲ審議シ決シテ輕桃ニ失スルコトナキヲ要メ
第三條 說明

第一項 說明

本條ハ警察事務ニ從事セサルモノニ賞與スヘキコトヲ示スカ故ニ此項ニ於テハ特
ニ現行ノ場合ノミヲ規定ス又容易ニ捕獲スルヲ得セシメタル者ト云フハ自ラ手ヲ
下シテ捕獲スルヲ得セシメタル者ト云フハ自ラ手ヲ下シテ捕獲セサルモ巡查等ノ
罪犯ヲ捕獲スルニ當リ之ヲ援助シ或ハ搜索ニ助力スル等都テ其者ノ働キニ依テ容
易ニ捕獲セシメタル者モ猶本項ノ種類ニ從テ之ヲ賞與スルコトヲ定ム

甲種

乙種 說明

罪犯ノ種類未タ必スシモ此數者ニ止マラス茲ニハ單ニ刑法上罪質ノ最モ著シキモ
ノヲ舉テ其證據ヲ示スニ外ナラサルナク但皇室ニ對スル罪犯ノ如キ極ノテ重要ノ
モノアレトモ本項ニ掲出スルヲ要セサルヲ以テ特ニ節略セリ

第二項 說明

罪犯ノ所在ヲ密告シ因テ其捕獲ヲ容易ナラシメ又ハ罪犯ノ誰タルヲ知ラサルニ之

ヲ分明ニ訴出テ因テ之ヲ捕獲スルコトヲ得ルハ實際其例甚夥ラス然ルニ從前ハ只
僅ニ重罪ニ對シ金一圓輕罪ニ對シ金五十錢ヲ以テ賞與スルノミナリシ故ニ功大ニ
シテ賞少ナキノ感アリ歐米各國ノ罪犯ヲ搜索スルヤ其輕重ニ從テ多少ノ懸賞ヲ廣
告スルアリ是レ局外者ニ昭示シテ罪犯ノ所在ヲ知ルノ捷路ナリ本項モ稍之ニ類ス
是罪犯捕獲者ニ賞スルモノト同額ナル所以ナリ

第三項 說明

本項賞金額ヲ增多スル所以ハ拒捕ノ賊ヲ捕獲スルハ通常捕獲ヨリ困難ナルコト明
カナルヲ以テ其賞金モ亦多カラサル可ラス又未遂犯ヲ訴出ルハ既遂ノモノニ比ス
ルニ社會ニ對スル功勞實ニ大ナリト謂フヘシ其功勞大ナリトスレハ從テ賞金モ多
カラサルヲ得サルハ勿論ナリト是レ特ニ本項ヲ掲出スル所以ナリ

第四項 說明

犯罪事件ニ關スル功勞ノ種類ハ本條第一項以下ニ限ルコトヲ得サルヘシ故ニ其罪
質ノ相均シキ或ハ功勞ノ同様ナルモノ等皆前各項ノ種類ニ準據シテ之ニ賞與スル
コトヲ得セシムルナリ

第五項 說明

苟モ功勞アルモノニハ第二條ノ賞與金ヲ與フヘキハ勿論ナレトモ比較上稍劣ルモ
ノアリテ此金額ヲ賞與シ難キコトアリ或ハ功勞者ノ身分ニ對シ金額ヲ與ヘ難キ事
情アルモノアリ是等ノ如キモ尙警察上功勞アル者タルヲ免レス故ニ賞詞ヲ與ヘテ
其功勞ヲ表明スルナリ

第四條 說明

本條ハ第三條犯罪事件ニ關スル功勞ト區別シテ其犯罪ニ關セサルモノヲ明ニス而
シテ其賞金額ノ少ナキハ第三條第一項ニ掲クル罪犯ノ如キ社會ノ公害ヲ除クモノ

ト自テ其功ヲ異ニスルヲ以テ五圓以下ノ賞ニテ充分ナリトス然レトモ異常ノ場合ニ茲ミ異常ノ働ヲ爲シタル者ニハ自テ其賞額ヲ多カラシメサルヲ得ス是レ但書ヲ以テ五圓以上ノ賞金ヲ給與シ得ルコトヲ示ス所以ナリ

第五條 說明

事件ノ完結セサル前ト云フハ水火災等ニ際シ未タ其事ノ整理完結セサル前又ハ犯罪事件ノ未タ公判ヲ經サル前ニ於ケルモ其事實及功勞ノ疑ナクシテ相當賞與ヲ行フヘキモノニハ之ヲ褒賞シ徒ニ賞與ノ時機ヲ失シテ受賞者ヲ感戴セシムルノ功ヲ薄カラシメサランコトヲ要ス

第六條 說明

本條ノ精神ハ賞與ヲ明確ナラシムルニ在リ故ニ一旦與ヘタル褒賞ニシテ後日其金額ノ多寡又ハ違賞ナルコトヲ發見スルモ之ヲ更正又ハ取返シヲ爲スヘカザルモノトス

第七條 說明

本條ハ賞與授受ノ際其疑ナカラシムル爲メ之ヲ規定ス譬ヘハ爰ニ罪犯アリ之ヲ密告シ官吏捕獲スルニ際シ助力シテ捕獲ヲ容易ナラシメタル者ハ第三條第一項並第二項ノ兩賞ヲ與ヘ又ハ數罪犯ヲ一時ニ密告シタル者ハ罪犯ノ數ニ係ハラス單ニ第二項ノ賞一箇ノミヲ與フルカ如シ又但書ノ旨趣ハ罪犯捕獲ハ現ニ之ヲ捕獲シ得タル數ニ應シ一箇毎ニ規定ノ賞金ヲ給與スヘキコトヲ明ニスルナリ

次項 說明

譬ヘハ一人ニテ窃盜犯三人強盜犯一人殺人犯二人放火犯三人ヲ捕獲シ且火災防禦消止ニ盡力シテ功勞アル者アルトキノ如キハ乙種賞四箇甲種賞六箇ヲ給與スヘキモノトス

第八條 說明

功勞ハ死去共ニ消滅セサルモノナリ故ニ功勞者未タ賞與ヲ受ケサル前ニ於テ死去スルト雖モ必ス之ニ賞與スヘキヲ規定ス而シテ之ヲ給スルニ遺族ト云ハスシテ親族ト云フ所以ハ間々遺族ナキ者アルヲ以テ範圍ノ汎カラシムルコトヲ欲シテナリ又三十六ヶ月ヲ經テ賞與ヲ施行セサルハ他ナシ之ヲ搜索シテ三年間モ所在ノ知レサル者ハ最早受賞權ヲ拋棄シタルモノトナシ際限ナク之ヲ存留セサルモノトス

第十條 說明

自己又ハ其親屬ノ利害ニ關スル事件ハ當然爲スヘキ事ヲ爲シタルモノニシテ敢テ功勞トナスニ足ラス譬ヘハ盜賊ノ害ノ如キ自家又ハ親屬ノ性命財產ヲ保護スルニ依テ賊ヲ捕獲シタル等全ク公害ヲ除クノ念慮ニ基因シテ爲シタルモノニ非サル者ノ如キ是ナリ然レトモ其跡ニ就テ看察スレハ自家ノ利害ニ切ナルカ爲ノミニアラズ公害ヲ除クニ急ナルヨリ非常ニ盡力シタルモノ、如キハ時宜ニヨリ相當ノ賞ヲ與フルコトヲ得又其被害者ト利害ヲ共ニスル者ト云フハ雇人ノ主人ニ於ケル宿屋營業者ノ宿泊人ニ於ケルカ如キモノヲ指サス

第十一條 說明

犯罪人ヲ密告シ又ハ捕獲シタルトキ其罪犯若シ密告者又ハ捕獲者ノ親屬ニ係ルトキハ其功勞ノ著シキモノト雖モ之ヲ賞與セサルモノトス

第十三條 說明

本條ヲ特掲スル所以ハ巡查ハ元ト職務上爲スヘキノ事ニシテ其功勞必スシモ賞與スルニ及ハサルモノ、如シ然レトモ身命ヲ顧ミス危險ヲ踏ミタル者ナルヲ以テ其功ノ賞スヘキモノナシトスヘカラス唯巡查ハ一般人民ニ比シ功勞ノ著明ナルニ於

テ初メテ賞與スル等自ラ異ナル所ナカルヘカラス故ニ爰ニ之ヲ特掲シテ一般人民ト殊別ナルヲ明ニス

第一項 説明

本項ハ罪犯ヲ捕獲シタルトキト雖トモ其功勞ノ著明ナルモノニアラサルヨリハ唯捕獲シタル廉ノミヲ以テ賞與セサルコトヲ明ニス其捜査ノ二字ヲ挿入シタルハ第三條ハ單ニ捕獲シ又ハ捕獲ヲ容易ナラシメタル者ニ對スル事項ノミニシテ罪犯ヲ捜査スルコトハ特ニ巡查ニ屬スルヲ以テナリ

第二項 説明

本項ハ第三條ノ第四項ト全様ナリ

第三項 説明

本項ハ犯罪事件ニ關セサル事項及流行病豫防檢疫其他該病ニ關シ職務ヲ行フタルトキ特ニ功勞ノ著明ナル者ニ賞與スルコトヲ規定スルモノナリ一般人民ノ條項ニ於テ流行病ノ事ナキハ其之ニ關係スルコトナキヲ以テナリ

第四項 説明

本項ハ一般人民ニ在テハ褒賞條例ノ範圍ニ入ルヘキモノニシテ官吏ハ褒賞條例ニ據ルコトヲ得サルヲ以テ爰ニ掲出スル所以ナリ

第十四條 説明

巡查ニ於テ罪犯ヲ捕獲シタルト雖トモ未タ警察署分署ニ交付セス又ハ留置場へ拘留セサル前ニ自ラ逃走セシメタルトキハ捕獲ノ功ヲ失フモノトス故ニ之ヲ賞セサルナリ尤モ再ヒ之ヲ捕獲シタルトキハ第十三條第一項ニ據テ賞與スルハ勿論ナリ

第十五條 説明

私事旅行トハ養病若クハ歸省若クハ賜暇中旅行等ノ如キ職務ヲ帶ヒサル場合ヲ指

稱ス此場合ト雖モ其管内即チ其所屬署ノ區畫管内ニ於テ功勞アリタルキハ尙ホ職務ヲ帶ヒタルトキト全ク第十二條ノ例ニ據テ賞與スルコトヲ明ニス故ニ其區畫管外ニ於テハ無論一般人民ノ例ニ據ル

第十六條 説明

本條ハ第十三條第四項ノ賞與ヲ給與スル場名ニ於テ其分賦方ヲ定ムルナリ譬ヘハ爰ニ一人ノ溺水者アリ巡查二人及人民一人ニテ之ヲ救援シタル比賞金ヲ三圓トスレハ一人壹圓ニ相當ス故ニ巡查ニ屬スル二圓ヲ以テ之ヲ賞與スルカ如シ

第十八條

第一項

第二項

第三項 説明

第一項ハ人民ヨリ罪犯ヲ訴出タルトキ又第二項ハ人民ニ於テ罪犯ヲ捕獲シ司法警察官又ハ巡查若クハ憲兵等ニ引渡シタルトキ其犯罪地ノ何タルヲ問ハス現ニ之ヲ受取リタル地ノ地方廳ニ於テ賞與シ第三項ハ現ニ事件ノ生シタル地ノ地方廳ニ於テ賞與スヘキコトヲ示ス

第二十條 説明

警備巡查ノ外警察事務ニ從事スル者ト云フハ水上警察ノ水夫刑事專員ノ如キモノヲ指ス故ニ水夫ニシテ陸上ニ於ケル功勞刑事事務履ニシテ人命ヲ救援スルガ如キハ一般人民ノ例ニ據ルコト勿論ナリトス

第二十二條 説明

其所屬ノ經費ト云フハ警部補以上ニ在テハ廳府縣費中賞與ヨリ巡查及警察雇ニ在テハ警察費ヨリ一般人民ニ在テハ廳府縣費中賞賜金ヨリ賞金ヲ支出スヘキヲ云フ

ナリ

○内務訓令第一號 二十二年一月十一日(應府縣 集治監 假留監)
看守押丁ニシテ左ノ各項ニ該當スル者ハ明治二十一年十月内務省令第二十一號警察
賞與規則ニ據リ功勞ノ適度ニ應シ金拾五圓以下ヲ賞與スヘシ

一反獄ヲ鎮制スルニ當テ其功勞著シキ者

二自己ノ監守ニ非ル在監人ニシテ逃走スル者ヲ捕獲シ其功勞著シキ者

三監獄内ノ水火風震及ヒ流行病ニ付其功勞著シキ者

四自己ノ危ニテ顧ミス在監人ノ性命ヲ救援シタル者

○本署親發第二〇〇號 二十三年十二月十一日(警務課長ヨリ 各署長ヘ)

警察賞與上申方之儀ニ付通牒

警察賞與上申方ノ儀ハ豫審終結又ハ裁判確定ヲ待テ上申相成候向モ有之候處古ニテ
ハ大ニ時日ヲ遷延シ往々賞ノ時期ヲ失シ候ニ付爾來右申方ノ儀ハ罪犯ヲ裁判所
ヘ送致シタル節其功勞ノ相當賞與セラルベキ見込ノモノハ速ニ上申相成候様致度命
ニ依リ此段及御前候也

追テ上申書ニハ何年何月日何裁判所ヘ交付ノ旨御記入相成度此段申添候也

○内務訓令第二一號 二十二年五月二十五日(應府縣 東京府 巡查監守 精勤證書授與規則左ノ通相定ム)

巡查監守精勤證書授與規則

第一條 精勤證書ハ巡查看守ノ精勤ヲ證シ其名譽ヲ表スルモノトス

第二條 精勤證書ハ警察署長若クハ出獄ノ具狀ニ依リ應府縣長官審査ノ上之ヲ授與
スルモノトス

第三條 精勤證書ハ左ノ諸項ニ適合スルモノニ授與スヘシ

一行狀方正

二勤務勉勵

三事務熟達

四滿三年奉職

第四條 第三條ニ適合ノモノト雖モ左ノ事項ニ該當スルモノハ精勤證書ヲ授與スル
コトヲ得ス

一官吏服勞規律ニ違背シ若クハ巡查懲罰例ニ依リ月俸一箇月百分ノ二十以上ノ罰
金ニ科セラレタルモノ及月俸百分ノ二十以下ノ罰金ト雖モ一年二回以上ニ及ブ
モノ

二奉職後刑法其他ノ法律規則ニ依リ處分ヲ受ケタルモノ

第五條 精勤證書ヲ所持スルモノニシテ退職後再任ヲ求ムルトキハ試験ヲ爲サスシ
テ採用スルコトヲ得

但年齡制限及體格試験ハ此限ニアラス

第六條 水火災若クハ盜難等ニ罹リ精勤證書ヲ失シタルトキハ再ヒ之ヲ授與スヘシ

第七條 請勤證書ヲ受ケタル後其行狀修ラス若クハ第四條ノ事項ニ該當スルモノア
ルトキハ其證書ヲ沒收スルコトアルヘシ

第八條 精勤證書ハ左ノ雖形ニ依リ調製スヘシ

用紙鳥ノ子紙

「」ノ中ハ孰モ朱書

六寸

第 號

「巡查 精勤證書
看守」
「廳府縣 巡查 氏名」

右行狀方正ニシテ勤務勉勵

事務ニ熟達ス因テ此證ヲ付

與スルモノナリ

年月日

「官位勳爵氏名印」

六寸

壹尺

○警訓第五一號 二十三年九月三日(警部長ヨリ各署へ)
巡查看守精勤證書授與並ニ沒收ノ義ニ付別紙訓第五九八號ノ通り内務大臣ヨリ訓令
相成候條此旨心得ラルヘシ

訓第五九八號 二十二年八月二十四日
巡查看守 勳證書授與規則第四條ニ該當シ過誤生錯ニ依リ處分ヲ受ケタル後勳績
精勤セシモノニハ其處分翌ヨリ起算シ全則第三條ニ適合スルトキハ該證書ヲ授
與スルコトアルヘシ

巡查懲罰例ニヨリ免職シ若クハ在職中行狀修ラスシテ体面ヲ汚シ(巡查懲罰例第
二條ニ該當セサルモノ)又ハ退職後ト雖モ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルモノハ請
勳證書ヲ沒收スヘシ
右訓令ス

○警訓第五二號 二十二年九月三日(警部長ヨリ各署へ)
巡查看守精勤證書授與ニ關スル年期起算方ノ義ニ付別紙警甲第二八號ノ通り内務書
記官ヨリ通牒有之候條此旨心得ラルヘシ
警甲第二八號 二十二年八月二十四日内務
本年五月二十五日當署訓令第二十一號巡查看守精勤證書授與規則第三條第三項ノ
年期ハ該發布以前ニ溯り起算ス又巡查ヨリ看守ニ看守ヨリ巡查ニ轉シ前後其年月
ヲ通算シ滿三年ニ及フモ同項ヲ適用スヘカラサル義ニ有之候條此旨及御通牒候也

○警訓令第五三號 二十二年九月三日(警部長ヨリ各署へ)
巡查 勳證書授書 與ノ具狀ニハ必ス履歷ヲ添ヘ尙ホ左ノ事項記載スヘキ義ト必得
ラルヘシ

- 一 巡查俸職中ノ賞罰分掌
- 一 滿三年勳績中欠勳皆罰及休暇日數ノ年別
- 一 内外勤其他執行事務ニ熟達シタル要項
- 一 居常行狀ノ方正及一般信否ノ大要

○内務訓第五九八號 二十二年八月廿四日(内務大臣ヨリ知事ヘ)

巡查看守精勤證書授與並ニ沒收ノ件左ノ通り施行セラルヘシ

巡查看守精勤證書授與規則第四條ニ該當シ過誤失錯ニヨリ處分ヲ受ケタルノ者勤續精勤センモノニハ其處分翌月ヨリ起算シ全則第三條ニ適合ムルトキニ該證書ヲ授與スルコトアルヘシ

巡查懲罰例ニヨリ免職シ若クハ在職中行狀修マラスシテ休面ヲ汗シ(巡查懲罰例當セサ)又ハ退職后ト雖モ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルモノハ精勤證書ヲ沒收スルヘシ

右訓令ス

○警發第四五號 二十二年八月二十六日(警保局長ヨリ知事ヘ)

本年内務省訓令第二十一號巡查看守精勤證書授與規則第七條ノ趣意ハ職務上過誤失錯等ニ依リ罰金以下ノ處分ヲ受ケタルモノニ對シテハ精勤證書ヲ沒收セス全ク本月廿四日訓第五九八号末項ノ通りニ在之候條御心得ノ爲メ此段申進候也

○布告第六十三號 明治十四年十二月七日

褒章條數

第一條 凡ソ自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者又ハ德行卓絶ナル者(孝子順孫節婦義僕ノ類)又ハ公衆ノ利益ヲ興シ成績著名ナル者(疏河築隄修路懇田ノ業或ハナ表彰スル爲メ左ノ三種ノ褒章ヲ定ム)

紅綬褒章

右自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者ニ賜フモノトス

綠綬褒章

右德行卓絶ナル者ニ賜フモノトス

藍綬褒章

右公衆ノ利益ヲ興シ成績著名ナルモノニ賜フモノトス

第二條 奇特ノ實行アリト雖モ褒章ヲ賜フヘキ場合ニ至ラサルモノハ褒狀ヲ與フコトアルヘシ

第三條 己ニ褒章ヲ賜ハリタルモノ再度以上同様ノ實行アリテ褒章賜フヘキトキハ其都度飾版一箇ヲ賜與シ其章ノ綬ニ附加セシメ以テ標識トス

第四條 褒章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ及ヒ徽號トナスヲ得然レトモ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ之ヲ沒收シ其未タ授與セサル前同上ノ刑ニ處セラレタルモノニハ之ヲ授與セス

○太政官達第百三號(明治十四年十二月七日)

今般第六十三號ヲ以テ褒章條例布告候ニ付取扱手續左ノ通相定候條此旨相達候事

但明治八年七月第二十一號達ハ右條例施行ノ日ヨリ廢止候事

褒章條例取扱手續

第一條 凡ソ褒章ヲ賜フヘキ者アルトキハ其管轄長官ヨリ内務卿又ハ農商務卿ニ具申シ内務卿又ハ農商務卿ハ其當否ヲ審査スヘシ

但官吏職務上ニ於テ人命ヲ救助シ又ハ公益ヲ興シタルハ褒賞ヲ賜フノ限リニアラス

第二條 内務卿又ハ農商務卿ニ於テ褒章ヲ賜フヘキモノト思量スルトキハ之ヲ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ賞勳局總裁ハ其申牒ニ據リ勅奏任官拜ニ從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニハ褒章直授シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商務卿ヲ經由シ其管轄長官ヲシテ之ヲ傳達セシムヘシ

但外國人ニ危難救助ノ褒章ヲ賜ヘキハ外務卿ヨリ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ授

與ノキモ亦同卿ニ經由シテ之ヲ傳達セシムヘシ其公私備ニ係ル者ハ本條ニ同シ
第三條 察狀ハ管轄長官ヨリ與フルモノトス然レモ勅奏任官并ニ從六位以上及ヒ勅
六等以上ノ者及華族ノ戶主ハ内務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ太政官ニ上申シ太政官ニ
於テ之ヲ賜フヘシ

○閣令第十九號 (明治十九年七月一日)

勳章年金褫奪及停止取扱手續

第一條 勳章ヲ有スル者左ノ項目ニ觸ル、トキハ榮譽ヲ汚辱シタル者トス

第一項 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者

但輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタルモノハ其所犯ノ情狀ニヨル

第二項 賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者

第三項 懲戒例及免黜條例ニヨリ官セラレタル者

第四項 素行修ムラス帶勳者タルノ面目ヲ汚ス者

第二條 第一條第一項ニ觸ル、者輕罪ヲ犯シタル者ナルトキハ裁判確定ノ後裁判管

轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣ヲ經由シテ宣告書寫ヲ添ヘ其旨ヲ賞勳局總裁

ヘ具申スヘシ其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ普通刑法第三十一條第三十二條陸軍

刑法第二十八條第二十九條海軍刑法第十七條ニ依リ處分ス

第三條 第一條第二項第三項第四項ニ觸ル、者アルトキハ所轄長官又ハ地方官ヨリ

其情狀ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

第四條 賞勳局總裁ハ其具申ヲ審查シ重禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ハ直ニ上奏シ其

輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタル者及ヒ第一條第二項第三項第四項ニ觸ル、者ハ議

定官ノ會議ニ於テ其褫奪ノ當否ヲ論定シ褫奪スヘキ者ハ奏請ス

第五條 褫奪ノ裁可アリタルトキハ賞勳局總裁ハ褫奪狀ヲ作り褫奪ノ具申ヲ爲シタ

ル長官ヲ經由シテ本人ヘ傳達セシム

第六條 勳位進級セシ者ナルトキハ前級ノ勳章勳記ヲモ褫奪スヘシ年金票モ亦同シ

第七條 褫奪シタル勳章勳記年金票ハ褫奪ヲ行ヒタル官廳ヨリ賞勳局ヘ送納スヘシ

但其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ニ係ルトキハ其宣告書寫ヲ添フヘシ

第八條 勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留セラレタルトキハ其年月日及事由

ヲ裁判管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣ヲ經由シテ具申スヘシ

但公訴權消滅シタルトキ若クニ放免ノ言渡ヲ爲シタルトキハ亦其事狀ヲ詳記シ

テ之ヲ申告スヘシ

第九條 重罪輕罪ヲ犯シ未タ其訴ヲ受ケスト雖モ現ニ拘留セラレタルトキハ檢察官

ヨリ前條ノ手續ニ從ヒ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

第十條 外國勳章佩用免許狀ヲ沒收スルトキモ亦總テ此手續ニ準據スヘシ

○第十九章 任免

○內務訓令第五八九號 (十九年八月十四日)

巡查採用試験ノ儀ニ付別紙標準ヲ示ス午後此標準ニ則リ志願者多寡土地ノ狀況ニ

應シ適宜其程度ヲ定メラルヘシ

右訓令ス

巡查採用ニ關スル標準

一 巡查ハ必ス試験ノ上採用スヘキモノトス

二 巡查ハ品行方正ニシテ左之諸件ニ適合スルモノタルヘシ

一年齡二十三年以上三十五年以下ニシテ徵兵ニ相當セサルモノ

- 二身幹五尺二寸以上ノ者
- 三幹格檢査例ニ適合スルモノ
- 三幹格檢査例ニ適合スル者
- 四技藝甲種檢査例ニ適合スル者
- 三土地ノ狀況ニヨリ前項ノ諸件ニ適合スル人員ヲ得ル能ハサルトキハ適宜斟酌スルヲ得ルト雖モ左ノ程度ヨリ下スコトヲ得ス但シ休格ハ之ヲ斟酌スルノ限ニアラス
- 一年齡二十年以上四十五年以下ニシテ徵兵相當セサル者
- 二身幹五尺以上ノ者
- 三技藝乙種檢査例ニ適合スル者
- 四前二項ニ適合スト雖モ左ノ諸件ニ抵觸スルモノハ採用スヘカラス
 - 一重罪ノ刑ニ處セラレシ又ハ輕罪重禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ全上ノ刑ニ處セラルヘキ罪ヲ犯シ單ニ監視ニ附セラレタル者及ヒ輕罪輕禁錮ニ處セラレ滿五年ヲ經過セサル者但舊法ニ依リ施體ノ刑ニ處セラレタル者ハ總テ本文ノ權衡ニ準ス
 - 二賭博犯處分ニ依リ懲罰ニ處セラレタル者
 - 三巡査懲罰例又官吏懲戒ニ依リ免職セラレ若クハ故ナク巡査ヲ辭職シ二年以上ヲ經過セサル者
 - 四身分不相應ノ負債アル者又ハ身代限りノ處分ヲ受ケ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者
 - 五酒遊アル者又ハ暴行ノ避アル者

巡査體格檢査例
 一休格ハ左ノ諸項ニ適合スルヲ以テ合格トス

- 一體質善良ノ者即チ左ニ記載スル等ノ欠所ナキ者
 - 四肢完具セサル者但執筆把握ニ差支サル指ノ萎小彎屈強直等ノ類ハ此限りニアラス
 - 胸腔機關及腹内臟器若クハ皮膚疾病較著ノ疾病アル者但較著ノ疾病ニアラサルモ全身諸機關ノ機能減衰ノ者亦全シ
 - 服裝又ハ運動ニ不便ナル者
 - 贅生物畸形等容貌醜惡ナル者
 - 二胸囲大約身長ノ半ニ等シキ呼吸縮長ノ差一寸以上ノモノ
 - 三兩眼共視力三分ノ二以上
 - 四辨色力完全ノ者
 - 五聽力六尺ノ距離ニ於テ低語ヲ聽識シ得ル者
 - 六言語應答明瞭ニシテ十分ノ發聲ニ堪ユル者
 - 七精神完全ナル者即チ精神病神經病癲癩狂痴狀及舞蹈病癩癩等ノ疾病ナキ者
- 要檢査例舉寫

巡査技藝檢査例	
甲種	乙種
法律 刑治罪法警察法規等ノ大意ニ通スル者	警察法規警務要書ノ類ヲ誦讀シ其意義ヲ解シ得ル者
歴史 本邦歴史及地理ノ大畧ニ通スル者	
地理 論文ヲ作り得ル者但文休假名交リ	普通ノ往復文ヲ作り得ル者
作文 論文ヲ作り得ル者但文休假名交リ	加減若クハ容易ナル乗除ヲ爲シ得ル者
算術 正比例轉比例ヲ爲シ得ル者	字樣過拙通讀シ雖キニ至ラサル者
寫字 楷書行書ヲ作り得ル者	

○本縣告示第三九號 二十二年六月廿五日
 明治十九年九月告示第十二號巡查志願手續ヲ廢シ更ニ巡查採用規則左之通り之ヲ定ム
 巡查採用規則

第一條 巡查ハ必ス試験合格ノ上採用スルモノトス

第二條 試験合格ノ者ハ巡查受業生トシテ二ヶ月間巡查教習所科程ヲ練習セシメ卒業ノ后實務ニ服セシム

第三條 巡查教習所科程卒業シタル后ト雖モ巡查ニ缺員アラサルトキハ歸郷シテ待命セシム
 但待命中ハ俸給ヲ給與セス

第四條 前條待命中巡查ニ必要ナル品位ヲ失ヒタル者ト認ムルトキハ巡查ヲ為スルコトアルヘシ

第五條 巡查ハ志操確實而行方正ニシテ左ノ諸件ニ適合スルモノヲ以テ合格トス
 一 滿五年間勤務ニ差支ナキモノ
 二 年齡滿二十年以上四十年以下ニシテ徵兵ニ相當セサルモノ
 三 身軀曲尺五尺以上ノモノ
 四 體質強壯ニシテ職務上害アル疾病ナキモノ
 五 天然痘又ハ八種痘濟ノモノ
 六 甲種又ハ乙種ノ技能ヲ有スルモノ

科目	甲種	乙種
法律規則	刑法治罪法警察法規ノ類	乙種警察法規警務要書ノ類
歴史地理	日本外史十八史略兵與地理小史ノ類	內國史客日本地誌客ノ類
文論	文論ノ類、但片假名交リ	普通往復文ノ類
算術	算術ノ類、但片假名交リ	加減乘除ノ類
簿記	簿記ノ類	簿記ノ類
記簿	記簿ノ類	記簿ノ類
答口述	答口述ノ類	答口述ノ類

第六條 前條合格ノ者ト雖モ左ノ諸件ニ抵觸スル者ハ採用セス

一 重罪ノ刑ニ處セラレ又ハ輕罪重禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ同上ノ刑ニ處セラレヘキ罪ヲ犯シ單ニ監視ニ附セラレタルモノ及輕罪輕禁錮ノ刑ニ處セラレ滿期後五年ヲ經過セサルモノ
 但舊法ニ依リ施体ノ刑ニ處セラレタルモノハ總テ本文ノ權衡ニ準ス

二 賭博犯處分規則ニ依リ懲罰ニ處セラレタルモノ

三 巡查懲罰例又ハ官吏懲戒例ニ依リ若クハ故ナク巡查ヲ辭職シ二年以上ヲ經過セサルモノ

四 身分不相應ノ負債アルモノ又ハ身代限りノ處分ヲ受ケ辨償ノ義務ヲ終ヘサルモノ

五 酒癖アル者又ハ暴行ノ癖アルモノ

第七條 巡查採用ヲ願フ者ハ書式ニ倣ヒ願書ヲ作り身元引受人連署ノ上誓約書履歷書ヲ添ヘ警察本部ヘ差出スヘシ

第八條 身元引受人ハ本縣居住ニシテ丁年以上ノ男子身元健ナル者壹名トス

第九條 身元引受人ニ於テ轉住又ハ其他ノ事故ニ依リ異動アル時ハ更ニ届出ヘシ書式

甲種又 巡查採用願 (料紙半紙ニテ)
 乙種 巡查採用願 (普通ヲ要ス)
 天然痘又 八種痘濟
 族籍職業 (戸主又ハ誰ノ幾男子ナル)
 コトヲ記載スヘシ
 氏 名
 生 年 月

私義巡查奉職仕度候ニ付御試驗ノ上御採用被成下度若シ不都合ノ所爲有之節ハ身元引受人ニ於テ一切負擔可仕候仍テ連署ノ上誓約書履歷書相添此段奉願依也

年月日

現住所 願人 氏名 印

族籍現住所職業 氏名 印

身元引受人 氏名 印

生年月

宮崎縣知事某殿

誓約書(料紙半紙ニテ)

(一通ヲ要ス)

一 法度規則ヲ遵守シ上官ノ命令ヲ遵守スヘク決シテ職權外ノ事ヲ論議致間敷候事

一 正當ノ事故ナクシテ奉職滿五年以内ニ辭職致間敷候事

一 職務上文武ノ講習可致候事

一 持區内ノ人民ニ金借シ又ハ物ヲ買ヒ其價ヲ借ル等ノ義決シテ致間敷候事

一 機密ノ筋ハ勿論職務ニ係リタル事ハ總テ他言致間敷候事

一 酒色ニ耽リ警察ノ体面ヲ汚シ又ハ卑怯ノ舉動致間敷候事

右謹而遵守可致候也

年月日

族籍

氏名 印

宮崎縣知事某殿

履歷書(料紙半紙ニテ)

(一通ヲ要ス)

族籍

氏名

生年月

一 何年何月何日(官名官等又ハ月俸等)拜命

一 何年何月何日(ノ詳細ヲ記スヘシ)轉任

一 何年何月何日何々ニ付何賞下賜

一 何年何月何日何々ニ付何罰ニ處セラル

一 何年何月何日何々ニ付依願免職又免職
(以下條業上等ノ履歷モ
之ニ倣ヒ記載スヘシ)
右相違無之候也

年月日

右 氏名 印

宮崎縣知事某殿

○本 達第四一三號 二十二年六月廿五日(警察本部)

巡查採用手續

第一條 巡查ハ必ス試験合格ノ上採用ノ手續ヲ爲スヘシ

第二條 巡查採用ハ巡查採用規則第五條及其各項ニ適合スルモノニ限ルヘシ

第三條 巡查採用規則第六條ノ各項ニ抵觸スル者ハ採用スヘカラス

第四條 巡查教習所科程卒業待命ノ者巡查ニ必要ナル品位ヲ失ヒタルトキハ直ニ巡

査受業生ヲ免スヘシ

第五條 受業生ノ月俸四圓新任巡查ノ月俸ハ六圓ヲ給スルモノトス

但甲種ノ技藝ニ適合シ及科程ノ成績優等ニシテ相當ノ履歷アルモノハ七圓以上

ニ採用スルコトアルヘシ

第六條 試験合格者ノ身元及前職務ハ必ス採用前ニ於テ取調ヲ爲スヘシ

第七條 熊本鎮臺所管ノ後備軍豫備軍ノ者ニ限り照會ノ上差支ナキトキハ採用スル

コトヲ得

第八條 試験ハ警務課警部警部補及巡查教習所教官ニ於テ之ヲ行ヒ課長監臨スヘシ

第九條 体格ノ強弱疾病ノ有無等ハ醫員ニ於テシテ其他ハ試験官ニ於テ検査スヘシ

第十條 試験官ハ試験ノ結果ヲ検査表ニ記入スヘシ

但問答ハ本人ノ志向及從來ノ履歷技藝等ヲ試ミルモノトス

第十一條 試験官ハ試験問題ヲ提定シテ警部長ノ認可ヲ受ケ施行スヘシ
 第十二條 試験合格者夥多ニシテ同時ニ採用スル能ハザルトキハ(欠員少數ニシテ
 合場)其優劣ヲ鑑別シ劣者ノ願書ハ却下スルコトヲ得 (合格者夥多ナル
 第十三條 試験不合格者ハ試験官ニ於テ直ニ願書ヲ却下シ其事由ヲ検査表ニ摘記ス

但合格者ニシテ採用シ難キ事情アルモノハ警部長ノ指揮ヲ待ツヘシ
 第十四條 巡查奉職中ノ者ハ身元引受人タルヲ得セシムヘカラス
 第十五條 検査ノ結果ハ巡查採用願ニ添付スヘシ

按發検査例
 第十六條 試験ノ科目ヲ甲乙ノ二種トス

科目	甲	乙
法律規則	刑法治罪法警察法規ノ類	警察法規警務要書ノ類
歴史地理	日本外史十八史畧兵要日本地理小誌ノ類	内國史畧日本地誌畧ノ類
算術	文論文ノ類但片假名交リ	普通往復文ノ類
筆記	術正比例轉比例	加減乗除ノ類
問答	記措書行書ノ類	措行草書ノ類
口述		口述

第十七條 試験ノ全点数ハ讀書二十点作文十点算術十点筆記十点同答二十点ト定ム
 第十八條 試験ノ結果ヲ合格不合格ノ二等ニ分チ毎科半数以上ヲ得ル者ヲ合格トシ
 其半数ニ滿タサル者ヲ不合格トス
 第十九條 甲種ノ試験ヲ受ケタル者不合格ナリト雖モ乙種ニ適合スルトキハ乙種ノ
 合格者トナスコトヲ得
 第二十條 試験科目ノ点数ハ左ノ例ニ因テ定メ一失毎ニ一点ヲ減スヘシ

欠

MISSING

○敕令第三十七號二十年七月二十三日

文官試験試補及見習規則

第一 通則

第一條 本令ニ於テ文官ト稱スルハ奏任判任ノ文官ヲ總稱シ試補ト稱スルハ敕令第十三號學位令ニ依リ法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケ又ハ法科大學文學大學及舊東京大學法學部文學部ヲ卒業シ又ハ高等試験ヲ經當選シテ高等官ノ實務ヲ練習スル者ヲ云ヒ見習トハ官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受ケル私立法學校及司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ及普通試験ヲ經當選シテ判任官ノ事務ヲ練習スル者ヲ云フ

本令ニ於テ司法官ト稱スルハ裁判官及檢察官ヲ總稱ス

第二條 第三條第四條ニ掲グルモノヲ除クノ外本令ニ依リ定規ノ試験ヲ經當選シタル者ニアラサレハ試補及見習ニ任命スルコトヲ得ス又舊實練習ヲ終リタル者ニアラサレハ本官ニ任スルコトヲ得ス

第三條 三年以上分科大學ノ教授ニ任シタル者ハ高等試験及實務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任シ法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケタル者又ハ法科大學文科大學舊東京法學部文學部ノ卒業生ハ高等試験ヲ要セス試補ニ任スルコトヲ得

司法官タルノ資格ヲ有スル者ニシテ他官ヨリ司法官ニ轉任スルトキ又ハ司法官タルノ資格ヲ有シ三年以上代言人タル者ハ實務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任スルコトヲ得

第四條 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受ケル私立法學校及司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ普通試験ヲ要セス判任官見習ヲ命スルコトヲ得

第五條 試験ヲ分テ高等試験普通試験ノ二種トス

高等試験ハ試験ニ用セラルコトヲ望ムモノ、爲ニシ普通試験ハ判任官見習ニ任
用セラレシコトヲ望ム者ノ爲ニス

第六條 試験ハ筆記口述ノ二様トス筆記試験ニ落第シタル者ハ口述試験ヲ受クルコ
トヲ得ス

第七條 試験ハ筆記口述ノ二様ニ就キ各科ノ点数ヲ合算シタル一定平均点数ヲ以テ
合格ヲ定メ時々官廳ノ關係ニ應シ人員ヲ限リ内閣ニ於テ合格者中ヨリ選抜シテ當
選者ヲ定ム但一科目ニ付一モ点数ナキ者ハ合格者トスルコトヲ得ス

第八條 前條ノ選抜ニ當ラサル者ハ合格者ト雖モ再ヒ文官ノ任用ヲ望ムトキハ更ニ
本令ニ依リ試験ヲ受クヘシ

第九條 試験ニ必要ノ参考書類及紙墨ハ試験室ニ備ヘ置キ受験人ノヲ携帶スルコト
ヲ許サス

第十條 試験當選者ノ姓名ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十一條 第九條ヲ犯シ若クハ不正ノ方法ヲ以テ當選シ他日其事ノ發覺シタルトキ
ハ當選ノ効ナキモノトス

第十二條 第九條ヲ犯シタル者及ヒ第十一條ノ處分ヲ受ケ又ハ不正ノ方法ヲ以テ當
選セント企テタル者ハ再ヒ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十三條 第十八條第二十三條第三十三條第三十六條ノ履歴書中事實ヲ隱匿シ又ハ
之ヲ偽リタル者ハ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十四條 試験ニ關スル細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條 本令施行ノ後五箇年間ハ事務練習中ト雖モ本官ノ缺アルトキハ其練習ノ
滿期ヲ待メシテ本官ニ任スルコトアルヘシ

五箇年以上奏任官ヲ勸メタル者ニシテ高等試験ヲ經當選シタル者ハ事務練習ヲ要セズ直チニ本官ニ任スルコトヲ得

第二 高等試験

第十六條 高等試験ハ各應ノ須要ニ從ヒ時々東京ニ於テ試験委員之ヲ行フ其期日及場所ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十七條 高等試験ヲ受クルコトヲ得ル者ノ左ノ如シ

一 丁年以上ノ男子

一 外國ニ於テ大學校又ハ之ト同等ナル學校ノ卒業證書ヲ有シ又ハ三年以上其學科ヲ修學シタル旨ヲ證明スル證書ヲ有スル者

一 文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學政治學又ハ理財學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

一 高等中學校及東京商業學校ノ卒業證書ヲ有スル者

一 五箇年以上奏任官ヲ勸メタル者

第十八條 試験願書ハ其時々官報ヲ以テ公告スル期日前ニ左ノ證書ヲ取添之ヲ試験委員長ニ差出スヘシ

一出願者ノ履歷書

一 第十七條ニ掲クル卒業證書及修學證書ノ寫

一 身分職業年令及兵役ニ關スル區戸長ノ證書

第十九條 高等試験ノ科目ハ試験ヲ行フ年毎ニ司法官又ハ行政官ノ別ニ依リ各官廳所掌ノ事務ヲ斟酌シテ文官試験局長官之ヲ選定シ試験ノ期日三箇月前ニ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第二十條 第三條第四條ノ資格ヲ具スル者ヲ除クノ外教官技術官其他特別ノ學術技

藝ヲ要スルモノハ別段ノ試験法ヲ定ムルマテ各官廳ノ需要ニ從ヒ試験ヲ經スシテ之ヲ任用スルコトヲ得

第三 試補

第二十一條 試補ハ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ定限ヨリ短カラサル期限間事務ヲ練習スヘシ

第二十二條 各官廳試補ノ定員ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第二十三條 法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケタル者又ハ法科大學文科大學及舊東京大學法學部文學部ノ卒業生ニシテ行政官又ハ司法官ノ試補タラシキコトヲ望ム者ハ左ノ書類ヲ取添其旨ヲ文官試験局長官ニ出願スヘシ
二十一年十二月敕令第九十八號ヲ以テ(取添)ノ(下高等試)十一字ヲ削除ス
一出願者ノ履歷書
一學位又ハ卒業證書ノ寫
一身分年齡

第二十四條 行政官ノ試補ハ便宜ニ從ヒ少クモ一箇年半ハ地方官廳一ヶ年年ハ中央官廳ニ於テ其事務ヲ練習スヘシ

第二十五條 司法官試補ハ便宜ニ從ヒ少クモ一箇年半ハ治安裁判所一箇年半ハ始審裁判所ニ於テ其事務ヲ練習スヘシ

第二十六條 試補ハ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ事務ヲ練習スルニ付テハ其主務長官ノ指揮監督ヲ受クヘシ

第二十七條 主務長官ハ事務練習ノ終ニ於テ試補練習ノ功程ヲ所屬大臣ニ具狀シ其意見ヲ提出スヘシ

第二十八條 所屬大臣ハ練習期限中ト雖モ試補官吏ニ必要ナル品位ヲ失ヒタルモノ

ト認ムルトキハ一補ヲ充スヘシ

第二十九條 在職ノ判任官ニシテ高等試験ヲ經營シタル者ハ事務練習ヲ要セス欲員アル場合ニ於テハ直子ニ本官ニ任スルコトヲ得

第三十條 試補ノ命ヲ承ケ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ事務ヲ練習セサル者ハ試補ヲ免スヘシ

第四 普通試験

第三十一條 中央官廳ニ於テ要スル判任官ノ普通試験委員之ヲ行フ其期日場所ハ時々其官廳ヨリ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第三十二條 地方官廳ニ於テ要スル判任官ノ普通試験ハ又官廳ノ需シ府縣ノ普通試験委員之ヲ行フ其期日場所ハ時々普通試験委員長ヨリ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公告ス

第三十三條 試験願書ハ本人自ラ之ヲ認ノ其時々公告スル期日前ニ左ノ證書ヲ取添之ヲ普通試験委員長ニ差出スヘシ
一出願者ノ履歷書
一身分職業年齡及兵役ニ關スル區戸長ノ證書

第三十四條 普通試験ノ科目ハ各官廳所屬所掌ノ事務ヲ斟酌シテ普通試験委員之ヲ選定シ文官試験局長官ノ認可ヲ經テ試験ノ期日一箇月前ニ官報又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ報告スヘシ

第五 判任官見習

第三十五條 各官廳ハ其需要ニ從ヒ官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校又ハ司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ普通試験ニ及第シタル者ニ判任官見習ヲ命スヘシ

判任官見習ヲ命セラレタル者ハ所屬長官ノ指命スル所ニ就キ二箇年ヨリ短カラザル期限間事務ヲ練習シ判任官ノ缺員ヲ待テ本官ニ任セラレハシ

第三十六條 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校又ハ司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ判任官見習タラシコトヲ望ム者ハ左ノ書類ヲ添ヘ主務官廳ニ出願スヘシ
（二十一年十二月敕令第九十八號）
一 出願者ノ履歷書
一 卒業證書ノ寫

一 身分職業年齢及兵役ニ關スル區戸長ノ證書

第三十七條 所屬長官ハ判任官見習官史ニ必要ナル品位ヲ失ヒタル者ト認ムルトキハ判任官見習ヲ免スルコトヲ得

第三十八條 本令施行ノ前二箇年以上各官廳ニ於テ雇員トナリタル者ニシテ事務ニ熟練シタル者ト本屬長官ニ於テ認ムルトキハ試驗ヲ要セス直チニ判任官ニ任スルコトヲ得

第三十九條 本令ハ明治二十一年一月ヨリ施行ス

○本署規第五號 二十二年三月二日（警察署）
○部警訓第二六號（二十二年四月十五日）
（警察分署）
自今巡查内外勤豫備ノ辭令ハ左ノ種別ニ依リ授與シ其人名ハ速ニ本官ニ報告セラレハシ

一 內勤ヲ命ス
一 豫備ヲ命ス
一 第一何號所在地ヲ持テ命ス
一 第一何號何々巡查註在所勤務ヲ命ス
一 第一何組合長ヲ命ス

○敕令第八號 二十三年二月四日

第一條 前ニ奏任文官ヲ勤ノタル者及滿三年以上判任官ヲ勤績シタル者ハ明治二十年敕令第二十七號ニ依リ高等試驗ヲ受クルコトヲ得

第二條 明治二十年敕令第三十七號ニ依リ高等試驗ヲ受テ合格シタル者ハ文官試驗局長官ヨリ高等試驗合格證書ヲ付與スヘシ高等試驗合格證書ヲ得タル者ハ官廳ノ需要アルニ當リ高等官試補ニ任スルコトヲ得

第三條 滿三年以上奏任文官ヲ勤メ退官シタル者及滿五年以上判任文官ヲ勤メ退官シタル者ハ試驗及事務練習ヲ要セスシテ前官同等若クハ其ノ以下ノ文官ニ任スルコトヲ得

第四條 奏任又ハ判任ノ文官ヨリ轉任シタル官立學校ノ教官及府縣立學校ノ職員ハ更ニ前官同等若クハ其ノ以下ノ文官ニ轉任スルコトヲ得

第五條 各官廳ハ其需要ニ從ヒ官立府縣立中學校又ハ此ト同等ナル官立府縣立學校及特別認可學校又ハ司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有スル者又ハ明治二十年敕令第三十七號ニ依リ普通試驗ニ及第シタル者ヲ舉テ直ニ判任文官ニ任スコトヲ得

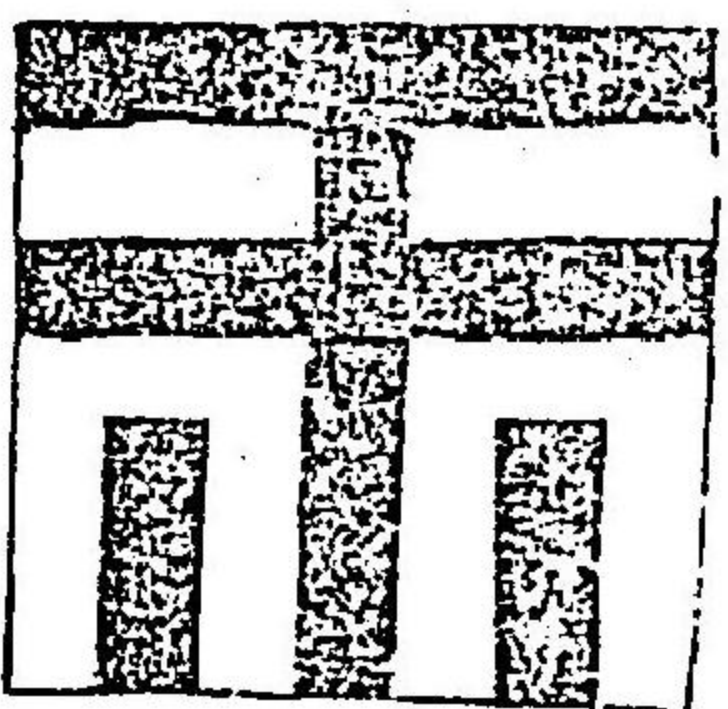
第六條 試驗ハ本邦ノ成法條例及一般ノ學理ヲ以テ問題ト爲スヘシ但シ受檢者應答ヲ爲スニ當リ外國ノ法例ヲ參照ニ引擧スルコトヲ得
特別ノ必要ニ依リ外國語ヲ試驗問題ト爲スハ前項ノ限ニ在ラズ

第七條 本令ハ明治二十年敕令第三十七號第廿條ニ依リ試験ヲ經シテ任官シタル者並ニ明治二十一年以後郡區長ノ試験ニ及第シテ任官シタル者ニ適用セス

○敕令第十號 二十三年二月四日
巡查奉職滿五年以上ニシテ補勸證書ヲ有シ現ニ其職ヲ奉スル者ハ文官試験試補及見習規則第二條ノ規定ニ據ラス文官普通試験委員長ノ詮衡ヲ經テ警部警部補ニ任用スルコトヲ得

但試験ヲ經スシテ任用シタル警部警部補ハ普通試験ヲ經ルニアラサレハ他ノ判任官ニ轉スルコトヲ得ス

○内務省訓令第十六號 二十三年三月二十六日(府縣東京府ヲ除ク)
明治二十一年十月三十一日訓令第六四號警察官吏配置及勤務規則第六章ニ據リ勤務上ノ監督ヲ補助セシムル爲メ巡查部長ノ職ヲ置キ月俸十圓以上ノ巡查ヲ以テ之レニ充ツルコトヲ得巡查部長ハ巡查ノ上班トシ警部補ニ亞クノ待遇ヲ受クヘキモノトス巡查部長ハ上衣並ニ外袴ノ左腕ニ左ノ雛形ノ徽章ヲ付スヘシ



(ハ紐)

製式

方一寸ノ白紙ニ幅一分

五厘ノ紺綫ヲ以テ之ニ

縫着ス

○警訓第一六號 (二十三年四月十二日)
巡查部長ハ巡查勤務上ノ監督ヲ補助セシムルノ職ニ付別ニ監督ヲ命スルニ及ハス專ラ監督ニ從事セシムヘシ

○本規第九號 (二十三年四月九日)
分署勤務ノ巡查ハ是迄警察署限詰替和達來リ候處自今警察署詰替ト同ク警察本部ニ於テ可取扱候條右詰替ヲ要スル節ハ署長ヨリ警部長ニ具申セラルヘシ

○第二十章 司法

○布告第三十一號 十八年九月二十四日
明治十四年九月第四十四號布告及ヒ同年十二月第八十號布告ヲ廢止シ違警罪即決例別紙ノ通制定ス

別再

第一條 警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ但私訴ハ此限ニアラス

第二條 即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒス被告人ノ陳述ヲ聽キ證據ヲ取調ヘ百チニ其言渡ヲ爲スヘシ

又被告人ヲ呼出スルコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セサル時ハ直チニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得

第三條 即決ノ言渡ニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經スシテ直チニ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第四條 即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名年齢身分職業住所犯罪ノ場所年月日時罪名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ

第五條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ申立書ヲ差出スヘシ但其期限ハ第二條第一項ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヨリ三日内第二項ノ場

合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

第六條 警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致スヘシ

第七條 第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル時ハ即決ノ言渡ヲ以テ確定ノモノトス

第八條 科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第九條 科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ若シ納メサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第十條 拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一圓ニ折算シ其刑期ニ相當ノ金額ヲ保證トシテ差出サシムヘシ若シ差出サ、ル者ハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日内ナル時ハ其日數ニ過クルコトヲ得ス

第十一條 保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直チニ出廷シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出廷セサル時ハ保證金ヲ没入シテ本刑ニ換フ

第十二條 留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達アリタル時ハ直チニ留置ヲ解クヘシ

第十三條 留置ノ日數ハ一日ヲ一圓ニ折算シテ科料ノ金額ニ算入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ

○本縣丁第五十二號 十八年十月（警察本署警察署）全分署

違警罪即決処分手續並附錄別紙ノ通相定候條此旨相達候事

第一條 告訴告發ヲ受理シタル時ハ被告人ノ陳述ヲ聽クヘシ但自首若クハ召喚シタリト雖モ出廷セサルトキハ飲席ノ儘処分スルモノトス

第二條 引致若クハ召喚シタル被告人ハ直ニ訊問シテ調書ヲ作り即決ノ手續ヲナスヘシ

第三條 召喚狀ハ所屬小使又ハ郵便等便宜ニ從ヒ送達スヘシ

第四條 若シ證人又ハ鑑定人ヲ要スルモ正式ヲ履行セス便宜ノ方法ニ從ヒ他日證明ニ差支ナキ様処置スヘシ

第五條 被告人管轄地外ニアル時ハ所在地ノ警察署分署ニ其処分方ヲ囑託スルコトヲ得

第六條 廿三年三月訓令第七十五號ヲ以テ削除ス

第七條 即決例第二條第二項ノ場合ニ於テハ所屬小使ヲシテ送致セシムヘシト雖モ若シ被告人所在遠隔ノキハ其戸長ニ送達ノコトヲ囑託スヘシ

第八條 被告人軍人軍屬ナルトキハ之ヲ処分シ後言渡書ノ寫ヲ添へ警察本署へ通報スヘシ

第九條 警察署分署ニ於テハ毎月違警罪即決表ヲ調製シ翌月五日限り檢察官ニ差出スヘシ

但分署ノ分ハ所轄警察署ヲ經由スヘシ

第十條 即決ノ言渡確定シタル科料金並没入シタル保證金ハ收入官吏ニ送付シ且即決ノ言渡確定シタル後徵收スル科料金ハ收入官吏ニ於テ取扱フモノトス

沒收物品ハ公賣ノ上其代金ハ收入官吏ニ於テ徵收スルモノトス（二十三年三月訓令第七十五號ヲ以テ改正ス）

第十一條 即決例及ヒ此手續ニ定メタル外ハ都テ刑法治罪法ノ手續ニ從フヘシ

第十二條 警察署分署於テハ左ノ帳簿ヲ備へ署クヘシ

一 違警罪臺帳

受付タル月日番号及ヒ告訴告發人被告人ノ住所氏名其他罪名等該事件ニ關スル都テノ要領ヲ記スルモノトス

一 違警罪判決録

處分濟ニ係ル關係書類ニ番号ヲ付シ編入スルモノトス

違警罪即決処分手續附録

第一號 (告發書式)

告發書

明治何年何月何日何時何府(縣)何國何郡(區)何町(村)身分職業何ノ誰年齡ハ何所ニ於テ云々ノ事ヲ爲シタルハ違警罪ニ觸ル、モノト思量スルヲ以テ此旨告發ス (被告人)ラサルヲ以テ引致ノ上此旨告發スト記スヘシ

何警察署(又ハ分署)詰

年月日

官

姓

名

印

何警察署(又ハ分署)長

官

姓

名

宛

第二號

(口述ヲ以テ告訴シタル調書式)

調書

住所身分職業

告訴人

氏

名

年齡

一何年何月何日何時何國何郡(區)何町(村)何ノ誰何所ニ於テ自分ハ突當リ何ヲ以テ打擲シタルニ依リ此段告訴候事

右相違ナキ旨申立ツルニ付共ニ署名捺印ス

年

署

印

日

氏

名

印

(署名スル能ハサルト)キハ其事由ヲ記ス

何警察署(又ハ分署)

官

姓

名

印

第三號

(召喚狀書式)

(用紙西ノ内四ツ切)

召喚狀

住所身分

氏

名

○主任認印

右何々ノ事件ニ付訊問ノ筋有之候條何月何日何時當署へ出頭可致者也 但代人ヲ差出スモ苦シカラス

年月日

何警察署(又ハ分署)印

第四號

(被告人訊問調書式)

(告訴告發狀ノ紙尾ニ認ム)

右讀聞セタル処相違ナキ旨申立ルニ付共ニ署名捺印ス

年

署

印

日

氏

名

印

(署名スル能ハサルト)キハ其事由ヲ記ス

何警察署(又ハ分署)

官

姓

名

印

第五號

(言渡書式)

言渡

住所身分職業

氏 名

年齢

其方儀明治何年何月何日何時何所ニ於テ何々シタル所爲刑法第何條第何項(又ハ縣設違警罪第何條第何項)ヲ犯シタル者ニ付(無罪ナレハ無罪ノ證)ヲ舉ケテ無罪ト書ス)拘留何日(又ハ科料何圓)申付ル

但何々ハ沒收ス

此言渡ニ對シテハ三日内(又ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内)ニ正式裁判ヲ請求スルコトヲ得

宮崎縣何警察署(又ハ分署)長

年 署
月 日
官 姓 名 印

(科料及ヒ保證金ヲ仮納セシムル場合ハ左ノ例ニ依ル) 違警罪即決例第何條ニ依リ此言渡ニ對スル科料金何圓直ニ仮納スヘシ(又ハ此言渡

ノ刑 期ニ相當スル金圓保證トシテ差出スヘシ) (飲席ノ儘処分シテ科料及ヒ保證金ヲ

仮納セシメサル場合ハ左ノ例ニ依ル) 言渡確定後十日内ニ科料金ヲ納完スヘシ(又ハ言渡確定シタルトキハ直ニ出頭シテ

刑ノ執行ヲ受クヘシ) 第六號(二十二年九月訓令第二) 第七號(領收證書式)

第七號 (領收證書式)

一 (違警罪臺帳中科料仮納又ハ保證金徵收ノ部ト割印ス)

差出人 氏 名

印割 一金何圓 ○主任印

但違警罪科料仮納金又ハ保證金

右領收候也 何警察署長又ハ分署長 官 氏 名 印

第八號 (科料ヲ拘留ニ換フル命令書式)

命令書

住所身分

氏 名

右明治何年何月何日違警罪ヲ犯スニ因リ科料何拾錢申付ル処限内納完スル能ハサルニ付刑法第三十條ニ依リ拘留何日ヲ命スルモノ也

宮崎縣何警察署(又ハ分署)長

年 署
月 日
官 姓 名 印

其二 (仮納金及保證金ヲ留置ニ換ル命令書式) 命令書

住所身分

氏 名

右明治何年何月何日違警罪ヲ犯スニ因リ科料何圓(又ハ拘留何日)申付ル処科料ヲ仮納スル能ハサルニ付(又ハ其刑期ニ相當スル保證金何圓ヲ差出ス能ハサルニ付)違警罪即決例第何條ニ依リ何日間留置スルモノ也

宮崎縣何警察署(又ハ分署)長

年 署
月 日
官 姓 名 印

違警罪台帳形 領收証割印

第一編第二十章司法

第	年	月	日	號	犯罪別	刑名	宣告	科納額	全上月日	換刑言渡	全上期限	科料	仮納	保證	收金徵	領收証割印		
																	○署長印	○主任印
罪名	保証金	沒入	管轄ノ言渡	無罪	免訴	棄却	消滅	願下	被告人ノ請求ニヨリ治安廳回シ	犯數	受付主任	被	告	人	告	人		
○署長印	○主任印	○署長印	○主任印	○署長印	○主任印	○署長印	○主任印	○署長印	○主任印	○署長印	○主任印	○署長印	○主任印	○署長印	○主任印	○署長印	○主任印	
本籍	住所	身職	業氏名	生月日	被	告	人	告	人	告	人	告	人	告	人	告	人	
波收	物件及其	月日	沒收	品公	賣	公賣	代金	年	月	日	○署長印	○主任印	○署長印	○主任印	○署長印	○主任印	○署長印	○主任印

一八七

送達証		受領人氏名		何警察署(又ハ分署)印	
一言渡書		壹通		右送達候也	
年月日		何月何日調		署長官氏名印	
受領		年月中何署		違警罪即決件數表	
受領人又ハ仮ニ領置シタルモノ左ニ記名捺印ス若シ能ハサルトキハ其事由ヲ記スヘシ		惣件數		言渡件數	
明治 年 月 日		無罪		免訴	
		刑ノ言渡		區分	
		上數ノ内正式ノ		裁判ヲ請求ス	

○警訓第二一號 (二十三年四月十九日)
 今般訓令第百二十八號ヲ以テ違警罪或帳様式中「受付」ノ二字削除相成候ニ付テハ(第號)(年月日)トアルハ受付番號月日ニ依ラス記帳ノ順序ニ從ヒ一號ヨリ順次起號セラルヘシ

○司法丙第拾一號 十八年二月十二日(警視廳 府縣「東京府」)
 本年九月第三拾一號布告ヲ以テ違警罪即決例制定ニ付テハ右統計材料ニ供シ候間左ノ表式并書例ニ據リ毎年一月ヨリ十二月マテノ即決事件ヲ記載シ翌年二月マテニ取纏メ差出ス可シ此旨相違候事

但即決例施行前ノ例 本年九月當省ニ依リ調製スヘシ
 明治何年 警視廳 何警察署(又ハ分署)
 丙第八號達
 違警罪即決表

違警罪ノ性質	件數		四言渡區分人員	拘留	留置	科料	計
	二	三					
刑法第四百二十五條 規則ヲ遵守セスシテ火藥ヲ市街ニ運搬シタルモノ 三官許ヲ得スシテ烟火ヲ製造シ又ハ販賣シタルモノ 二十公然人ヲ罵詈シタルモノ 何府縣違警罪	男	女					
計(刑各條ノ通計)							
計(地方ノ便宜ニ因リ設ケタル違警罪)							

合 計
 明治何年 警視廳 何警察署(又ハ分署)
 諸規則違犯即決表

諸規則違犯	件數		四言渡區分人員	科料	計	附加
	二	三				
酒造稅則	男	女				
烟草稅則	男	女				
諸規則違犯						
計						
收沒						

明治何年 警視廳 何警察署(又ハ分署)
 別號第一表

科	人員	金額
一完納		
二假納シテ正式ノ裁判ヲ請求セサルモノ		
三不完納		
四假納セサルニ因リ留置セシモノ		
五幾部否納		
六未納否(幾部否)		
換		
刑		
人		
員		

七科料ヲ拘留ニ換ヘシモノ

明治何年 警視廳 何警察署(又ハ何分署)

別號第二表

拘留人員	員
一執行濟	
二保証金ヲ差出ササルニ付 留置シタルモノ	
三保証金ヲ差出シタル後出 廷シテ執行ヲ受ケタルモノ	
四保証金ヲ差出シタル後出 廷セサルニ因リ保証金ヲ 没入シタルモノ	
計	
没入保証金何圓何拾錢 (第四項ニ掲ケタル人員ニ對スル金額ナリ)	

違警罪即決表書例

本表欄外年號并署名標題等總シテ表式ニ照ラシ記載ス可シ但表中員數ノ記載方ハ千百十九件ナレハ「一、一一九」ト記シ一万千三百九十人ナレハ「一、一三九〇」ト記スヘシ

第一欄ハ刑法ノ各條項ヲ區別シ又男女員數ヲ區分スルヲ表式ニ示シタルガ如シ何縣違警罪トアル以下ハ刑法第四百三十條ニ係ル犯罪ノ各項ヲ區別列載スヘシ
第二欄ハ告訴發其他ノ區分ヲ問ハス即決セシ總件數ヲ記スルモノトス但一事件中ノ被告人ニ男アル時ハ第一欄男ノ下ニ件數ヲ記シ女ノ下ニハ之ヲ省クヘシ又一人ニシテ數罪ヲ犯シ各其刑ヲ科シタル時ハ刑ノ重キ者ニ就キ其等シキ時ハ第一欄罪目記載ノ前後ニ從ヒ前記罪目ノ下ニ件數ヲ記シ他ノ罪目ノ下ニハ之ヲ省キ件數重

複セサルヲ要ス

第三欄ハ同上ノ惣人員ヲ記スルモノトス但一人ニシテ數罪ヲ犯シ各其刑ヲ科シタル時ハ刑ノ重キモノニ就キ其刑等シキ時ハ第一欄罪目記載ノ前後ニ從ヒ前記罪目ノ下ニ其數ヲ記シ他ノ罪目ノ下ニハ特ニ朱字ヲ以テ其數ヲ記シ總人員ト重複人員トヲ識別スルニ便ナラシム可シ

第四欄ハ言渡ノ區分ニ從ヒ其人員ヲ記載スルモノトス但科料金完納セサルヲ以テ拘留ニ換ヘタルモノハ別號表ニ記載スヘキモノナルカ故此ニ混記セサルヲ要ス
若シ拘留五日ニ該當スルモノ再犯加重ニ因リ六日以上ニ入り科料一圓未満ノモノ加重シテ一圓以上ニ入ルノ類ハ左ノ如ク表外ニ附記スヘシ

刑法第何條何項ニ係ル拘留何日以上ノ内再犯ニ因リ加重ノ者何人何縣違警罪何々(罪狀ヲ云フ)ニ係ル科料一圓以上ノ内再犯ニ因リ加重ノ者何人
第五欄ハ無罪以下科料ニ至ル迄ノ人員ヲ通計スルモノトス即チ第三欄ノ人員ト同一ナルヘシ

諸規則違犯即決表書例

本表欄外年號并署名標題等總シテ表式ニ照シ記載ス可シ但表中員數ノ記載方ハ違警罪即決表ニ同シ

第一欄ハ諸規則ノ各自ヲ列載シ又ハ男女ノ員數ヲ區分スルヲ表式ニ示シタルカ如シ
第二欄以下各欄ノ書例ハ總シテ違警罪即決表ニ同シ但本表ハ第一欄ニ掲ケタルノ罰則ヲ以テ一罪トナスカ故一罰則中ノ各條項ヲ犯シ各其刑ヲ科シタル時ハ之ヲ合算シテ表記スルモノトス若シ將來表式記載外ノ條件起ル時ハ隨時各欄各項ヲ設ケサルヲ得サルコトアルヘシ即チ拘留ニ係ル者アル如キハ科料ノ上一項(違警罪ニ準シテ目)ヲ設ケルノ類是ナリ

別號表書例

本表欄外年號并署名標題等總シテ表式ニ照シ記載スヘシ但各表員數ノ記載方ハ違
警罪即決表ト同シク數字ヲ以テ記入シ千位ニ、点ヲ附シ金額ノ圓位ニハ、点ヲ附
シ厘位ニ止マルモノトス

第一表

第一項ニハ科料ノ言渡(違警罪即決例第八條ニ據テサルモノ)ヲ受ケタル金額ヲ悉皆收納セシ者ニ就キ

其人員及金額ヲ掲グルモノトス但前年ノ言渡ニ係ルモノト雖モ本年ニ至リ收納セ
シ者ハ此ニ合ス以下各項モ亦此例ニ依ルヘシ

第二項ニハ即決例第九條ニ依リ科料金ヲ假納セシノタル後其言渡確定シタル人員及
金額ヲ掲グルモノトス

第三項ニハ言渡シタル科料金完ク收納シ能スシテ拘留ニ換ヘタル人員及其金額ヲ掲
ルモノトス

第四項ニハ科料金ヲ假納セサルニ因リ留置セシ人員及其金額ヲ掲グルモノトス

第五項ニハ言渡シタル科料金額中ノ幾部ヲ收タル人員ト其納否金額ヲ區別掲載スル
モノトス即チ科料壹圓ノ言渡ヲ受ケタル者(姑ラク一人)資力少クシテ僅ニ貳拾五

錢ヲ納メ殘金七十五錢ハ收納スル能ハサルヲ以テ拘留ニ換ヘシ時ハ人員ノ欄ニ於
テ納否ノ中間ニ一ト記シ金額ノ欄ニ於テ納ノ下ニ〇、二五〇ト記シ否ノ下ニ〇、七

五〇ト記スルノ類ナリ

第六項ニハ納期限内ニ在テ未タ全部ヲ納メヌ又ハ金額ノ内幾部ヲ納メ又ハ納期過去
ルモ逃走等ノ事故ニ依リ年未マテ終否未定ニ係ル人員及金額ヲ掲グルモノトス例

ハハ壹圓ノ言渡ヲ受ケタル者二人アリテ未タ全部ヲ納メサル時ハ全部ノ下人員ノ
欄ニ於テ二ト記シ金額ノ欄ニ於テ二、〇〇〇ト記シ又五拾錢ノ言渡ヲ受ケタル

者三人ノ内一人ハ四十錢一人ハ三十錢一人ハ貳拾錢ヲ納メ殘金ノ納否未タ決セサ
ルヲ以テ換刑スルニ至ラサル時ハ人員ノ欄ニ於テ納否ノ中間ニ三ト記シ金額ノ欄
ニ於テハ納ノ下〇、九〇〇否ノ下ニ〇、六〇〇ト記スルノ類ナリ

第七項ニハ第三項第五項ノ人員中禁錮ニ換ヘシ者ヲ掲グルモノトス

第二表
本表各項各欄ノ記載方ハ表式ニ詳ラカナルヲ以テ更ニ説明ヲ要セス

右書例ニ從ヒ製表シ尙ホ左ノ通心得ヘシ

一 違警罪諸規則違犯ノ處分ヲ甲ノ警察署(分署モ包含ス以下同シ)ヨリ乙ノ警察署ニ囑託シタル
場合ニ於テ其全部(被告人ノ尋問ヨリ言渡書ニ至迄)ノ囑託ニ係ルモノハ乙警察署ニ於テ製表シ一

部(被告人ノ尋問或ハ言渡書ノ傳達若クハ科料金保)ノ囑託ニ係ルモノハ甲警察署ニ
於テ製表シ彼此重複セサルヲ要ス

一 各表ノ用紙ハ義濃又ハ同形ノモノヲ用ヒ進達ノ時左式ニ從テ其目錄ヲ添フヘシ

違警罪各表進達目錄
明治何年 警視廳 何府縣 何警察署

違警罪即決表 何枚

同 何枚
一 諸規則違犯即決表 何枚
同 何枚
一 別號第一表 何枚
同 何枚
一 同第二表 何枚
同何分署 何枚

一 違警罪即決表

何枚

同 一 諸規則違犯即決表

何枚記事ナシ

同 一 別號第一表

何枚 何々ノ事故アリ取摺メ難キニ因リ何月迄ニ進達ノ見込

同 一 別號第二表

何枚

右進達候也

年 月 日

何處府 長 官 氏 名

司法卿宛

○司法丙第九號 十八年十一月五日(警視廳 府縣「東京府」ヲ除ク)
本年九月第三十一號ヲ以テ違警罪即決例ノ布告アリタルニ付テハ明治十四年十二月當省丙第十九號達山違警罪事件表ヲ廢シ更ニ左ノ通違警罪即決表ヲ調成シ差出方從前ノ例ニ因ルヘシ此旨相達候事

明治何年何月中何警察署(又ハ何署)違警罪即決件數表

何月何日調	署長 官 氏 名 印	違 警 罪 總 件 數		言 渡 件 數 區 分	
		無 罪	有 罪	上 數 ノ 內 正 式 ノ 裁 判 ナ	式 ノ 裁 判 ナ

一 犯罪事件ニ於テ比較シ甚ク増減ヲ生シタル時ハ表外或ハ別紙ニ署長ノ意見ヲ附スヘキ者トス(依令ハハ管内人口ノ増減其他ノ事故等ニ起因シテ増減ヲ致シタリト認メシ理由ヲ述ルノ類ナリ)

○司法丙第十號 十八年十二月九日(裁判所 府縣「東京府」ヲ除ク)
明治十五年三月當省丙第十二號ヲ以テ違警罪裁判言渡ノ謄本又ハ拔書ヲ下付ス可キ費用ハ當分徴收ス可カラサル旨相達置候宛本年九月第三十一號ヲ以テ違警罪即決例公布相成候付テハ自今該裁判ノ正式ニ係ルモノハ該費用ヲ徴收シ其即決ニ係ルモノハ從前ノ通取計可シ此旨相達候事

○本署甲第千三百二十七號 (十八年) (警部長ヨリ各署) (十二月) (警察署ヘ訓示)
今般司法卿ヨリ丙第十一號ヲ以テ違警罪即決表調製方達(官報第七百三十六號)相成候ニ付テハ調理上都合有之候條翌年一月十五日限り分署ノ分ハ其警察署ニ於テ取摺メ差出可有之此段及通達候也

○本縣知事ヨリ司法省ヘ伺 (十八年十月)(電報)
違警罪即決例ニ依リ書類進達及ヒ裁判ノ費用ハ總テ警察費ヲ以テ支辨シ可然哉至急御指令ヲ乞フ

○司法大臣ヨリ本縣知事ヘ指令 (十九年一月)
客年十月十二日電信伺違警罪即決例ニ據ニヨリ書類送達スルハ適宜之レテ巡查又ハ小使等ヲシテ送達セシムルハ妨ケナシ又本例ノ処分ニ係ル費用ハ刑事裁判費用ニ立

ヘキモノニアラサル儀ト心得ヘシ
○本署甲第一六號 (十九年二月) (本縣令ヨリ) (内務大臣伺)
違警罪即決例ニ依リ書類送達費用之儀ニ付伺

違警罪即決例ニ依リ書類送達費用ノ儀ニ付伺キニ司法省ヘ伺同別紙寫ノ通指令相成候処警察署分署所在地近傍ニ在リテハ右旨趣ノ通小使等ヲ使用シ送達セシメ來候得共當職管内ノ如キ山間僻地ニシテ一警察署所轄内十數里ニ渉ル個所有之斯ク遠隔ノ地ハ勿論數里ヲ隔ツル場所ニ至ルマテ巡查又ハ小使ヲシテ時々書類ヲ送達セシムル

ハ到底行ハレ難ク去リ連之ヲ郵送センカ被告人ニ於テ書類ヲ受ケタル時日ヲ知ルニ由ナケレハ裁判執行上差問候義ト存候間不得已被告人所在地戸長へ囑託スルカ又ハ時々人夫ヲ雇入レ書類ヲ送達セシムルノ外便法無之就テハ實際上書類送達ノ爲メ多少費用ヲ要スル場合往々有之候ニ付右等費用ノ義ハ警察費ヲ以テ支辨シ可然儀トハ被存候得共爲念相備候條至急御指令ヲ仰キ候也
指令 (十九年三月) (内務大臣)
書面伺ノ通

○司法省指令 (十八年九月) (大審院 警視廳 憲兵本部)
法律諮問會議決 (司法大臣ヨリ) (裁判所 府縣(東京府ヲ除ク))

竊ニ本會ニ付セラレタル罰金料ノ言渡ヲ受ケ限内納完セサル者換刑処分ノ件審議ノ末左ノ通決定ス

刑法第二十七條第四十二條等ニ記載シタル換刑ノ処分ハ素ト罰金ノ刑ヲ執行スル能ハサル場合已テ得サルニ出タルモノニシテ初メヨリ罰金ノ刑ハ如何ナル場合ト雖モ犯人ノ隨意ニ或ハ罰金或ハ禁錮ノ刑ヲ受シムルノ注意ニ非サルヤ明カナリ然ルニ限内納完セサル者ハ云々ノ法文アルヲ以テ或ハ限内納完セサルトキハ直チニ換刑ノ処分ヲ求ム可キカ如シト雖モ抑モ罰金料ノ言渡確定シタル上ハ政府ニ於テ既ニ疑テ債主ノ權ヲ有スルモノナレハ固ヨリ通常民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收スルヲ得可キヤ容レサルナリ故ニ罰金料ノ言渡ヲ受ケタル者限内納完セサルトキハ檢察官ニ於テ通常民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收シ猶ホ不足シタルトキ若クハ最初ヨリ無資力ト認メタルトキニ限り換刑ノ処分ヲ求ム可キモノトス
右法律諮問會第十則ニ依リ具申仕候也
○岩手縣ヨリ違違罪再犯加重ノ義伺 (十八年十月電報)

違 罪再犯加重ハ即決ヲナシタル警察署ノ所轄ニ依ルカ又ハ違違罪裁判所ノ所管轄ニ依ルカ

○司法省指令 (電報) (十八年十月)

本月二十日付違違罪再犯加重後段ノ儀ハ見込ノ通
○本縣訓令第二十號 (廿一年二月) (郡役所)
明法十九年九月内務省令第十九號各條ノ届出ヲ怠リタルモノハ繼續犯ニ付時日ノ經過ニ拘ハラス發覺ノトキ直ニ告發スヘシ

○本縣訓令第百號 (廿二年七月) (警察署)
全分署
刑法第四百二十七條第十及明治十九年内務省令第十九號第一條乃至第四條ノ違犯者ヲ明治十八年第三十一號布告違違罪即決例ニ據リ即決シ其裁判確定シタルトキハ其都度犯人本籍地ノ市役所又ハ町村役場へ通知スヘシ

(參照)
刑法第四百二十七條

第十 死亡ノ申告ヲ爲サスシテ埋葬シタル者
明治十九年内務省令第十九號
出生死亡出入及寄留者届出方

○司法刑第一一三號 (廿一年二月) (司法省刑事長ヨリ 裁判所 廳府縣 憲兵本部)
地券書換並ニ出產死亡等届出犯則者處分方ノ義ニ付第一地券書換又ハ出產死亡等ノ届出ヲ怠タル所爲ハ則時犯ナルヤ否第二數通ノ地券書換ヲ怠タル所爲ハ一通毎ニ一罪ヲ構成スヘキヤ否第三地券壹筆ノ地ヲ數通ニ分裂シ又ハ地券數通ノ地ヲ一筆ニ合併スルトキハ新ニ下付セラルヘキ地券ノ數ニ依リ罪ヲ論スヘキヤ否ヤノ三點ニ付大審院總會議ニ附セラレタル處甲號ノ通決定相成又該決議中第二項ハ書換ノ理由日